## ●教材觀

1, 題　目、　蜜柑ノ考察

（イ）産地トハ餘程遠イ本縣デハアルガ、蜜柑ハ早クカラ親シマレテ居ル果實デアル。

（ロ）蜜柑ヲ分割スル仕方ハ、料理用トスル特殊ナ場合ヲ除イテ、普通ハ果肉ノ嚢ノ接合シテヰル割レ目ニ沿ウテ分ケル場合ガ多イ。コレハ基數ノ部分ニ分割スル場合ノ材料トシテ好適ナルモノト言ヘル。

（ハ）蜜柑ノ構造ハ、群ト箇ガ緊密ナ關係ニアツテ、抽象數ノ除法トハ結ビツキヤスイ。而シテ等分除法ニ於ケル「割ル」ト言フ言葉ノ意味ヲ理解サセル場合ニ、普通ノ意味カラ、箇物ヲコハストカ元ニ還ラナイモノニナルト言フ意味ヲ除去スルニ都合ガ良イ。

（ニ）蜜柑ヲ割ル事ハ一人デ食ベル場合ニモ、二人或ハ三人デ食ベル場合ニモ、既ニ兒童ノ經驗シテヰル事ト思フ

以上ノ點カラ考ヘテ見ルト、題目選定ニ當ツテ、生活接近ト數理抽出ヘノ自然性トヲ狙ツタ意圖ガ明カニ見エル。

2, 等分ノ基礎觀念確立ノ過程

（イ）等分ノ基礎觀念建設ニツイテハ前學年カラ既ニ意ヲ用ヒテ來タトコロデアル。即チ

尋一下卷第二章「分ケ方ト差ノ求メ方」ニ於テ、

量ノ半分、數ノ半分ヲ取扱ツテ以來、處々ニ半分ヲ取扱ツタ。

尋二上卷四十二頁七番デ三等分ヲ、四十九頁デ四半分、五十二頁四番デ四等分、九十二頁デ二等分ヲ取扱ツテ居ルカラ或ル程度マデ等分ノ觀念ガ養成サレテ居ルモノデアル。



（ロ）本學年下卷デハ更ニ觀念ヲ明瞭ニスル爲ニ、

「鼠」ニ於テ、二位數ノ構成ヲ、等シイ二數デ構成サレテヰルト言フ立場カラ取扱ヒ、

「切紙細工」ニ於テ、等分ノ觀念ト密接ナ關係ノアル正方形ノ四等分、八等分ヲ指導シ、

六頁、七頁デハ事物ニ即シテ數ノ等分ノ導入ヲシテ來タ。

（ハ）更ニ書方ノ時間ニハ 1 帖ノ半紙ヲ五人デ分ケテ使ハセ、

休操ノ時間ニハ紅白ノ二組ニ分ケ、低鐵棒使用ニ際シテハ四組ニ分ケ、各人ノ分前枚數及ビ各組ノ人數ヲ考察サセ、既ニ生活サセテアル。

3, 割算ノ排列ハ量ノ分割ト關係ノ深イモノカラ初メルノガ自然デアルカラ、次ノ樣ナ段階トナル。

第一段階 …… 二等分、四等分、八等分

第二段階 …… 三等分、六等分、九等分

第三段階 …… 五等分、七等分

第四段階 …… 十等分、商ガ十トナル等分

4, 商ヲ求メル手續トシテ、掛算九九ヲ適用スルコトハ、數觀念ヲ明カニスル爲ニ、容易ナ場合ノ適用ハ餘リ奬勵シタクナイ。

5, 商ヲ求メル手續トシテ適用スル九九ハ、

等分除ノ本來ノ意味カラスレバ商先唱トシナケレバナラナイガ、商發見ニ容易ナ除數先唱トスル。

6, 本教材ハ、事實、用語、記號、算法ノ關係ヲ緊密ニ保ツテ、事實カラ數理ヘト自然的ニ發展サセテ行カウト言フ

意圖ガ明瞭ニ表ハレテ居ル。取扱上圓滑ニ進メルコトニ特ニ意ヲ用ヒネバナラナイ。

●準備　カード　プリント　掛圖

●教順

1, 暗算
2, 題目提示
3, 等分除法ニ於ケル割ル意味
4, 除號導入
5, 商ノ求メ方
6, 除號讀方書方練習
7, 計算練習
8, 整理

以上



# 縣下兒童唱歌會プログラム

## ◆第一部

1 合唱　皇國男　附校　高三男　全部
2 齊唱（雁がわたる／茶摘）　新町校　尋三女　有志
3 遊戯　あわて床屋　五所川原男子校　尋三　齋藤弘文外
4 獨唱　人形　野内校　尋一　逢坂順子
5 遊戯　波を越えて　三本木校　尋四　尋五　（柳田榮子／三浦節子）
6 齊唱　虫の音　劍吉校　尋五六　澤田テイ子外
7 遊戯　摘草　上十川分校　尋三　村上明子外
8 獨唱（芝原山／叱られて）　八戸高等校　高二　盛田イネ
9 遊戯　ローレライ　浪打校　尋六　（逸見／齋藤）みさせ
10 獨唱　漁船　七戸校　尋四　野呂桂一
11 遊戯　影ぼうし　小湊校　尋四　辻村和子
12 齊唱（野ばら／靜かけ行けアフトン川）　龍飛校　尋五六　柳谷フナ外

13 遊戯 日傘花傘 大鰐校 尋一 二川原キヨ子外
14 獨唱 秋 向陽校 尋六 折戸トモ子
15 遊戯 寧樂の都 長島校 尋五 池野きくゑ 野口京子
16 齊唱 鎌倉 鶴田校 尋六 工藤 工藤公一博 有志
17 遊戯 おちぐり 五所川原女子校 尋三女
18 齊唱 富士の山 三戸校 尋五六 茂市スミ外 有志
19 遊戯 遊びませうよ ヒカウキ 沖館校 尋一女
20 獨唱 ボブラ 大間校 尋二 大見あさの 堀内とよ
21 遊戯 水泳日本 第一大成校 尋六 中村ヤエ子外 全部
22 齊唱 夕藤の花 女附校 尋六女
23 遊戯 大和魂 油川校 尋四女 相馬サツ外
24 獨唱 鶴田校 尋六 工藤博
25 遊戯 影法師 向陽校 尋一 鹽見恭子外
26 獨唱 青葉 野内校 尋三 秋庭久夫
27 遊戯 海 小湊校 尋五 八幡セツ外
28 獨唱 三輪車 五所川原男子校 尋一 下山功



29 唱歌劇 かぐや姫 莫町校 尋二 工藤由紀子外
30 合唱 野外の音樂 朝陽校 尋六 中村美惠子外

## ◆第二部

1 合唱 秋の山 三戸校 尋五六 田島京子外
2 遊戯 早起しませう 上十川分校 尋三 宇野テル外
3 獨唱 この道 三本木校 尋三 菅原都々子
4 遊戯 剣吉校 尋六 立花とも
5 齊唱 ローレライ 龍飛校 尋五六 駒谷キマ外
6 遊戯 旅愁 大間校 高一 鈴木はつゑ
7 獨唱 母のこゑ 青蛙 八戸高等 高二 日時ヨネ
8 遊戯 兒島高德 七戸校 尋六 大池てる
9 齊唱 輪唱 暁星 こころこころ 油川校 尋六女 内村てい外
10 遊戯 越後獅子 鶴田校 尋四 宮本正則 八木橋秀一
11 獨唱 釣鐘草 大鰐校 尋六 太田みどり

# 展覽會

12 遊戯胡蝶　五所川原女子校　尋六　有志

13 獨唱女馬子唄　朝陽校　尋六　高屋良江

14 遊戯むぐらの椋助　浪打校　尋四　戸田和子

15 齊唱（萩秋）の山　橋本校　尋五女　有志

16 遊戯荒城の月　男附校　高一　田村曉子

17 獨唱（鐵飛）行兜機　女附校　尋六　岩淵公明

18 遊戯金と銀（波）　第一大成校　尋六　中村ヤエ子外

19 齊唱風　古川校　尋六　有志

20 獨奏ピアノ長調ソナタ（モーツアルト曲）　男附校　高二　間宮昭佳

21 合唱故郷を離るゝ歌　浦町校　高二女　有志

# 記念展覽會

記念展覽會は四日間に渉つて行はれ、多數の入場者があつて盛大であつた。その行はれた展覽會の種類を列記すれば、手工、圖畫、習字、農業、理科、（理科實驗、教育參考品ヲ含ム）附屬校成績品、教育參考品、教材研究、教辨物、教科書、等の展覽會で有益且趣味的な催であつた。生徒兒童の來觀又來賓の參觀等頗る賑つたが、西休操場に設けた一般入場者入口より來觀した人數は次の如くである。

第一日（十月二十三日）二五二名
午前八二名、午後一七〇名
第二日（十月二十四日）九二一名
午前一六八名、午後七五三名
第三日（十月二十五日）六五七名
午前記念式、午後六五七名
第四日（十月二十六日）一三一九名
午前三八三名、午後九三六名
開場より閉場までに三一四九名であつた。

## 習字展

此の六十周年記念展を如何にして飾るか、習字部にしても大きな惱みであつた。計画はしたけれども效を奏せず甚だ殘念に思つてゐる。

第一室　本校生徒條幅
第二室　橋本校兒童條幅
第三室　本校生徒半紙
他中等校生徒作品

第四室　中央書道家、名士、本校先輩作品。

本校生徒作品、量的に見るならば實に殺風景だ。しかし質的には一段と向上してゐるのが伺はれた。殊に低學年は今時の新書風を研究されてゐるのは甚だよい傾向だ。條幅としてのまとめ方、樣式の研究がもつと必要である。他校生徒作品と比較してこれは我田引水になるかも知れないが總じて進歩してゐる。



橋本校兒童作品、これは泰東書道展に出品するもので何づれも優秀な作品である。これ程まで進歩してゐる小學校の書方を見て、やがて指導者となる自分等の足下をふりかへつた時、誰でもあゝこれでは駄目だと感じたであらう。青森縣教育六十周年記念展として實にふさはしいものであつた。

名士　熊谷校長、鈴木三伯、
書家　岸田鶴皐、高木眞明、宮川逸仙、
先輩　宮川松子、荒關雲鶴、葛西眞鶴、豊島鍾城、
伊藤翠雨、外崎喜代治、三浦正嘉、

## 農業展

山河水明、四季の眺めに倦かぬ七州の北端內地に、銀波山と碎け散り、潮渦卷き流れる津輕の海を前に望み、西虛空に岩木富士を泛べ、八甲田山嶺南雲間に峙立する所、此處に礎堅く創立して以來、春夏秋冬重なりて六十有年、東北文化の原動たる我等が學び舍の、意氣更生に向ふ還曆の年、祝ふべき記念の日を迎ふ。吾等の感激實に深いものがある。過ぎ去つた展覽會は今日のこの日を期して精進された。それだけ本年の展覽會は期待され、又その盛況を夢みて居つた。陸奥の人の心の象徴たる眞白き純情の豊かな雪に結んだ永い夢も、吹く春風に誘はれて、忍びよる女神の跫音に眼を醒まし、なつかしい黑土の香を殘雪の中に求めて打ち下す一鍬に記念農業展の一念が深くこめられて居た。霞たなびき陽炎燃え、麗かな碧空に雲雀の音を聞き、香ぐはしきアカシヤの花に、白花爛漫と咲き亂れし春の候に、心和やかに畑を耕し、種子を下す。のどかなる五月の野に若菜育み、三伏炎熱灼けつく陽光の下に全身汗を浴びて培つた我が愛子等は、今苦心報いられて立派に成長した。一碧の秋空高く片々の白雲悠々たり。畑に一人我こそは展覽會に出る榮を擔ふものなるぞと青々と生氣に滿ち滿ちた色をして、最後のゴールに入つた强者として殘つて居る。これ全て苦心の結晶!!

◆展覽會
總指揮　小山田教諭
委員長　松本次郎

第一室　係長　江口昌美　外三名
第二室　係長　小田桐清　外三名

裝飾と相俟つて內容充實の農業展は、實に校內隨一の偉觀であつた。矢印に案內されて左に折れると、色とりどりのテープがはりわたされ又かゝつて紅葉の下を行くが如き感興を誘ふ。廊下には一般益鳥及び害鳥が陳列してある。

先づ順序として第一室の配列を見る……。

こゝは本校生徒の出品展だ、窓の側の台には專攻科の休菜、芥菜、大根等が陳列されて居る。据ゑられた台には四年及三年生の葱、大根、芥菜、休菜等、特設のピンポン台で作つたところには二年出品の大根、葱、休菜、芥菜等で、左側の台には一年生の蔬菜類が出品されて居る。外窓の台にはハブ草、落花生、十六貫胡瓜等、參考品が澤山並んである。黑板には卽賣所の單價が書かれ、傍には卽賣の大根が小山の如く積まれてゐる。卽賣品は大根、甘藍、休菜、芥菜、葱、で市場よりは著しく廉價なので賣れ行きが非常によい。周圍には統計が有機的に貼られて居る。第一室にはこの樣に卽賣で大忙殺である。

第二室　こゝは縣下青年學校、小學校展である。室に入ると青森中學の出品がある。實に良い出來である。一般參考になる豆類、小豆、小麥、果實諸種、鷄卵、蔬菜等及び加工品を出品して下さつたので異彩を放つことが出來た事は感謝にたへない。大きな白菜、甘藍等に驚きの聲を發する。小牛の樣だといはれた十六貫胡瓜は部屋を我が物顏に偉觀を呈して居る。本校では五年增科の手づるから作つた純粹のヘチマ化粧水が列べられて居る。他の加工品と共に卽賣である。

大展覽會の如き統計は實に堂々たるもので、農業增科生の作つた、農家の模型には一同暫く足を止めろ有樣……。

× × ×

農場で手づから作つたヘチマ化粧水は始めてではあつたが、非常に賣れ行きがよかつた。明年度からは數量を豐富にして需めに應じてほしい。必ずや眞價を高め得たことと思ふ。

加工主任として世話して下さつた今井久八郎氏に深く感謝す。

卽賣!!　大忙殺だ!!

「番頭さん、これ何ぼですべ。」と客が云ふ。たうとう番頭さんになつたかなどと朗かだ。

外來商店のない校內展で、然も唯農業展のみで約七拾圓の收入である。ヘチマ化粧水の如きは單價僅かに拾錢內外で個數を制限して賣つたことを思ふとよくもこんなに賣れたものだ、賣つたものだと感慨無量だ。その忙しさ、盛況さは、推して知るべきである。

小學校の先生方より一般の方々が氣を入れて見て下さつ



たことはうれしいことだつた。

受賞者

特に出品なし下された青年學校、中等校の成績は極めて優良であり、今後の活躍が期待される。今尙一層の努力を以て成績の向上を望む。次に受賞者左の如し（　）は品種である。

壹等賞

梨（明月）南郡野澤青年學校宮地喜代男。　苹果（紅玉）中郡草薙青年學校。　苹果（紅玉）南郡北中野青年學校。　南瓜、西郡西海尋常高等小學校。　南瓜、東郡新城青年學校秋谷喜一郎。　牛蒡、上北郡藤坂青年學校。　大豆（陽月壹號）三戸郡田子青年學校佐野哲郎。　甘藍、東郡新城青年學校秋谷善一郎。　大根（宮重）青森中學校作業科。　長芋、東郡濱舘千葉定衞。　苹果シロップ、南郡黑石青年學校。　苹果液、南郡黑石青年學校。

貳等賞

梨（今村秋）南郡柏木青年學校赤平正司。　苹果（デリシヤス）中郡草薙青年學校。　牛蒡、上北郡藤坂青年學校佐々木金人。　牛蒡、東郡新城青年學校山本德雄。大根、上北郡藤坂青年學校佐々木金人。　馬鈴薯（三圓薯）三戸郡田子町尋常高等小學校。　長芋、東郡濱舘千葉利衞。（堡詰）菜豆煮、南郡黑石青年學校。　（堡詰）筍、南郡黑石青年學校。　甘藍、東郡新城青年學校神元吉。　甘藍、仝佐藤繁雄。　甘藍、仝佐藤初太郎。　白菜、東郡新城尋常高等小學校。　白菜、東郡新城青年學校佐藤繁雄。澱粉、三戸郡倉石村又重尋常高等小學校。　小麥（農林二號）三戸郡田子青年學校佐野石藏。　苹果シロップ、南郡野澤青年學校。　卵（鷄卵白）東郡濱舘木村清。　卵（白色レグホン）上北郡藤坂青年學校竹ケ原勝彌。　我校經營の全貌、外童子尋常高等小學校、青年學校長小形與三郎。

參等賞

牛蒡（札幌牛蒡）三戸郡名久井青年學校。　長芋、上北郡藤坂青年學校澤口淸治。　里芋、東郡新城青年學校神元吉。　小麥（農林二號）三戸郡田子青年學校佐野哲郎。大豆（滿洲大豆）上北郡藤坂青年學校泉山德右工門。　馬鈴薯（三圓薯）中郡草薙青年學校。　葡萄（ブラツク・ハンブルグ）南郡野澤青年學校田中吉直。　栗、上北郡藤坂青年學校佐々木哲郎。　甘藍（オータムキング）南郡野澤青年學校田中利榮。　白菜（チーフ）仝上林安榮。　白菜、東郡新城青年學校佐藤要作。　葱、東郡小湊尋常高等小學校。　葱、東郡新城青年學校山本德雄。　葱（根深一本葱）南郡野澤青年學校鹿內靜衞。　葱、南郡北中野尋常高等小學校。　小豆、三戸郡田子青年學校佐野石藏。　菜豆、東郡新城青年學校山下茜次郎。　農林日記、仝齋藤城榮。

斯様に非常な好成績で賞狀は農林研究會の開かれた二十六日に授與された。

◆ 記念行事のアシアト

係員は長短宜しきを得て好都合であつた。

備準!! 外は冷雨に霰が混つてゐる。その上に霜にやつれた桐の一葉をもみつくして風は物凄く戸を叩く。指先は冷え、かがんで画鋲を押すも一苦勞である。壓しつぶすやうな黑雲が覆ひかぶさる様に重苦しい。だが皆默々として動いてる。皆眞劍だ。きりつとした肩宇には開會の日の歡びが秘められて居る。とうかうして居る中に山麓より夜のとばりが下りて家々には赤々と灯がともされ、舍では夕食のベルが鳴り、大きな黑い影をうつしてゐる校舍は、古寺の如く靜まりかへつてひつそりして居る中に二人對坐して頑張り、又何物も留めじと吹きまくる魔王に衣を奪はれじと身を緊きしめ、里余の家路を、黑雲の切れ間より瞬く星の影をふみ、明星が薄明の青空に冷たくまたたく寒空を身に感じながら歸つたあの忙しさがなつかしく思はれてくる。裝飾に朝つぱらから腐心して居る兩係長の眞劍さ。それにも勝つて、室内配置に頭を惱まして居る係員には感謝に堪へない。家蜘蛛の如く隅々まで裝飾の糸をはるのは、ノツポさんの役の立つ所で、お手の物である。

斯様に農理の兩展、東西相呼應して滿艦色の會場となし、滿を持して放たざる我が勇士は、自重して晴れの開會日を迎ふることになつた。この裝飾が如何に大きな効果を收めたかは、猫の手も借りたい程のあの忙しさ、あの盛況（盛況は紙、時數及び凡禿筆のため書けないことは殘念である。）が物語るに足るものである。

盛觀を極めた本校展は、流石苦心の結晶、組の代表の名に恥ぢぬもの揃ひである。農學校の先生でも一驚を喫するであらうし、小山田先生の指導に敬意を表するであらう。

◆ 思ふことども

教育關係の研究會等があり、教育關係者が多く來られたが、その中に農業展の入口に來て、「なんだ、大根だぢや。」と歸つて行かれる方々を見て實に遺憾に堪へなかつた。今尙斯様な方々があるとは……。考へてほしいものだ。

農業展は少くも、この分の裝飾を必要とする。係員は更に〳〵增さなければ思ふ存分客人へサービスすることが出來ない。眞價發揮のためにも……。

卽實の方では、もつと客方の需めに應ずることの出來るやうに豐富にして戴きたい。

我等是學び舍に入りて五星霜、其の間畏くも秩父宮様を拜し奉り、今年又御親閲を拜受し、感激に滿ち充つ。これは在學中の印象最も深いものである。今又空前の大記念祝典に、最高學年にありて、その責又重であり、喜びも亦大きい。

幸にこの記念大會を大盛況裡に幕を閉づることの出來たことは、實に遠近を問はず御送り陳列なし下された、御熱心な各位の御援助の然らしむる所、係員一致協力、不平不滿なく、各々其の任を全うし、全力を傾注して終りの終り迄闘を倚いて奮闘して下さつた賜であります。

こゝに誠心誠意感謝し御禮申します。

大展覽會の盛況を表し得ざることは遺憾であるが、凡拙禿筆如何ともする能はず。これを赦されよ。矢盡きメイ刀折れ、又續くべくもなし。冗噓徒辭筆を擱く。

（松本記）



# 理化展覽會

この展覽會は、堀内教諭、中道訓導の計画指揮により主として、數、物、化の增科生（五年及四年）によつて準備された。

本校の理化展は理化實驗室にて行はれ、堀内教諭の製作品、卒業生の製作品、在校生（主として增科生）の製作品に市販の實驗器具機械を出品し、自由に手を觸れて實驗し得るものを選擇したのである。更に荒川教諭の指導による一機械の綜合的研究の結果を陳列した。

陳列品の主なるもの左の如し

時計（火、水、砂、日、機械等各種の時計）
ガラス細工品
度量衡原器
諸種の寒暖計及び熱量計、輻射計
電氣爐と石英ガラス管
化學分析用器具類
人絹製造過程、ステーブルフアイバー
自轉車の綜合的研究
光電管の綜合的研究
紫外線の綜合的研究
廣告用點滅器
間歇的に電鈴を鳴らす裝置
水車と米搗機

魔法箱
自働昇降機
ペルトン水車
ジヤイロスコープ
分光器
顯微鏡（三基）
科學ニュース
感熱劑
陰顯インキ

その他數十點、五年長尾君室長となり、四年千葉、久保、河野、秋元の諸君の熱心なる說明と實驗指導、ガラス細工實演があつた爲め、一般入場者の自然科學的興味を滿足せしめ、中、小學生の好奇心を大いにそゝつた事は大成功と云ふべきであらう。

次に附屬校の暗室では光學實驗を行つた。十六ミリ映寫は大歡迎を受け、五年立花、工藤兩君の說明も賞讃を博し、殊に實物幻燈の映寫、X線、陰極線の實驗はその說明と相俟つて一般入場者を滿足せしめた。

更に附屬校では中道先生の發案により、東京一流の理化器械店より理化學機械器具の出品を求め、これ等を一室に陳列して卒業生諸君の御參考に供した事は、誠に時宜に適した試みとして賞讃されたが、惜しい事には會場が本校から遠かつた爲に入場者が多くなかつたのは殘念であつた。

終りに理科教育について愚考を記したい。青森縣からは知名の理學者が出て居られる。菊地秋雄京大教授、山田幸五郎博士、一戸直藏博士、郡場寛京大教授等々、東奥年鑑を一覽すれば寧ろ政治家よりも自然科學者の輩出の多く見るのは、あらゆる方面に貧弱縣の名を冠せられる本縣としては誠に心强い事である。政治家によつて更生出來なかつた青森縣を開拓し、更生してゆく爲めには、一層理科教育の徹底を期さねばなるまい。近時國民戰線の擡頭と共に普遍妥當性を無視する思想を生じ、自然科學にさへ、國境を持たせようとし、從來の自然科學的普遍妥當性をも輕蔑せんとする風潮を生じた事は、遺憾の極みである。國境ある學問を重んじ、自然科學に國境なきが故に、之を排擊するが如きは斷じて吾人のとらざる所である。自然科學は物質科學なるが故に、輕蔑されるべきものでもなく、かのマルクス流の唯物史觀と關聯して、物質科學なるが故に、又國境なきが故に誹謗するが如き思潮は、時代錯誤の甚だしきものである。自然科學的方法と愛知の精神涵養は日本人の情意を純化し、眞の日本人たらしめる修養に貢獻し、左右兩端を行く思想を是正し、中正にして適確なる思想を把握せしめるのみならず、進んでは日本の產業開發に、國防の完成に、眞の日本精神の發揚發展に資する一大要因として、又青森縣更生の緊急なる要因として、吾人はこの六十周年を期とし、理科教育の徹底に、努力せんとするものである。

（荒川記）



# 鄕土室

松江生

六十周年の記念展覽會の一部として、我れらの鄕土室も万端備ひ、その蓋開けの日をまつた。數年來からの蒐集に依つて、今や完全の域まで整備されるに至つた。凡そ、本縣に於ける各方面の材料が豊富に取揃へられた此の鄕土室が如何に興味と驚嘆とを、與へるかと期待したものゝ、それはあまりに的はづれの期待であつた事を遺憾とする。

此所は最も學的な室である。故に素通りするもの、又多きを如何せんやだ。だが勿論研究的態度をもつて、精密に點檢し、ノートするものも四五人はあつた。「あゝ之が全部青森縣のものですか。よくこんなに集めたものですね」と言つて見直してくれる人もあつた。奥樣達が我が子に說明する風景は實に床しいものであり、やゝもすれば殺風景にならんとする空氣を、なごやかにしてくれた。

又小學生に取つては和田先生の特に出して下さつた、本縣の動物は、その人氣たるや實に連日の自眉であつた。或はカモシカや、それに乘つた猿は一番大衆的であり、見る人の唯一の慰めでもあつた。素通りしたかと思つた一兒童が數人をつれて案內役となり、場內を賑はしてくれた事も微笑ましい光景であつた。

最初に於ける我々の期待が裏切られた事は遺憾ではあるけれど、それは無理であつて、唯「隨分あるものだ」そして「師範學校では隨分力を入れてゐるんだ」と言ふ事を知つてもらへれば事足りるんだとも考へて見た。唯開期中は本校生徒は事務多忙のため見學出來なかつたとも思はれるが、平生に於て今少し研究心あつてほしいものと思ふ。この點については我々も如何に興味をもたせ、吸收するかを研究せねばならぬ事は勿論である。

鄕土誌及鄕土讀本の賣行が以外に不振であつた事は、未だ〳〵鄕土敎育が大衆の認識外にある証左であるとも考へられる。遺憾な事に鄕土に關する發展をした研究者さへ買はなかつた。この本は權威のないものではあるが、せめて讀本を十五錢出してくれる小學敎員の少きを嘆ずる。讀本

はひとり國史教育に關するものだけのものでなく、本縣教育に當る小學校教員として、十五錢奮發するのがむしろ當然の事ではなからうか。之だけは我々として、必携の書であると信ずる。我々のすゝめに依つて、中學一年の子のため買つて歸つた婦人もあつた程だつたのに。

此所は研究せんとすれば、一日二日見ても更に一年も、一生もの研究材料であつて、それは研究せんとするものゝ事ではあるが、かくも整備せられた本縣について、三十分なりともさいてもらひたかつた。

今回の鄉土室の成績は？ 勿論、一番よく見てはくれたとは思つて居るが（他の出品物に比して）此所には他と比較にならない程、研究物が豐富であるから、終ひ我々には欲が出るのである。

鄉土室は單に學校の鄉土室でなく。本縣の鄉土室であることを縣民は察して貰ひたい。本縣振興は一に鄉土教育の如何にあらうと考へられる。この見地より鄉土室を充實し之を利用して、以て將來本縣農村振興に資せんとしてゐる。

要するにこの鄉土教育を、隆盛にせんとするには、そしてこの鄉土室をして眞に價値あらしめるためには、縣當局に於ても、又我々に於ても、更に興味をもつて研究し、普遍的ならしめたいものと思ふ。



昭和十一年十月

初等教育

# 教科書展覽會陳列目錄

青森縣師範學校

| 一、學制 | 卷 | 著者 | 發行年 | 所藏 |
|---|---|---|---|---|
| 女大學寶文庫 | 一 | | | 青師 |
| 西國立國志編 | 二〇 | 中村敬太郎 | | 〃 |
| 童蒙をしへ草 | 一 | 福澤諭吉 | 明五 | 〃 |

## 二、修身科

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 童女 | 釜二 | 文部省 | 明九 | 〃 |
| 養生抄言 | 一 | 青師 | 明一二 | 〃 |
| 小學修身訓 | 一 | 文部省 | 明一四 | 五年盛民藏 |
| 先賢遺範 | 六 | 馬場健 | 明一五 | 〃 |
| 修身女訓 | 二 | 末松謙澄 | 明二六 | 〃 |
| 小學修身經 尋常科生徒用（卷一） | 一 | 天野爲之 | 明二七 | 青師 |
| 普通學修身書 | 三 | 朝鮮總督 | 大二 | 廣島文理大 |
| 尋常小學修身書 | 二 | 文部省 | 大三 | 〃 |
| 同 | 四 | 〃 | 大四 | 〃 |
| 普通學校修身書 | 一 | 〃 | 大四 | 〃 |
| 尋常小學修身書 | 四 | 〃 | 大五 | 〃 |
| 同 | 六 | 〃 | 昭五 | 青師 |
| 高等小學修身書 | 四 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 尋常小學修身書 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |

## 三、算術科

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 算法通書 | 一 | 古谷定吉 | 不明 | 青師 |
| 幾何初學 | 一 | 關口開 | 明七 | 廣島文理大 |
| 小學筆算教授本 | 一 | 京都格物舍 | 〃 | 〃 |
| 小學算術書 | 一 | 文部省 | 〃 | 〃 |
| 洋算術階梯 | 一 | 廣田亥一郎 | 〃 九 | 〃 |
| 算術教授書 | 二 | 中條澄清 | 〃 | 〃 |
| 續算摘要 | 三 | 米國魯絲孫 | 〃一〇 | 〃 |
| 小學算術教授本 | 一 | 山田正一 | 〃一〇 | 〃 |
| 改正點竄問題集解式 | 三 | 鈴木交茂 | 〃一〇 | 〃 |
| 改正算術 | 二 | 川本知行 小林政二郎 | 〃一〇 | 〃 |
| 明治塵劫記大全 | 三 | 福田理幹 | 〃一一 | 青師 |
| 新撰數學解式 | 二 | 關口開 | 〃一一 | 廣島文理大 |
| 新撰數學解式 | 一 | 岩田順三 | 〃一二 | 〃 |
| 算法新書 | 一 | 千葉雄七 | 〃一三 | 〃 |
| 算術教授本 | 一 | 山田正一 | 〃一三 | 〃 |
| 珠算教授本 | 三 | 〃 | 〃一四 | 〃 |
| 新撰數學 | 一 | 關口開 | 〃一六 | 〃 |
| 小學新撰算法 | 一 | 栗本熊太郎 | | 〃 |
| 算顆階梯 | 一 | 土屋智 | 〃 | 〃 |
| 純正算數學（寫） | 三 | 武田熊太郎 | 〃 | 青森圖書館 |
| 尋常小學算術書 | 七 | 文部省 | 昭九 | 青師 |

## 四、歷史科

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 万國史略 | 一 | 師範學校 | 明七 | 青師 |
| 續皇朝史 | 五 | 石村貞一 | 明七 | 廣島文理大 |
| 日本略史 | 一 | 木村正辭 | 明一三 | 青師 |
| 續皇朝史 | 二 | 石村貞一 | 〃一四 | 廣島文理大 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 日本略史 | 四 | 陸軍省 | 〃一五 | 〃 |
| 小學用日本歴史 | 一 | 金港堂 | 明一五 | 〃 |
| 小學內國史 | 一 | 新保磐次 | 〃三四 | 青師 |
| 日本略史 | 一 | 笠間益三 | | 〃 |
| 高等小學國史 | 一 | 文部省 | 昭二 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃四 | 〃 |
| 尋常小學國史 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 高等小學國史 | 〃 | 〃 | 〃五 | 〃 |
| 尋常小學國史 | 〃 | 〃 | 〃一〇 | 〃 |

## 四、地理科

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 輿地誌略 | 二 | 內田正雄 | 明四 | 廣島文理大 |
| 日本地理撮要 | 一 | 大橋操吉 | 〃五 | 〃 |
| 地理初歩 | 一 | 師範學校 | 〃七 | 〃 |
| 日本地理略 | 三 | 〃 | 〃七 | 〃 |
| 地理初歩 | 三 | 文部省 | 〃七 | 〃 |
| 〃 | 一 | 師範學校 | 〃 | 〃 |
| 日本地誌略 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 一 | 文部省 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 一 | 師範學校 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 一 | 〃 | 〃 | 青森圖書館 |
| 〃 | 一 | 〃 | 〃 | 廣島文理大 |
| 〃 | 一 | 文部省 | 〃七 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃八 | 〃 |
| 地理初歩 | 一 | 師範學校 | | 青森圖書館 |
| 皇國地理書 | 一 | 不明 | 〃 | 廣島文理大 |
| 日本地理誌略 | 一 | 奧川留吉 | 明八 | 〃 |
| 日本匯盡 | 一 | 三浦重吉 | | 青師 |
| 地理初歩 | 一 | 師範學校 | 明九 | 青森圖書館 |
| 輿地誌略 | 一 | 內田正雄 | 明九 | 廣島文理大 |
| 日本地理初歩 | 一 | 安倍爲任 | 〃 | 〃 |
| 日本地理略 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |

## 五、地理科

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 輿地誌略 | 四 | 飾磨縣造 | 明九 | 饗庭圭三 |
| 陸奥地理誌略 | 一 | 青森師範 | 〃一二 | 青師 |
| 捷徑字引 | 一 | 一戸清方 | 〃一三 | 青森圖書館 |
| 青森縣地誌略 | 一 | 松森豊 | 〃二一 | 青師 |
| 青森縣地理書 | 一 | 成田三千郎 | 〃二七 | 〃 |
| 地理補習 | 一 | 山上万次郎 | 〃三四 | 〃 |
| 日本地理 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 高等小學地理書 | 三 | 文部省 | 昭三 | 〃 |
| 尋常小學地理 | 二 | 〃 | 〃七 | 〃 |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 高等小學地理 | 二 | 〃 | 〃九 | 〃 |

## 六、理科

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 植學啓原 | 三 | 榕菴宇田川 | 不明 | 和田千藏 |
| 啓蒙智慧之環 | 二 | 瓜生寅 | 〃 | 廣島文理大 |
| 氣象觀測廣義 | 四 | 川本幸民 | 安政二 | 和田千藏 |
| 窮理圖解 | 一 | 福澤諭吉 | 明元 | 廣島文理大 |
| 登高自卑 | 四 | 村松良粛 | 明五 | 〃 |
| 博物新編 | 二 | 梅原三千 | 明九 | 〃 |
| 新編博物教授本 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 具氏博物學 | 四 | 文部省 | 〃 | 〃 |
| 小學人休 | 一 | 上田文齊 | 〃 | 〃 |
| 物理階梯 | 三 | 文部省 | 〃 | 〃 |
| 普通植物學教科書 | 一 | 三好學 | 〃卌一 | 青師 |
| 小學理書 | 三 | 文部省 | 大五 | 〃 |
| 尋常小學理科書 | 二 | 〃 | 昭五 | 〃 |
| 高等小學理科書 | 二 | 〃 | 〃七 | 〃 |

## 七、圖画科

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 色圖問答 | 一 | 家原政紀 | 明九 | 廣島文理大 |
| 画法階梯 | 一 | 前田吉彦 | 〃一〇 | 〃 |
| 高等小學用器画 | 一 | 大原鉦一郎 | 〃二五 | 〃 |
| 新撰圖画 | 一 | 松原三五郎 | 〃二六 | 〃 |
| 實用毛筆画 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 新撰毛筆習画帖 | 一 | 興文社 | 〃二七 | 〃 |
| 續日本画帖 | 五 | 竹內次郎 | 〃三一 | 〃 |
| 小學毛筆画 | 四 | 橋本雅邦 | 〃三五 | 〃 |
| 高等小學毛筆画 | 一 | 文部省 | 〃三七 | 〃 |
| 教師用幾可画法 | 二 | 〃 | 〃三八 | 〃 |
| 尋常小學毛筆画 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃鉛筆画帖 | 一 | 〃 | 〃四二 | 〃 |
| 〃新案画帖 | 四 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 毛筆画帖 | 三 | 〃 | 〃 | 青師 |
| 尋常小學毛筆画帖 | 一 | 文部省 | 明四三 | 廣島文理大 |
| 〃新定画帖 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃鉛筆画帖 | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 小學圖画 | 二 | 〃 | 昭七 | 青師 |
| 尋常小學圖画 | 三 | 〃 | 昭八、九 | 〃 |
| 高等小學圖画 | 二 | 〃 | 〃一〇 | 〃 |

## 八、唱歌科

幼稚園唱歌集　一　文部省　明二〇　青師
小學唱歌集　三　〃　〃
尋常小學唱歌集　五　〃　昭七　〃
兒童唱歌　五　〃　〃一〇　〃
高等小學唱歌　一　〃　〃

## 九、國語科

小學讀本　一　文部省　明六　廣島文理大
官版單語篇　一　岐阜縣　〃五　〃
單語篇　一　滋賀縣小學校　〃
小學讀本　一　文部省　明六　〃
單語篇　一　廣島縣　〃　〃
通俗單語篇獨解　一　島治三郎　〃　〃
單語篇　一　廣島縣　〃　〃
〃　三　水澤縣　〃　〃
小學讀本　二　文部省　明七　〃
〃　二　〃　〃
〃　六　和歌山縣　〃　〃
〃　一　愛知縣　〃　〃
〃　五　文部省　〃　〃
〃　一　師範學校　〃　岩藤教諭
〃　一　山梨縣　〃　廣島文理大
〃　一　師範學校　〃　〃
〃　四　〃　〃
〃　一　〃　〃
〃　一　不明　〃　〃
〃　一　〃　〃
單語篇　一　田中義廉　不明　〃
〃　一　廣島白島學校　明七　〃
小學讀本　一　三重縣　〃　〃
〃　一　不明　〃　〃
〃　一　廣島白島學校　〃　〃
簡易讀本　二　文部省　〃　〃
〃　一　師範學校　明九　〃
〃　一　田中義廉　明八　〃
小學作文大成　一　師範學校　明五　〃
小學讀本　一　晴屋住　明一三　青師
小學文範　二　師範學校　明一五　廣島文理大
小學讀本　二　進藤政齊　明一六　青師
〃　一　師範學校　明一七　廣島理文大
〃　一　〃



〃（高等科）二　文部省　〃　〃
〃　一　原亮策　〃　〃
通語　三　中井修二　〃　〃
小學讀本　一　文部省　〃　〃
〃　一　稻垣干瀨　〃　〃
語彙活語指掌　一　石丸弘人　明一八　〃
小學讀本（中等科）一　內田嘉一　〃　〃
小學中等　新撰讀本　一　平井義直　〃　〃
日本讀本　二　新保盤次　明一九　〃
普通小學　作文階梯　六　小谷茂實　〃　青師
小學讀本　一　田中義直　〃　廣島文理大
普通讀本　四　高橋熊太郎　〃　〃
新体讀方書　三　塚原苔園　明二〇　〃
尋常小學讀本　七　文部省　明二〇　〃
高等小學讀本　二　〃　〃　〃
實用讀本　一　鶴橋國太郎　〃　〃
增訂小學讀本　一　內田嘉一　〃　〃
簡易讀本　二　高橋熊太郎　〃　〃
新撰小學讀本　一　小笠原利孝　〃　〃
小學簡易科讀本　一　中根淑　〃　〃
〃　內田嘉一　〃　〃
小學高等讀本　七　岡村增太郎　〃　〃
讀書入門　一　〃　〃　〃
高等讀本　五　中原直七　明二一　〃
小學尋常科讀本　四　中根淑　〃　〃
新日本讀本　五　文學社　〃　〃
高等小學讀本　二　文部省　明二二　〃
小學よみかき教科書　二　〃　〃　〃
高等小學讀本　二　池永厚　明二三　〃
初學讀本　五　西村正三郎　〃　〃
新撰小學讀本　一　島崎友輔　明二五　〃
小學國文讀本　一　坂上半七　明二六　〃
高等讀本　四　山縣梯三郎　〃　〃
新撰尋常日本讀本　六　〃　〃　〃
尋常小學讀書教本　一　金港堂　〃　〃
帝國讀本　二七　今泉定介　須永和三郎　明二七　〃
高等女子讀本　一　學海指針社　〃　〃
尋常小學新体讀本　一　森孫一郎　〃　〃
〃　〃　〃　〃　青師

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 高等學 | 新讀本 | 七 | 西村正三郎 | 〃 | 廣島文理大 |
| 尋常小學 | 新休讀本 | 二 | 金港堂 | 〃 | 青師 |
| 尋常小學 | 新讀本 | 七 | 田中登作 | 〃 | 廣島文理大 |
| 新休讀本 | | 二 | 金港堂 | 明廿八 | 〃 |
| 高等讀本 | | 三 | 山縣梯三郎 | 明廿七 | 〃 |
| 帝國讀本字解 | | 一 | 邨上英吉 | 明廿八 | 〃 |
| 尋常小學讀本 | | 八 | 西澤之助 | 明廿七 | 〃 |
| 小學讀本 | | 二 | 金港堂 | 明卅 | 〃 |
| 尋常國語讀本 | | 四 | 文部省 | 明卅四 | 岩藤敎諭 |
| 高等國語讀本 | | 七 | 金港堂 | 〃 | 〃 |
| 小學國語讀本 | | 八 | 學海指針社 | 〃 | 廣島文理大 |
| 國語讀本 | | 五 | 坪內雄藏 | 〃 | 〃 |
| 高等小學讀本 | | 六 | 西澤之助 | 〃 | 〃 |
| 小學讀本 | | 八 | 金港堂 | 明廿四 | 〃 |
| 尋常小學國語讀本 | | 八 | 西澤之助 | 〃 | 〃 |
| 小學國語讀本 | | 七 | 坪內雄藏 | 明卅四 | 〃 |
| 國語讀本 | | 五 | 外山左文二 | 〃 | 〃 |
| 尋常小學讀書讀本 | | 三 | 今泉定介 須長和三郎 | 明卅七 | 〃 |
| 尋常小學讀本 | | 六 | 文部省 | 〃 | 〃 |
| 高等讀本 | | 五 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 尋常小學讀本 | | 五 | 〃 | 明卅八 | 青師 |
| 〃 | | 三 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 | | 四 | 〃 | 明四二 | 〃 |
| 〃 | | 八 | 〃 | 明四三 | 〃 |
| 〃 | | 一五 | 〃 | 大三 | 〃 |
| 〃 | | 二 | 〃 | 〃 | 廣島文理大 |
| 高等小學讀本 | | 四 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 | | 六 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 秋季始業尋常小學讀本 | | 一 | 〃 | 大四 | 〃 |
| 第一尋常小學讀本 | | 四 | 〃 | 大五 | 〃 |
| 尋常小學讀本 | | 四 | 〃 | 大六 | 〃 |
| 高等〃 | | 一 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 尋常小學國語讀本 | | 七 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 高等小學讀本 | | 二 | 〃 | 大一〇 | 〃 |
| 高等小學讀本 | | 六 | 文部省 | 大一五 | 〃 |
| 高等小學讀本（農村用） | | 四 | 〃 | 昭二 | 青師 |
| 高等小學讀本 | | 三 | 〃 | 昭五 | 〃 |
| 小學國語讀本 | | 七 | 〃 | 昭七 | 〃 |
| 〃 | | 二 | 〃 | 昭一〇 | 〃 |



# 教育參考展

母校創立六十周年を記念する諸行事の中に、教育參考展が催された。これは實際教育に寄與したい意圖から生れたものであつて、附屬小學校の五室をとつた映寫室、創作教辨物室、理化參考室、教科書參考室で、二十三日から四日間行はれたが、入場者も相當の數に上り、豫期の效果を收めることが出來た。

## ◆映寫室

場所は理科教室である。此所は附屬小學校の保護會の人達が、今回の記念式を慶祝する意味から、約六百圓を費して、映画教育施設をした所で、完全な暗室にすることが出來る。

「神祕の南極」「大氷海」「火山」等、太陽十六粍映寫機によつて映寫された教材映画により、學校教育に於ける映画施設の重要性が、切實に理解された。その他各種電氣の實驗は、五年生立花君等によつて操作され、實物幻燈の教授上の偉力も充分に發揮された。

## ◆創作教辨物室

こゝは縣教育の第一線に活躍してゐる教育者の工夫創案になる教辨物を集めて、實際教育の振興に努力してゐる、研究の力强い記念塔としたい念願から、縣下各校に檄して出品を御願ひしたものである。集つたものはいづれも血の滲むやうな、努力の結晶であつて、貴重な物が多かつた。觀覽した人達に强い感銘を與へたことゝ信ずるのである。左に錄して出品者へ感謝を捧げ、敬意を表したい。

○八甲田山を中心とした平面地圖と立体模型
　北郡五所川原小學校　福士　勇氏　出品

○岩木山を中心とした平面地圖と立体模型
　北郡五所川原小學校　福士　勇氏　出品

○青森縣立体模型地圖
　南郡　小和森小學校　出品

○國史科教辨物六種
　東郡大野小學校　類地德勇氏　出品

○紙で製作される額縁及一錢程度で出來るスケッチブック　三戸郡五戸小學校　江渡益太郎氏　出品

○郷土を中心としたる鑛物標本　南郡　大鰐小學校　出品

## ◇理化參考室

島津製作所が新に創案した、萬能組立式の實驗器の中、左記を今泉書店の厚意により出品したものであつて、四年生の諸君により、實驗操作して、展覽していたゞいたものである。

○ジーエス　物の性質實驗器
○ジーエス　熱學實驗器
○ジーエス　空氣の運動實驗器
○ジーエス　挺子實驗器
○ジーエス　滑車及輪軸實驗器
○ジーエス　水素實驗器　本校出品

その他、本校生徒の製作品も多數出品し、附屬兒童の理科應用製作品である、ペリスコープ・實驗幻燈等も陳列された。

以上のやうに、特展と稱して、此度の展覽會の一部面を擔つた教育參考展は、本縣初等教育界に示唆する部分を多分にもつ、特徴あるものとして計劃され、實行されたのである。



慰　靈　大　祭

# 慰靈大祭

十月二十四日快晴、好天に惠まれて午前十一時より、教育會館構内慰靈碑前に於て、慰靈大祭が執行された。遺族來賓の集まる者約百名、本校職員生徒全員參列の上、柿崎神官によつて莊嚴に行はれた。修祓降神に次で、齋主の祭文朗讀、學校長の祭文朗讀があつた。玉串奉呈は、齋主學校長、生徒總代、遺族同窓生總代、來賓總代の訓序に行はれ、昇神の後式を閉ぢた。時に零時半、會館に於て直會に移つた。

## 祭文

維時昭和十一年十月二十四日青森縣師範學校同窓會並校友會員一同　恭シク清酌庶羞ノ奠ヲ具ヘ謹テ本校創設ヨリ昭和十年九月ニ至ル物故會員一千有餘名並最近一箇年ニ永逝セル舊職員故從五位勳五等小林盈從五位勳四等功五級陸軍歩兵大佐中野直敏成田德之進湯淺中夫荒井よの坂本助吉　卒業生故從七位勳八等工藤民藏蒔田茂穗佐々木兼太郎對馬稱美竹内壽一葛西英男成田一二三田中舘勇太郎中村たけ古山よね佐藤要一船越勝江和田一郎泉山恒治小笠原長司長内長松白取粕太郎對馬國男田村善三郎中川原建吾木村末人三上本三郎成田寅次郎田邊晃工藤金四郎大谷津友藏村田猛佐藤富雄千葉富士太郎佐藤集吉　生徒故舘田勇三郎阿部弘司　諸子ノ靈ヲ祭ル

今ヤ本校ハ創立六十周年ヲ迎ヘ燦然タル校史更ニ一段ノ生彩ヲ加フ惟フニ斯ノ盛典コソハ六十箇年ニ亘レル幾多先輩ノ努力ヲ賚ト謂フヘク吾等幸ニシテ盛儀ニ際會シ得ルノ光榮ヲ懷ヒテハ前人ニ對スル感謝報恩ノ至情轉ミ禁シ得サルモノアリ是卽會員一同胥謀リ記念祝典行事中ニ故會員慰靈大祭ノ儀ヲ加ヘ以テ感恩追懷ノ誠ヲ新ニシ其威靈ニ依リ其ノ遺緒ヲ嗣キ縣國振興ニ資シテ憾無カラシムルコトヲ祈念シテ息マサル所以ナリ

抑ミ本校カ明治九年ニ創立セラレテヨリ以來本會員ノ數實ニ七千ニ垂ントシ就中本縣初等教育草昧ノ際ニ當リ諸先輩ニヨリテ爲サレシ苦闘コソハ實ニ今睹ル縣民文化ノ向上ト初等教育隆昌ノ現狀招來ノ礎石ト謂フヘク而モ乎居其ノ身ヲ處スルコト儉素克ク古人ノ所謂三樂ヲ樂トシ世榮ニ超然トシテ其ノ天職ヲ完ウシ以テ之ヲ後進ニ傳ヘタリ或ハ不幸中折シ或ハ學業中途ニシテ二豎ニ斃レシ等其ノ在職ノ長短其ノ卒業ト在校各々萬殊ナル固ヨリ天命ノ然ラシムル所其ノ育英ノ至情殉職ノ精神ニ至リテハ其ノ軌ヲ一ニシ形魄ハ大塊ニ歸セリト雖英靈ハ齊シク上天ヨリ俯瞰シテ吾等ヲ本縣教育ヲ護リテ盡クル時莫ケン

顧テ觀ルニ縣國ノ狀勢寔ニ多事多難宜シク上下戮力國民精神ヲ振作更張シ以テ國運ノ進展ニ寄與スヘク特ニ國民教育ニ從フ者深ク思ヲ此ニ致ササルヘカラス

冀クハ會員一同諸氏ノ光範ニ依リ和衷協同研鑽克ク其ノ天職ヲ完ウシ以テ諸子ノ遺緒ヲ宣揚スルニ遺憾ナカラムコトヲ

茲ニ六十周年記念式典前日ヲトシ恭シク祭壇ヲ設ケ諸子ノ英靈ヲ迎ヘ其ノ德ヲ偲ヒ其ノ功ヲ頌ヘ至情ヲ盡シテ大祭ヲ行フ神靈照格尙クハ來リ饗ケヨ

青森縣師範學校　同窓會長　校友會長　熊谷美登利



# 故人芳名錄（抄）

昨年十月以降新ニ鬼籍ニ入リ今回合祀セル故人ノ舊歷ヲ次ニ揚グ。

## ◇舊職員ノ部

從五位勳四等功五級陸軍歩兵大佐　中野直敏先生

愛媛縣出身、昭和四年八月本校配屬將校ニ任命、八年八月山形聯隊區司令部附ニ轉補、本年二月十二日逝去。

從七位勳七等　坂本助吉先生

秋田縣能代港出身、歩五入隊、青森衛戍病院附、陸軍上等看護長、縣立青森病院書記、本校書記、（大正十一年—昭和七年）本年二月十二日逝去。

從七位　湯淺中夫先生

明治二十九年札幌農學校卒業、德島縣富岡中學校、秋田農學校、山形縣村山農學校、鹿兒島縣薩摩蚕業學校長、青森縣農會技師、本校教諭（昭和二年—昭和六年）昭和十一年四月十九日逝去。

從五位勳五等　小林盈先生

長野縣人、明治十六年長野師範卒業、明治廿五年高等師範理化學科卒業、長野師範、本校教諭、仝校長、（明治卅一

年—明治卅五年）東京府立第三高女校長（廿八年間）昭和十一年四月逝去。

荒井よの先生

青森縣新町ニ生レ、長ジテ市内小學校ニ奉職スルコト多年、明治廿五年四月ヨリ大正三年三月退職セラル、迄本校並附屬校ノ裁縫、作法等ヲ擔任セラル、昨年逝去セラリタリトイフ。

成田德之進先生

弘前市出身、明治十二年本校小學師範科ヲ出デ、地方ノ小學校教授法傳習教師トシテ遍歷セラレ、後五所川原初等師範學校助教授トナラレシガ明治十八年以降ハ東郡書記、弘前市助役トシテ十餘年、昭和八年弘前市長ニ選擧セラレシガ年餘ニシテ病ノ爲メニ職ヲ退カレ療養中本年八月五日逝去セラレル。

## ◇卒業生ノ部

蒔田茂穂氏

八戸市出身、明治十三年豫科卒、八戸女尋高校長、賣市校長、昭和十年八月歿ス。

佐々木兼太郎氏

北郡内潟村出身、明治卅五年本科卒、北、飯詰校、脇元校長、青、浦町校、橋本校、三、貝森校長、金山澤校長、昨十年十月一日歿ス。

對馬稱美氏

北郡松島村出身、明治廿二年本科卒、北郡會議員、昨十年十月十四日歿ス。

從七位勳八等　竹内壽一氏

中郡東目屋出身、明治卅四年乙種講習科修了、鄕里ノ小學ニ奉職、大正元年國吉郵便局長、又村會議員、産業組合理事ヲ勤メ、昨十年十二月十日歿ス。

葛西英男氏

西郡赤石村出身、大正十年本科第一部卒、舞戸校、中村校ニ奉職、專攻科ニ入學、昭和八年卒業、南、東英校、西、舞戸校、昨十年十二月卅一日歿ス。

成田一二三氏

北郡板柳町出身、昭和六年本科第一部卒、下、川内校、北、榮校、本年一月一日歿。

勳八等　田中館勇太郎氏

五戸町出身、明治卅七年本科卒、市野澤校、五戸校、又重校、五戸女子校長、中市校長、上市川校長、市野澤校長、本年一月十四日歿。

中村たけ子氏

舊姓新岡、弘前市出身、明治四十一年裁縫專修科修了、中、石堂校、紙漉澤校、仝四十四年第一種講習科修了、弘朝陽校（十年間）中、島井野校、本年一月二十八日歿。



古山よね子氏

上北郡出身、明治四十四年第一種講習科修了、七戸校奉職、現八戸尋校長古山氏ニ嫁シ上北郡内數校ニ奉職、本年二月十二日歿ス。

佐藤要一氏

文久三年弘前市ニ生レ明治十五年小學師範科卒業、小學校奉職後東京ニ出デ立教大學ニ語學ヲ修メ米國ニ遊ビ歸朝後東奥義塾ニ教鞭ヲ執リ、後憲政本黨本部幹事トナル、歸鄕後弘前市會議員、本縣會議員トナル、本年二月十八日歿ス

船越勝江氏

八戸市ノ人、八戸中學ヲ經テ明治四十五年本科第二部卒業、八尋高校訓導トナリ、後南部子爵扶トナリ、八戸市收入役ニ選バル、二月十二日歿ス。

和田一郎氏

昭和六年本科第一部ヲ卒ヘテ七戸校奉職、專攻科ニ入學、本年三月卒業スベキ處二月廿五日惜クモ急病ノ爲ニ歿ス。

泉山恒治氏

三戸町出身、昭和五年本科第一部卒業、短期現役ヲ了ヘ、三、島谷校、島守校、三月九日歿ス。

小笠原長司氏

五戸町出身、昭和八年本科第一部卒業、三、中市校、三月廿一日歿ス。

長内長松氏

北郡小阿彌出身、明治世五年本科卒業、東、奥内校、北、板柳校、櫻菟校長、辞シテ銀行員トナリ、後本縣電氣局書記ニ轉ジ板柳出張所勤務、四月廿四日歿ス。

白取粕太郎氏

舊姓白戸、明治四十五年第一種講習科修了、南、日沼校、小和森校、石川校、唐竹校、竹館校ノ各訓導歷任、四月廿七日歿ス。

對馬國男氏

南、竹館村ノ産、明治四十一年第二種講習科修了、南、町居校ヨリ北海道ニ渡リ狩太第七校、奥昆布校、虻田郡山中校ヨリ函館市巴校ニ移リ四月廿九日歿ス。

田村喜三郎氏

五戸町出身、明治廿六年本科卒業、三、五戸校、八戸校ヲ經テ上京、神田校ニ就職後東京市役所ニ入ル、後下谷小學校長ニ進ミ歸鄕後五戸町長タリ五月十三日歿ス。

中川原建吾氏

三本木町出身、大正十四年本科第一部卒業、上、澤田校、木内々校、深持校ニ在職、七月三歿ス。

從七位勳八等　工藤民藏氏

北郡長橋村ニ生レ、大正二年本科第一部卒業、北、富野校、梅田校、飯詰校、鶴田校長、胡桃館校長ヨリ下北郡視學ニ進ミ大正十三年七月本縣視學ニ榮轉、昭和五年青森市新町校長トナリ高等官七等ヲ以テ待遇セラル、七月廿五日歿ス。

五戸町出身、明治四十年第二種講習科ヲ了ヘテ本科第一部入學、明治四十四年卒業、三、新井田校、八戸尋校、五戸校、戸來校、西越校、湊校ニ歴任後北海道ニ渡リ、函館市及札幌市内小學校ニ奉職、歸來上、三本木校、千曳校、法奥校ニ奉職、去七月廿七日歿ス。

木村末人氏

南郡富木館村出身、大正十三年本科第一部ヲ了ヘ更ニ昭和三年專攻科ヲ卒業ス、尚進ンデ廣島高師教育科ニ入リ、卒ヘテ歸郷後、南、浪岡校、藤崎校、東英校、中郷校、淺瀬石校ヲ經テ東、筒井校ニ轉ジ本年四月瀧内校長ニ榮轉セシニ去ル八月廿二日病ミテ歿ス。

三上本三郎氏

弘前市出身、明治十七年中等師範科卒業、勳八等　成田寅次郎氏
中校長、松崎校長、去ル九月十六日歿ス。　和德校、南、畑

東郡荒川村出身、昭和六年第一部卒業ト共ニ更ニ專攻科ニ入學、翌年卒業シテ北、小泊校ニ就職、鶴田校ニ轉ジテ在職中九月廿七日歿ス。

田邊晃氏

舊姓木村、　西郡出精村出身、　大正六年本科第一部卒業、工藤金四郎氏
三、島守校ヨリ北、沖飯詰校、五所川原女子校、吹田校、
七ツ館校長、板柳校、松島校、十月十二日歿ス。

大谷津友藏氏

明治十五年小學師範科卒業、東、油川、新城、戸門、鶴
坂、石江、沖館、安田ノ各校、南、柏木町校、北、板柳
校、青森尋校、弘、大成校ヲ經、西郡視學トナリ晩年津輕
伯爵家々扶ヲ勤ム、昨十年一月廿八日歿ス。

正七位勳六等　村田猛氏

明治十九年高等師範科卒業、夙ニ上京シテ教育ニ從事、櫻
田小學校長、聖坂小學校長等ヲ勤メ東京市内小學校長ノ代
表トシテ知ラレ昭和二年教育上ノ效績ヲ以テ金壹千圓ヲ賜
ハル。

從七位勳八等　佐藤富雄氏

明治卅五年本科卒業、本校訓導、本所茅場校、聖坂校長、
月島校長、高等官七等待遇、本年二月廿五日歿。

千葉富士太郎氏

弘中卒業、更ニ本校第一種講習科修了、青、浦町校、上
京。

佐藤集吉氏

明治卅六年簡易科卒業、東京淺草、田原校、

## ◇生徒ノ部

館田勇三君

中郡和德村ノ產、昭和五年四月第一學年入學、昨年十月卅
日第五學年ニ於テ中途卒業ヲ見ズシテ歿ス。

阿部弘司君

上北郡浦野館村長ノ息、本年四月第一學年ニ入學、級長ヲ
勤メシガ第一學期末ヨリ病ニ罹リ九月十六日ツヒニ歿ス。



# 同窓會

# 總會

# 同窓會總會

十月二十五日午前十一時三十分、田向教諭の開會陳告によつて總會が開かれた。學校長登壇、今回六十周年記念事業全般に渉つて同窓會一致して御後援下されて居ることを感謝せられ、尙將來の職務遂行の上にも、何卒協力一致を御願致し度いと挨拶の上、此の會の議長席に着かれ、次の挨拶があつた。

光輝アル母校創立六十周年記念式當日茲ニ我ガ社團法人青森縣師範學校同窓會總會ヲ開キ、而モ多數、朝野ノ名士各位ノ御賁臨ヲ仰ギマシテ意義深キ問題ヲ取扱フコトヲ得マシタコトハ本會トシテハ寔ニ無上ノ光榮ト存ジマス。

兩議題共本年度ノ評議會ニ於テ決議シタ所ノ問題デアリマシテ、之ヲ今、本日ノ名譽アル總會ニ於テ報告スルノデアリマスガ何卒滿場一致ヲ以テ深甚ナル贊意ヲ表セラレンコトヲ希望シテ止マヌ次第デアリマス。

之ヨリ各其ノ委員ニヨツテ逐次說明ヲ申シ上ゲマスガ何卒拍手ヲ以テ贊意ヲ表セラレンコトヲ希望致シマス。

說明委員としては北郡五所川原男子小學校長である木村吉三郎氏が登壇、

今日ノ光輝アル總會ニ於テ本年度評議員會決議ニ基キ宣言發表ノ件ニツキ委員起草ノ宣言文ヲ報告致シマスコトハ本員ノ最モ光榮トスル所デアリマス。今其ノ宣言文ヲ朗讀致シマス。

## 宣言

青森縣師範學校創立六十周年ハ實ニ本縣ニ於ケル國民教育樹立ノ六十周年トモ見ルヲ得ベク又更ニ初等教育ノ還曆トモイヒツベシ此ノ間幾多有爲ノ先輩ヲ出シテ本縣教育界ノ基礎ヲ作リ以テ今日ニ至ル

飜ツテ稽フルニ縣國現下ノ狀勢ハ內外共ニ多事ニシテ而モ鞏固ナル國民精神教育ノ重大ナルヲ告グルヤ切ナリ本日光輝アル母校創立六十周年記念式典ニ臨ミ其ノ喜ヲ頒ツト共ニ教育報國ノ念愈々新タナルモノアリ此ノ秋ニ方リ吾人ハ一意協力以テ國家社稷ノ協働ニ益々重キヲ加ヘンガ爲メ教育立國ノ强化ニ力メンコトヲ期ス

右宣言ス



右宣言後滿場に拍手起る。議長、

滿場一致可決致シマス。

次に說明委員として弘前市玉成高等小學校長關川利三郎氏登壇、師範教育奬勵資金釀成に關して次の說明があつた。

光輝アル本日ノ總會ニ於テ本年度評議員會ニ於テ決議致シマシタ師範教育奬勵資金釀成ニ關シ報告致シマスコトハ本員ノ最モ光榮トスル所デアリマス。

本問題ハ昭和十二年ヨリ實施スルモノデアリマシテ本日ノ記念大會豫算ニ計上致シマシタ師範教育奬勵資金トイフ目ハ今回ダケノモノデアリ、從ツテ兩者ハ趣旨ハ同樣デアリマスガ別箇ノ問題デアリマス。

卽チ昭和十二年度ヨリ每年度、會員一人ニツキ一年ニ一回金拾錢宛ノ醵出ヲ願フコトニ致シマシタ、而シテ此ノ金ハ每年壹百圓以上ニ上ル見込デアリマス。之レハ母校ニ在學中ノ私共ノ後輩タル生徒デ、家庭ノ事情急變ノタメ不幸ニモ中途廢學ノ餘儀ナキニ立至ルモノガ殆ド年々ノ如ク有ル樣ニ承ツテ居リマスガ、之等不幸ノ後輩ニ給與シテ其ノ志ヲ成サシムルトイフノガ本資金ノ使命デアリマス。年ニ拾錢トイフ零細ナ金デアツテモ吾々會員ノ一致協力ノ結果相當額ノ金額トナリ、ソシテ一人ノ不幸ヲ助ケ得ルナラバ一ニハ永ク母校ノ恩ヲ年々新タニ感謝スルコトガ出來、一ニハ小ナリト雖モ一ノ善ヲ爲スコトガ出來、此ノ光輝アル創立六十周年記念事業トシテ寔ニ意義深キモノト確信致シマス。其ノ方法上ニ關シテハ

一、集ツタ金ハ其ノ年ノ分ヲ其ノ年度ニ於テ給與ス。卽チ積立ヲスル基金デハナイノデアリマズ。而シテ又返濟等ノ義務ヲ負ハシメマセン。

一、其ノ給與生ノ決定ハ師範學校長ニ一任スルコト。

一、徵集方法ハ同窓會長ニ一任スルコト。

以上ヲ以テ、師範教育奬勵資金釀成ニ關スル說明ト致シマス。

說明後滿場拍手起る。議長、

滿場一致可決致シマス。

右二件可決の後、教育會館の世話人として井筒きぬ氏を表彰せられ、賞狀と賞品とを授與せられた。同窓會の總會は之れを以て終了し記念講演會にうつゝた。

# 記念講演會

# 記念講演會

十月二十五日に同窓會總會があつて、全部終了の後直ちに記念講演會に移つた。講師は本校出身者で且舊職員でもあり、現在東京高等師範學校教授兼主事で居られる佐々木秀一先生である。

## 演題　縣教育の方針を考へる參考として

多年こちらの學校で御厄介になりました私が、この輝かしい六十周年の記念日に、お話を致す光榮を得ましたことを感謝して居ます。題は、「縣教育の方針を考へる參考として」、でありますが本縣の教育の方針を考へる上にどんなことを考へたらよいか、と言ふ私の卑見を申上げるつもりで居ります。是が何らかの御參考になることがありましたら幸福と思ひます。

第一番に、私は此の學校に對する感謝の心を述べさせて貰ひたいと思ひます。私は二十五の年から二十九の年まで四年間本校のお世話になりましたが、此の事についてこの短い時間に申上げることは、非常に不經濟の樣にお考へでせうが、それを默するわけに行かぬ心持から、感謝を述べさせて戴くのであります。勿論、其の時代にお世話になつた全部の先生に對して、衷心より感謝申上げて居りますが、特に私の運命、私の一生の運命に最も關係の深かつたお二人の先生がある。又一般的にお世話になつた先生が一人あります。

その一人は校長和田先生であります、先生は私共に修身を教へられた外に、大きい影響を受けました。私共が學校に入つて居りました時に、誠に申譯ない事をしました。それは學校騷動であります。その中に私もは入つて居つたと思ひます。然るに和田先生の寛大なる御取計らひによりまして、退學をまぬがれたわけであります。この事は校長先生になる方に非常に參考となるだらうと思ひます。

事の起りは、有栖川宮殿下が薨去なされたと言ふ通知が土曜日に來て、そこで我々は大いに謹慎しなければならぬと言ふので、日曜日は公休日であるから、我々は月曜日もその爲に學校を休みたい、と、言ふのであります。是が學校騷動であります。



間もなく學校の方からは、兎に角學校に集まれと言ふのです。それで四年生の一人が言ひ出して申合せをした。我々は薨去に關するお話なら愼んで聞くが、若し此の問題に話が及んで叱られるのならば、目禮して順次退場しようと言ふのであつた（笑聲）。所が、話が段々進行して行く内に、その方になつて來てそろ〳〵お叱りが出て來たので、皆は目禮してゾロゾロ退場した（笑聲）（拍手）。そのことについて和田先生は大變怒られ、寄宿舍の舍監室で職員會議が開かれて、四年の主謀者全部を退學させよ、と言ふことになつたんださうです。その會議の内容が我々の方へも聞えて來たのであります。所が退學と衆議が決つたのに、和田先生の意見では、「斯う言ふ騷動を起した者を全部退學させると、後に殘つた者はボンクラばかりだ、頭のわるい者ばかりになるだらう、だから今回は見逃してやらう」。と言ふので許された。この事が我々の方へ洩れて來たので、我々はスツカリ感激して、直ちに行つて頭を下げてあやまつたと言ふわけでございます。

次は大井民吾先生でありますが、現在當市柳町に住んで居られて、私も昨日お訪ね致しまして、お元氣なお顏を拜して來た次第です。この先生も私にとつては非常に大切な方で。私が教員にならうと、勿論、師範學校に入る時教員にならうと考へたのですが、將來教育學、哲學、心理學等を研究しようとの考が生じたのは、實に先生のおかげで、教員にならうと言ふことが非常に愉快で、よい事だと言ふ感化が、私を教育者の道に向けられたことで、感謝に耐へぬものがある。その原因は、二年生の時に心理學を教はりましたが大變面白く愉快でありました。其の說明も實際社會の例を以つて平易に說明せられ、又當時既に先生は獨逸語の本を讀んで居られて、新しい知識を授けて下さいました、それが三年生になりまして教育學を習つて更に感じを深く致しました。斯樣に先生は學深くて尙德の高いことは驚くばかりで、我が一生に取つて大きい感激であつたのであります。

次に津島剛之助先生は、先年故人になられて全く殘念でありますが、体操の先生でありました。その頃の師範學校は假入學の制度で、四月に入學させて七月迄に成績がよければ入れ、惡ければそれで退學させると云ふ制度でした。私は四月の假入學の時の体格驗査で、津島先生から、「お前の胸は非常に薄い樣だ、是では駄目だ」、と言ふので、私は全く失望して仕舞ひました。「それでも假に入れて置くから、七月迄に發達すれば本入學を許可する」と言ふわけで私は本校へ入れて貰ひました。そこで私は是れは自分の死活問題であると考へて、大いに運動に勵んだ。當時は運動と言つても毎日鐵棒にぶらさがり、木馬をやる位のものであつたが、これを四月から七月迄盛んにやつた。七月になつて調べてみると少し胸圍が增してゐた、それで入學

を許されたのでした。それから四年間と言ふものは鐵棒をやり、木馬をやつて身体の鍛練をしました。今肥えてゐるのもそのおかげであり、胸部の病氣もやつたことはない。かう言ふ刺激が私の生命を發展させて呉れましたおかげで、今日隨分無理な仕事をして居りますが、この健康を惠まれたことを感謝して居ります。尙此の外に澤山ありますが、時間がありませんので今日はこの三人の先生だけでとどめて置きたいと思ひます。

第二番として、私は青森縣の教育を考へる前に、日本の教育の弱點は何であるか、卽ち我國と歐米各國の教育とのハンデイキャツプを考へて見ることが大切であると思ひます。つまり日本の教育の弱點、卽ちハンデイキャツプが、我が青森縣にも直接間接に影響して居ると考へられるからであります。是らは既に新聞雜誌等に書いたこともあるので御存じの方もあるだらうと思ふが、その第一は義務教育の年限である。我國は六年であり、西洋の諸國は七年八年乃至は九年十年であります。勿論西洋と云つても一等國の事でございますが、若し假りにその中間の八年としましても我國は二年短かく、その短い六年間に西洋の八ケ年分の教育をやらなければならないと云ふわけであります。今義務教育年限延長と云ふことが叫ばれて居るのは、尤もなことであり、適當な議論ではありますが、まだまだ相當問題があつて一概には決定を見ない樣に見えます。

その第二は、一學級で扱ふ兒童數が非常に多いと云ふ事であります。我國大体の現狀を見まするに概ね六十名を超えるものがある。東京にも六十、七十、八十名と云ふのがある。然るに西洋では大抵四十名で、新しいのには三十、二十、十五名などと言ふのがあります。一人の先生が六十名を敎へるのと、三十名を敎へるのとは、其の効果、敎授徹底の結果について、私が謂ふ迄もなく分りきつた事であつて、茲にもハンデイキャツプがついて居ります。

その第三は、敎材が多過ぎると云ふことであります。是については、昨日塚原さんも仰つたことでありますが、敎科が多過ぎるのであります。一体敎育といふものは其の國の社會生活、文化生活の上に築かれるべきものであります。從つてその生活範圍の中から敎材なり、敎課が取られねばなりません。それなのに今日の社會は二重三重の複雜性があり、この複雜した範圍から敎材が取られて居ります。例へば女の子供に裁縫を敎へるにも和洋、家事料理でも和洋を敎へなければなりません。又近來はメートル法を用ひる樣になりましたが、世間では尺貫法が行はれて居るので、この兩方を知らねば實用にはなりません。また分量から云つても甚だ過重であると考へられます。どの敎課について見ても斯んなことが云へるかと思ひますが、その國獨特なものと考へられる修身、歷史、國語などでも、分量



が多いので、修身には禮儀、作法があり、又國民道德を研究せんとするものは西洋の道德を考慮に入れなければならぬ。歷史に於ても種々な話をすることになれば西洋の歷史が出て來る事になる。兎に角この樣に日本の敎材は種類も多く又分量も非常に多いと言ふわけであります。

その第四は、國語は學習が困難であるといふ事であります。漢字が多くてむつかしい、語法が面倒である、そればかりではない言葉の組織がいろいろ含まれて居る。既に文体に口語と文語があり、敬語と通常態とがあつて使ひ分けるに困難である。學習には骨が折れる。漢字には音と訓とがある。それが音訓各三つも四つもある、例へば「行」は、行爲、行列、行燈であり、訓では、ゆく、あゆむ、すゝむ、いたる、かへる、さる、ながる、うつる、めぐる、ふる、おこなふ其他多數ある外に、茨城縣では、なめかた（行方郡）のナメであり、補正行のツラである（笑聲）。斯樣に種々あつてもそれらに推理がきかぬ、皆機械的に覺えねばならぬのであります。この事はよく考へてみなければならぬ、改められる迄は苦んで行かねばならぬ、兎に角一番困るものは國語であつて、多大な負擔を背負ひ込んで居るわけであります。斯の如く西洋諸國に比べて大きなハンデイキャツプがついて居るわけであります。

第三番の話として本縣の事情に入つて行きたいと思ひます。今本縣敎育界を見まするに畢竟この四つのハンデイキャツプを背負つて居る外に、國語に於ては二重の負擔をもつてゐることは、よく〳〵考へてみなければならぬことであります。我が青森縣の位置や風俗を考へると仲々面白い所があり、人情に厚いと云ふことも言へると思はれるが、一度富の事を考へると一番惠まれてゐない事がよく分る。この點で東北地方では山形縣あたりが一番惠まれて居ると思ふが、餘裕を持ち、且ゆつくりして居る樣であります。然るに本縣は凶作につぐに凶作を以つてする狀態で、實に困つた狀態であります。私は更に本縣人の素質と、氣質について話を及ぼしてゆきたいと思ひます。この點については思ひ切り率直に判斷し、斷案を下す心算でありますから、本縣の人にとつて、相濟まぬことも出て來るでせうが、それは何卒御容赦を願つて置きたいのであります。一体かういふ性質の話といふものは賞めるだけでは一向藥にならぬものであると思ふのであります。

獨逸では一九二〇年に全國學校會議が開かれて、學校敎育改善の爲に敎育者の總動員を致しました。その時は皆が世界大戰以後の敎育建て直しをやらうと云ふ意氣に燃えて居た時でありましたが、時の内務大臣コッホと云ふ人が首領となつて、學者、官吏、實業家、敎師、青年團、其他合計七百人が、伯林の國會議事堂に集つた。これらの人は何れも全國敎育の智囊とも云ふべき人々であつて、甲論、乙

駁を四日間やつたのであります、その評議を遂げた末にコツホが閉會の辞に於て述べたことは、

「我々ゲルマン民族の持つてゐる重大なる欠陥は、殊に教育者の考へや、重苦しい、熱烈なる努力さへも、皆餘りに自己の仕事のみに打込み過ぎてゐて、とかく他人を理解する能力を缺いてゐる。我々は恰かも勞働者の如くに過度に働いてゐると思ふが、同僚に對して、却つて自分の如くに、正しい仕事をしてゐない如くに、その感情に於ては、甚だしい嫌惡の情を以つてすら、相爭うてゐるのである。この會議が國家に貢献することが出來るならば、全獨逸人の缺陷を反省せしむるにある」。と云つたのであります。

さて、私は青森縣人の長所を隨分知つて居るが、それと共に短所をも存じて居るのであります。縣人の素質については書いたものが從來ないが、我が見る所ではいろいろ多方面に働き得る素質を持つてゐると云つても好いと思ひます。政治家、學者、理學者、科學者等相當多いのであります。近い話は本校出身者で今は故人になられたが、大關久五郎氏の地理學に於ける研究の如きは實に偉大なものであつたのであります。大關氏はあの丹那盆地は斷層であると主張せられ、權威ある他の學者は火山による地震からであると反對して大論爭となりました。大關氏の先生である某氏の如きも收拾に困つて、火山でもあり斷層でもあると云つた程でありましたが、今日丹那トンネルの工事に關して愈々明かになつた如くに、結局斷層であつたではありませんか。大關氏に習つた一學生が私の所へ訪れて來た時に「先生は地下で笑つてゐられるでせう」と言つたが、若し同君が亡くなられなかつたら、今日相當な偉い學者になつて居たことであらうと思ふと誠に殘念であります。

學者と云へば天文學者の權威者の一人として一戸直藏氏を擧げる事が出來ますが、大關氏にしても本校在學時代には近藤保義氏の方が上席であつたのであります。實に天禀の秀れた人で、この二人は常に競爭する地位に置かれて居りました。近藤氏は圖畫も体操も唱歌もとても下手で、その成績點は低いのであるが、それでゐて一年の後成績を調べると近藤氏はいつも大關氏より上位を占めると言ふ程の秀才であつたのであります。けれども卒業後は一小學校教師として遂に一生を終へられたのであります。もしこの人が學者になつたら立派な人となつてゐたでありませう。この手近な例を見ても學者になれる素質を持つて居ながら亡くなられたのが殘念であります。

一般に青森縣人は、哲學者になる素質がないのか、どうも不思議なことでありますが、哲學者は一人も出て居ない樣であります。文藝家の方面では陸實、葛西善藏氏の如く有名な人も出て居る、音樂方面でも優れた人もあるが、力士が一番好い樣だ、有名な人々が出て天下に名を上げてゐる。又本縣の人に餘程適して居ると思はれるのは軍人であ



りませうか、兵隊達が逃げても尙陣地を守つてゐたなどと言ふ話もあるが、恐らく本縣人の氣質はこれに一番適して居るのでありませう。その他宗教家、外交家なども相當出てゐる。これらは縣人が多方面に發展する素質を具へて居ることを意味するので、教育上誠に嬉しい事であります。

もつと嬉しいのは教育界であります。東京に例を取つて見ても、小學校の先生は、非常に評判がよいのであります。今回の追悼會に入つて居る田村喜三郎氏は東京府に於て誰一人知らぬ人はない程、一般から敬服せられた方でありました。又今回祭られた村田猛氏も東京の小學校長諸君から推服されてゐる人であります。斯樣に東京に出て來た人々は皆よい成績を擧げて居られて、結構な事でありますが、本縣に居られる方には御跡許でありますから、尙一層の御奮闘をなされて居ることゝ思ひます。兎に角一般的に本縣人は教育者には適して居る樣に思ひます。

尙最近の狀勢から見て東北方面からは有名な教育者が輩出して、國家に重きをなして居ります。山形縣人の吉田熊次、小西重直、仙台の人で佐藤熊次郎、福島の藤井利譽等の諸先生を出して居ります。本縣人は寧ろ初等教育家に熱心で努力家が多くある樣に見受けられますが、縣人の素質は多方面であつてそして一流所がないと言ふことになる。これは第一流に行けないのであらうかそれとも努力が少ない爲に一流になれないのでせうか、私は矢張り後者と考へたいのであります。磨きが足りない。もつともつと磨きをかけなければならないと思ひます。そして私はこの磨かれると云ふことによつて、教養と努力とによつて磨けば、高度の素質を表はすことも出來、又人材があらはれて來るものと信じてゐます。私は更に青森縣人の素質について申述べたいが、とかく斷片的になり易く、その上私の議論は科學的でありませんから是位にとゞめて置きます。

次に氣質について申述べますが、縣人を評して、① 言吶にして行に敏ならず、されど人情には篤し、と言つてゐたが私も前二者は感心できませんが、後の者だけは信じてゐます。② 本縣人は一般に常識に缺ける所が多いと云はれてゐます。常識と言ふのは世間一般の誰でも知つてゐる程度の知識と云ふことですが、私はこゝでは常識とは特に人間同志の交際と言ふことに考へを及ぼして行きたいと思ひます。これは本縣人に缺けてゐる、その他いろいろの欠けてゐる點は多いが、殊に禮儀作法に缺點があつて、人の前で一寸した敬禮位なら出來るが、一般的な廣い意味の禮儀はまだ／＼感心できません。この點は今後とてもいろいろ氣をつけなければならぬ問題だと思はれます。出世が遲いといふのも或はこの事が多少なりとも影響してゐるのではないかと思はれます。何もさう詔ふと云ふ程のものではなくて禮儀作法としての問題です。深く考へてみて貰ひたいものです。③ 協同性の發揮が乏しいといふ事であります

す。他人と協力して仕事をして行く力と言ひませうか、力を合せて何か仕事をして行かうとする氣魄がないといふ事であります。ないのでせうか、なければ個人主義ですが、他人と協同して仕事をせぬ癖があるのは困つた事であります。④積極的でないといふ事であります。進んでどん〳〵第一線に立つて仕事をして行かうと云ふ性質に缺けてゐると言ふ事です。出しやばるのを不徳として謙遜を尙ぶのはよろしい。けれども人前に立つて、一番先に仕事をして行く氣がないのは、どうした事であらうか、一面から言ひますと大變奥床しくて、慾がなくて、好い點だと思はれますが、實際仕事をする上から云へば、とかく缺點が伴ひ易く、とても困る問題ではないかと心配して居るわけです。これらは私の性質を言つてゐるのでありまして、私の缺點を申上げてゐるのであります。兎に角どうも、この積極的な氣魄に乏しいのです、更に考へ方も乏しいので、その位置に滿足してゐて發展性がないと云ふことも云ひ得ることゝ思ひます。⑤人情に篤い。人情には富むが一方熱情に乏しいと言ふ事であります。熱烈に物事をやるとか、萬事を熱情でやつて行くと言ふ氣魄に乏しいのでないかと思ひます。暢氣で無慾で利巧でないと云ふ暗い感じを與へて呉れます。⑥用意に周到を缺いて遠算が多いと云ふ事であります。仕事をやらしても拔けて居るところがあると云ふのであります。入學試驗など受けて、普通なら當然パスすべき所なのに、「是でえがべねえ（笑聲）」と云ふ樣な氣持で受けるのが多いやうに見えます。大丈夫是でパスすると云ふ自信は好いが、あんまり任せきりで周到でないといふ事であります。私の友人で文部次官の祕書をしてゐた人がありました、次官が頼むとその仕事を必ずその日のうちにやつて仕舞ふ、といふ人がありましたが、次官はこれは使ひ所のある人物だと思つたのでせう、それがどんどん位が上つて行つたといふのを知つてゐます、是などは敢て機嫌を伺ふと云ふ、ポリシーがあつたかも知れないが、結局は用意周到だといふ事が出來ると思ひます、であるから我々は日常生活におきましても、落のない鍛練が必要ぢやないかと思つてゐます。次に本縣人は⑦荒削りであるといふ事です。大きな線も好いが、とかく困る場合が多いものです。例へば言動が粗野だとか、品性が下卑だとかいふ非難は免れ得ません、然し仕上げをかけると立派なものになる素質を持つてゐますが、小刀細工の樣な氣の利いた事が出來ないと云ふ事になりませう。最後にこの縣人の最も不利益なのは、⑧言葉がよくないといふ事であります。私などが高等師範へ入學しても言葉には困つた、そこで私の筋向に居る關君と二人ばかりで津輕辯で話さなければ通じない（笑聲）他縣の者は話をやめてこれを聞いて笑ふといふ始末、私などはムキになつて怒つたりなど致しましたが、よくからかはれたものでした。そこで私達は他の



縣にも方言といふものがあるに違ひないと思つて調べてみると、鹿兒島だとか、四國だとかいろ〳〵の國の方言があります。が、本縣の方言はそれらの方言に比較して分量に於ても、種類に於ても、遙かに多いといふ事がよく分りました。五十歩、百歩と云ひますが、百歩となれば倍數ですから、何としても言葉に煩はされます。結局何か云はうとする時はそれを標準語に考へ合せて、それからどういふ發音するかを決めて、それから云はなければならぬとなれば時間的にも大變不經濟です。これが自然に言葉をも消極的ならしめて居るわけであります。だから、青森縣人には人材はあるが認められない。又一流所が出來ないと言ふことも云ひ得ると思ひます。この言葉から受ける不利は、述べるべき意見も控へる樣になり、人には認められぬ樣になり、從つて出世が遲れると云ふ樣なこともあり得ると思ひます。

では、青森縣の教育について、どう考へるか、といふ問題になりますが、それはつまり以上述べ來つた所を裏返してゆくと分ることだらうと思ひます。

第一は磨くことです。うんと力のある限り磨くことです。磨いて鍛練して、訓練して、そして內部に持つてゐる素質に磨きをかけることです。好い素質を發揮させる事です。今迄はそれが出來ずに、足りないことばかり感じて居ました。これは時間數が少いのに教材の分量が多いといふこともありませうが。鍛練し訓練することに努力を注ぎたいものだと思ひます。諸君のお骨折りを希望するのであります。私は今世間で偏智教育だと云ふことをよく聞きますが、その意味する所には贊成出來ません。

第二は周到な用意のもとに仕事をする樣に、小さい時から教へることであります。遠算のない仕事が出來るやうに躾けることです。

第三は積極的に內部に持つてゐるものを外部に發表させることです。これには多大の指導を要する、練習の必要もあるのであります。そして我國平均點のレベル迄は漕ぎつけさせるといふことでありたいと願ひます。

第四は調和的、協同的態度を養ふ樣に訓練することであります。子供達が惡る氣がなく協同して事をやる樣になれば好ましいことだと思ひますし、又團體觀念も養はれ、團結して快く仕事をする樣に一層力を注いで貰ひたいものと思つて居ります。

第五は特に力を入れて貰ひたいと願ふ言葉の問題であります。これには格段の力を、注ぐやうにしたいと考へますが、同時に禮儀作法といふものにまで及して行かねばなりません。教育することは教育者自身は勿論ですが、子供にはよく分る樣に、徹底的な訓練をして、貰ひたいと思つてゐます。

第六は教授方法上の注意であります。種々珍しい教授方法が出て來るとそれに走つて喜びすぎる傾向がある樣に思はれます。技巧に流れて遂に溺れ、しかもそれを謳歌する態度は餘り感心しない。そんなものに直ちに目を奪はれる樣ではまだいけません。教育の道は坦々たる大道を胸を張つて濶歩する氣持で邁進しなければなりません。如何に珍らしいからうと新らしいからうと、徒らに小刀細工を要するのは取るに足りません。重要點をすつぽかしては全く價値が顚倒して仕舞ひます。何卒價値顚倒を來さぬ樣に努力して欲しいのであります。

私は思ひ切り惡口を云ひましたが、然し本縣人の將來については決して失望しては居りません。皆さんは此の歪められて居る、性格上の缺陷に注意して、教育を行はれまして、立派なものに仕上げる事に氣をつけて戴きたいと思ひます。青森縣教育の方針は何かと云ふ時に、この教育方針が、何らかの御參考になれば、私の仕合とする所であります。長い時間に涉つて御靜聽下さいまして、有難うございました。（拍手）。（文責在編者）

——筆記者、木村壽造、中村禮作——

記念講演會は午後零時四十分に終り、學校長の謝辭があつた。會員一同は直ちに揃つて、會場たる寄宿舍食堂に赴いて、記念祝宴に移つた。



祝

賀

會

# 記念祝賀會

十月二十五日記念講演會終了後、直ちに寄宿舍食堂を會場として、祝賀宴を備された。午後一時十分煙火を合圖に開會。學校長より挨拶、廣島文理科大學長來賓を代表して謝辭を述べられ、献酬酣なるに及んで和氣室に滿ち、歡語堂に溢れて、愈々盛會を加へて來た時に中村檢事正の發聲によつて萬歳三唱。記念式萬歳の聲も處々に起り、久濶を謝する者、舊交を溫むる者、往時を語る者、抱負を陳ずる者等益々佳境に入り、夕刻に至つて散會した。

會する者四百四十名であつた。



# 音樂大會

# 記念音樂會

創立六十周年記念音樂會は十月二十六日午後一時から本校講堂に行はれた。聽衆約千名入場、盛大に行はれて午後四時終了した。
その演奏者並に曲目を左に示す。

1. 齊唱……校友會音樂部員
創立六十周年記念歌　野呂匡歌　岸登佐美曲

2. ピアノ獨奏……本科三年　若佐勝榮
奏鳴曲　ベートーヴェン曲

3. 齊唱及輪唱……本科一年一同
イ、軍國の少年（齊唱）中田章曲
ロ、紅葉（輪唱）文部省曲

4. オルガン獨奏……本科四年　秋元良治
祈禱　レーメンス曲

5. 獨唱……本科三年　二木淺光
伴奏　仝　棟方軍藏
野營の曉　標準男子音樂教科書曲

6. ピアノ獨奏……本科四年　村林平二
幻想的狂想曲　メンデルスゾーン曲

7. 三部合唱……本科二年一同
伴奏　仝　漆畑敏克
仝　福田勝次郎
イ、夕の鐘　教育唱歌集曲
ロ、空を護れ　德山璉編曲

8. ピアノ獨奏……本科五年　立花良一
奏鳴曲　モツアルト曲

9. 獨唱……卒業生　高木正二氏
伴奏　專攻科　前田兼太郎
蓮の花　シューバルト曲

10. ヴアイオリン二重奏…本科三年　三浦信一
仝　四年　齋藤嵩
牧歌　シモネツティ曲



11. 齊唱及獨唱……附屬尋六女一同
三才女　獨唱　宮川テル子
文部省曲

12. ピアノ獨奏……專攻科　新田勝一
銀波　ワイマン曲

13. 獨唱……本科五年　伴悌三郎
伴奏　仝　立花良一
イ、海鳴り　黑澤隆朝曲
ロ、ジョセランの子守歌　ゴダール曲

14. ピアノ獨奏……卒業生　淺坂廣一郎氏
ホーム・スキートホーム幻想曲　ランゲ曲

——休憩——

15. 三部合唱……本科三年一同
伴奏　仝　若佐勝榮
イ、菩提樹　シューベルト曲
ロ、雁がわたる　文部省曲

16. ヴアイオリン二重奏……
第一　ヴアイオリン　山田敎諭
第二　ヴアイオリン　長尾訓導
ピアノ　岸敎諭
競奏曲　イ短調（第二樂章）緩除調
ヴイヴアルディニ曲

17. 獨唱……卒業生　二ツ森利雄氏
伴奏　仝　長谷川芳美氏
イ、私の太陽　ナポリ民謠
ロ、上北地方子守歌　二ツ森利雄編曲

番外　ピアノ獨奏……卒業生　十文字哲純氏
奏鳴曲　ベートーヴェン曲

18. 合唱……青森女子師範四年有志
伴奏　石岡のぶ子女史
ヴオルガの舟唄　德山璉編曲

19. オルガン獨奏……本科五年　齋藤善太郎
追覆樂　ハ短調　バッハ曲

20. 獨唱……岸　教論
伴奏　石岡のぶ子女史
イ、小夜歌　シューベルト曲
ロ、荒城の月　瀧廉太郎曲

21. ピアノ獨奏……卒業生　三浦俊八氏
奏鳴曲　モツアルト曲

22. ヴアイオリン獨奏……卒業生　石郷岡省三氏
伴奏　仝　柳谷千代四郎氏
タイスの瞑想曲　マスネー曲

23. 獨唱……青森女子師範　石岡のぶ子女史
伴奏　岸　教論
さすらひ人　シューベルト曲

24. ピアノ獨奏……卒業生　外崎三千男氏
即興曲　シューベルト曲

25. 合唱……校友會音樂部合唱部員
本科四年　音樂選修生
流浪の民　シューマン曲
獨唱　仝　五年　立花良一
仝　二年　對島正克
仝　四年　木村禮一
指揮　岸　教論
伴奏　ピアノ　仝　四年　村林平二
タンブリン　長尾訓導
トライアングル　仝　四年　堀内義敬



# 記念體育大會

# 記念體育大會

十月二十七日に豫定されて居た体育大會は生憎朝來の雨の爲に流された、そして此の日は校舍内の整頓並に清淨作業に用ひられた。

十月二十八日は實に祝福された快晴の好天氣、正に運動日和である所から一同の意氣大いに上り、午前八時より次の順序によつて開始された。

## 大會役員

會長　熊谷美登利
副會長　田向初三郎
審判長　藤嶋常夫　兒玉一郎
進行係　及川正夫　鳴海恒男　小林修三
召集係　小山内鐵腸　會津定吉　塩谷繁男　立花良一　野呂武二
出發合圖係　藤嶋常夫　若佐勝榮　三上八四雄　秋元達夫
川村源太郎　白取福藏　小山内正三　齋藤清一郎



決勝審判係　荒川謙治　佐藤勇介　小山田七次郎　池田純治　長尾孝作
神保　佐々木繁雄　丹内正一　大庭　茂　佐々木金一
小關逸夫
時計係　野呂匡　白石信一　砂崎宏　千葉醇　米田良逸
場内司令並監察係　眞田玉造　高田廣喜　川島藤太郎　花田哲幸　小山清榮
松江達雄　工藤祐吉　坂本豊太郎　福井浪雄
跳擲審判係　山田實　築山治三郎　堀内芳藏　村中安次郎　今村貞藏
鈴木富士雄　三上正章
記錄係　岩藤卯一郎　宮川隆治　今井六哉　古川德松　中道武雄
坂本功　阿部勇　小山内義正　秋田谷恭敏　長内貞三
救護係　村上不二　岩藤卯一郎　和田千藏　濱田チセ
通告並演奏係　岸登佐美　長尾孝作　新田勝一　齋藤善太郎
接待係　石場正敏　西館彌輔　今井六哉　吉田辰藏　澤田平十郎
上田常三郎　古川德松　近藤正　中道武雄　船水みき
江刺慶子
會場係　小山内鐵腸　佐藤勇介　及川正夫　小山田七次郎　池田純治
岸登佐美　高田廣喜　藤嶋常夫　古川德松　力石定吉

用具係　三浦次男　川村源太郎　教生　競技部員
　　及川正夫　藤嶋常夫　力石定吉　三浦次男　川村源太郎
　　前田兼太郎　木村金次郎　吉田正美　教賀緑郎　教生
　　競技部員
總務係　菅沼貴一　野呂匡　白石信一　古川德松　上田常三郎
　　澤田平十郎　工藤清文　坂崎仁佐雄　千葉醇　野呂武二
　　齋藤豊明　中道武雄

——〇印八主任——

# 大會順序

一、集合（朝禮、出缺調査）　全員　午前八、〇〇
二、君が代二唱並國旗揭揚　八、一〇
三、開會ノ辭　會長　八、一三
四、競技上ノ注意　審・判長　八、一六
五、創立六十周年記念歌　全員　八、一九
六、第一國民保健体操　全員　八、二三



七、競技開始　八、二〇
八、第二國民保健体操　全員　午後一、〇〇
九、競技終了　一、二五
一〇、旗休操　全員　一、二七
一一、集合　全員　一、四七
一二、成績報告　審判長　一、四八
一三、講評　會長　一、五一
一四、校歌　全員　一、五六
一五、萬歳三唱　全員　一、〇一
一六、國旗降下　一、〇四
一七、閉會ノ辭　一、〇五
一八、解散　一、〇六

# 競技順序

| 順序 | 種目 | 回數 | 本校附屬別 | 開始時刻 |
|---|---|---|---|---|
| 一 | 走高跳 | 一 | 本校 | 八、一〇 |
| 二 | 休操 | 一 | 本校四、五年 | 八、三〇 |
| 三 | 一〇〇米 | 五 | 本校 | 午前八、四〇 |
| 四 | 五〇米 | 五 | 尋一 | 八、四五 |
| 五 | 五〇米 | 五 | 尋二 | 八、四八 |
| 六 | 一〇〇米 | 五 | 尋五(內) | 八、五一 |
| 七 | 一〇〇米 | 五 | 尋六(內) | 八、五五 |
| 八 | 五〇〇〇米 | 一 | 本校 | 八、五九 |
| 九 | 低障害 | 二 | 本校 | 九、〇三 |
| 一〇 | 走巾跳 | 一 | 本校 | 九、〇四 |
| 一一 | 八〇米 | 五 | 尋三(內) | 九、〇七 |
| 一二 | 八〇米 | 五 | 尋四(內) | 九、一一 |
| 一三 | 四〇〇米 | 三 | 本校 | 九、一五 |
| 一四 | 轉球競爭 | 三 | 本校 | 九、二〇 |
| 一五 | 二〇〇米 | 五 | 高一 | 九、三一 |
| 一六 | 二〇〇米 | 五 | 高二 | 九、三五 |
| 一七 | 鳩 | 一 | 尋一 | 九、三九 |
| 一八 | 二〇〇米 | 四 | 高三 | 九、四七 |
| 一九 | 休操 | 一 | 專攻科青敎養 | 九、五一 |
| 二〇 | 一〇〇米 | 三 | 高女 | 九、五八 |
| 二一 | 八〇〇米 | 二 | 本校 | 一〇、〇一 |
| 二二 | 案山子 | 一 | 尋二 | 一〇、一〇 |
| 二三 | 二〇〇米 | 五 | 本校 | 一〇、一五 |
| 二四 | 球中競爭 | 五 | 尋三 | 一〇、二二 |
| 二五 | 砲丸投 | 一 | 本校 | 一〇、二三 |
| 二六 | 紅白置換競爭 | 五 | 尋二 | 一〇、二八 |
| 二七 | 提灯競走 | 四 | 本校 | 一〇、三二 |
| 二八 | リンゴになれ | 五 | 尋一 | 一〇、四二 |
| 二九 | 二人三脚 | 四 | 本校 | 一〇、四七 |
| 三〇 | ブランコ | 一 | 尋三、四 | 一〇、五二 |
| 三一 | 障碍物競走 | 四 | 本校 | 一〇、五八 |
| 三二 | 三段跳 | 一 | 本校 | 一〇、五八 |
| 三三 | スプンレース | 三 | 高女 | 一一、〇六 |
| 三四 | 二五〇〇米 | 一 | 本校 | 一一、一〇 |
| 三五 | 縄跳競走 | 五 | 尋四 | 一一、一六 |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 三六 | 縄跳競走 | 五 | 尋五 | 一一、二二 |
| 三七 | 兵隊さん | 一 | 尋二 | 一一、二六 |
| 三八 | 倒立歩行 | 一 | 本校 | 一一、三二 |
| 三九 | 百足競走 | 二 | 本校 | 一一、三七 |
| 四〇 | 休操 | 一 | 高一二、三 | 一一、四二 |
| 四一 | 轉球競走 | 五 | 尋六 | 一一、四九 |
| 四二 | 綱引 | 一 | 本校 | 一一、五四 |

—— 晝 食 ——

自午後零時十分
至午後一時

第二回國民保健体操

| | | 全員 | 午後 |
|---|---|---|---|
| 四三 | 休操 | 一 | 一、〇〇 |
| 四四 | 武裝競走 | 本校一年 | 一、一〇 |
| 四五 | 障碍物競走 | 二 | 一、一〇 |
| 四六 | 幼き頃の思出 | 高一 | 一、一六 |
| 四七 | 障碍物競走 | 高女 | 一、二三 |
| 四八 | 障碍物競走 | 五 | 一、四〇 |
| 四九 | 教練 | 高二 | 一、四五 |
| 五〇 | 繼走 | 四 | 一、四九 |
| 五一 | 休操 | 高三 | 一、四九 |
| 五二 | 提灯競走 | 一 | 一、五九 |
| | | 職員 | 一、五九 |
| | | 四年 | 一、四九 |
| | | 本校二、三年 | 二、〇八 |
| | | 來賓並卒業生 | 二、一六 |
| 五三 | 四×二〇〇米 | 一 | 本校 | 二、二五 |
| 五四 | 水師營の會見 | 一 | 尋三以上 | 二、三〇 |

當大會に於ける優勝生徒名の氏名を記せば

| 種目 | 學年 | 氏名 |
|---|---|---|
| 轉球一 | 一年 | 松野槇一 |
| 百足 | 〃 | 松本廣海 |
| | | 花田要一 |
| | | 須田正三 |
| | | 長尾勝衛 |
| | | 中平茜作 |
| 一〇〇m | 二年 | 村林二郎 |
| 〃 | 〃 | 高橋誠一 |
| 四〇〇m | 〃 | 相馬勇一 |
| 〃 | 〃 | 千葉和美 |
| 轉球二 | 〃 | 松尾忠男 |
| 〃 | 〃 | 千葉和美 |
| 二〇〇m | 〃 | 村林二郎 |
| 八〇〇m | 〃 | 山口敏光 |
| 提灯 | 〃 | 對馬義郎 |
| 〃 | 〃 | 古川健造 |

〃　新岡尙文
〃　長尾文武
百足　米田米三郎
〃　工藤保
〃　山村三四郎
〃　石村正
障害三年　沼田尙康
武裝〃　米田良逸
100m　四年　唐牛金雄
400m　〃　今富雄
200m　〃　舘山林八郎
〃　沼宮内秀夫
二人三脚　〃　佐藤芳男　伊藤久四
武裝　〃　堀内義敬
100m　五年　木村壽造
走高跳　〃　相川守
砲丸投　〃　齋藤伊佐雄
200m　〃　渡邊慶雄
〃　齋藤伊佐雄
〃　木村壽造
二人三脚　〃　秋田谷恭敏　福井浪雄

〃　奈良正夫　鹿内義郎
障碍　〃　齋藤清一郎
倒立　〃　盛民藏
綱引　〃　五學年チーム
100m　專攻科、實教　小山内正三
低障碍　專　前田兼太郎
〃　丹内正一
400m　實　工藤嘉夫
〃　專　白取福藏
5000m　佐々木繁雄
走巾跳　〃　白取福藏
三段跳　〃
二人三脚　〃　坂本豊太郎　大庭茂
障碍物　〃　飯田輝夫
〃　〃　對馬安喜代
1500m　〃　佐々木繁雄

尙職員競爭は轉球競技であつたが、優勝順位に示せば、次の如くなる。校長先生組、菅沼先生組、田向先生組、石場先生組。



次に學年の優勝順位並に得點を示せば

| | | |
|---|---|---|
| 第一位 | 第四學年 | 一八八 |
| 第二位 | 專攻科及實教 | 一六五 |
| 第三位 | 第二學年 | 一六一 |
| 第四位 | 第五學年 | 一三四 |
| 第五位 | 第三學年 | 一二七 |
| 第六位 | 第一學年 | 一一〇 |

右体育大會は秋日和に惠まれて豫定通り午後三時に終了した。午前十時頃よりは觀衆も益々多きを加へ、頂上僅かに雪を戴いた八甲田の峯は麓に紅葉の錦を纏うて睥睨してゐた。待ちに待つた六十周年記事行事も、芽出度茲に萬事終了し、心からその成功を喜んだのである。更に明日は學校教練の査閲が練兵場に於て行はれる。疲れを休める暇もなくて緊張々々と續けられてゆく、還暦を迎へて茲に更生、誕生の氣持の上から見ても、直ちに元氣に踏み出してゆく姿は雄々しいものである。編者はこの明日の雄姿堂々たる生徒達を想見しつゝ筆を止める。

# 其の他の行事

# 六十周年記念食堂部報告

## 一、本年度食堂に出張を許可されし商店

(1) さぬき屋　榮町
(2) 合浦壽し屋　仝
(3) 木村だんご屋　公園入口
(4) 榮作堂　寺町國道通
(5) 敎育會館　榮町

## 二、期間

体育大會日を除く記念祭期間中
十月二十三、四、五、六の四日間

## 三、利益の徴集歩合は總賣上高の五分とす。

## 四、各商店の賣上金額及品名。

▲さぬき屋

| | 二十三日 | 二十四日 | 二十五日 | 二十六日 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| イ、そば | 四、九〇 | 四、四〇 | 二、三〇 | 二、一〇 | 三、七〇 |
| ロ、うどん | 一、九〇 | 一、〇〇 | 〇、九〇 | 一、一〇 | 五、〇〇 |
| ハ、なべやき | 六、九〇 | 二、二五 | 三、〇〇 | 五、五〇 | 二六、七〇 |
| ニ、天ぷらそば | 六、二〇 | 四、六五 | 二、一〇 | 二、四〇 | 一五、三〇 |
| 計 | 一九、八五 | 二二、三〇 | 八、三〇 | 一二、二五 | 六〇、七〇 |

▲木村屋

| | 二十三日 | 二十四日 | 二十五日 | 二十六日 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| イ、あんかけ | 三、一〇 | 二、九〇 | 二、七〇 | 三、〇〇 | 一一、七〇 |
| ロ、あんころ | 三、七〇 | 三、九〇 | 二、五〇 | 三、〇〇 | 一三、一〇 |
| ハ、密かけ | 〇、七〇 | 一、一〇 | 一、八〇 | 一、九〇 | 五、六〇 |
| ニ、しるこ | 八、七五 | 八、二〇 | 五、八五 | 五、一〇 | 二七、九〇 |
| 計 | 一六、二五 | 一六、二〇 | 二二、八五 | 二三、〇〇 | 五八、三〇 |

▲合浦壽し

| | 二十三日 | 二十四日 | 二十五日 | 二十六日 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| イ、壽し | 四、九〇 | 三、七〇 | 五、七〇 | 七、二〇 | 二一、五〇 |
| ロ、いなり | 一、八〇 | 二、一〇 | 一、三〇 | 一、五〇 | 六、七〇 |
| ハ、ちらし | 〇、五〇 | 一、三〇 | 一、一〇 | 一、七〇 | 四、六〇 |
| ニ、生ずし | 〇、七五 | 一、〇〇 | 〇、五〇 | 〇、〇〇 | 二、二五 |
| 計 | 七、九五 | 八、一〇 | 八、六〇 | 一〇、八〇 | 三五、四五 |

合計　六十円七十錢也

合計　五十八圓三十錢也

合計　三十五圓四十五錢也



▲榮作堂

| | 二十三日 | 二十四日 | 二十五日 | 二十六日 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| イ、パンとコーヒー | 一、一〇 | 三、一〇 | 二、六〇 | 一、七〇 | 八、六〇 |
| ロ、コーヒー | 二、七〇 | 三、〇五 | 三、四〇 | 三、五〇 | 二一、六五 |
| ハ、紅茶 | 〇、三五 | 〇、九〇 | 〇、三〇 | 〇、二五 | 一、八〇 |
| ニ、ミルク | 〇、六〇 | 一、五〇 | 一、三〇 | 〇、四〇 | 三、八〇 |
| ホ、ケーキ | 〇、五〇 | 一、三〇 | 二、七〇 | 五、一〇 | 九、六〇 |
| ヘ、各種パン | 一、一〇 | 一、五〇 | 二、六〇 | 一、九〇 | 七、一〇 |
| 計 | 六、四五 | 一一、三五 | 一三、九〇 | 一三、八五 | 四三、五五 |

合計　四十三圓五十五錢也

▲敎育會館

| | 二十三日 | 二十四日 | 二十五日 | 二十六日 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| イ、カレーライス | 二、四〇 | 二、三五 | 七、九五 | 二、九〇 | 七、六〇 |
| ロ、ハヤシライス | 五、八〇 | 九、二〇 | 一、〇〇 | 一、二〇 | 八、二〇 |
| ハ、ランチ | 五、九五 | 六、六五 | 一、七五 | 四、九〇 | 一九、二五 |
| 計 | 三三、一五 | 四四、二〇 | 一〇、七〇 | 二一、〇〇 | 一〇九、〇五 |

合計　百〇九圓〇五錢也

## 五、四日間の總賣上金額

二十三日 …… 八十三円六十五錢也
二十四日 …… 百一円十五錢也
二十五日 …… 五十三円三十五錢也
二十六日 …… 六十八円九十錢也
總計 …… 參百〇七円〇五錢也

## 六、收入及支出

(1) 收入　拾五円五十五錢也
（商人ヨリ利益歩合五分ヲ徴集）

(2) 支出　拾五円四十四錢也

内譯

六円七十四錢 …… 櫻庭商店
（テープ、紙、筆、鉛筆、ピン、其の他）
四円五十錢 …… 廣告額、マーク入り裝飾品
一円五十錢 …… レコード損料
九十錢 …… 針、蓄音器
五十錢 …… 麻紐代
一円三十錢 …… 食堂接待費
（新聞記者、外七名）

⊙殘金十一錢也

# 郵便局出張事務

青森郵便局では本校記念日即ち十月二十三日より、全二十七日まで五日間に渉つて本校へ出張し、郵便事務に當られて、今回の催物中に異彩を添へられた。而して開設されたこの期間に押捺した記念消印數は、局扱四九九五、學校扱四三九四、合計九三八九通に及んで居る。又本校では別に記念繪葉書其他記念品に押捺する爲に記念スタンプを作つた。

## 記念品

一、表彰者に贈呈し、又特別來賓に献上したのは南部鐵瓶であつた。表彰者に呈上したのは姓名を鑄出してある品、兩品共に創立六十周年記念と本校名を蓋の内部に鑄出してある隅取角形の上品な作である。

二、來賓には、記念扇子、學校一覽、記念繪葉書一組を一同に贈られた。

三、職員には、右の外に記念カフス釦を添へて贈られたのである。

右の扇子は「先德行」の額面を寫眞版印刷にしたもので、五十周年にも頒布せられたものと、意味に於て全じである。

又記念式に參列した一同に祝菓が配られた。

# 懷舊談

# 懷舊談

# 懷舊談について

この懷舊談は六十周年記念誌編輯中でも特に重點を置いた一つであります。既に沿革史で御承知の如く、本校の詳しい記錄は、明治三十年より以前に遡ることが、不可能であります。謂はゞ此の記錄以前の狀態、又草創間もない頃の有樣、無刑和服の頃、そんな時代の働を出來る限り、詳しく殘し傳へようとの計畫で、新町時代の卒業生の方々の内、御健在で且御住所分明の方々全部に渉り、約百五十名の大先輩に懷舊談を御願ひしたのであります。否、寧ろ强要したのであります。還暦に當つて往時を省み、後昆に殘し傳へることの企圖に、直接御援助と御理解とを賜つて、往時を偲ぶ、たよりを與へて下さいました方々に、深く感謝致す次第であります。我々が過去を記すに二三十年を遡ることすら相當難題であると思ふのに、五十年、六十年の昔に思ゝ走らせる事は實に難中の難であつて、この難を我々一同の喜びに代へて見せて下さいました所に、謂ひ知れぬ有難さを感じて居ます。おかげによりまして創立後間もない頃の狀態と生活とが如實に浮んで、末永く、本校の過去を思ひみる唯一の資料になることを固く信じます。願くは七十年祭、百年祭にも御健在でいらせられますことを祈りつゝ。

## 回想斷片

明治一一・四・豫科卒業

林武藏

### 一、自己紹介

拙者　安政五年生、當年七十九歲、師範ヲ出デ、小學校教員トナリ縣屬郡長ニ歷任、退官後五十九銀行ニ入リ同行ノ關係ヲ以テ三戸銀行取締役兼支配人トナリ在勤二十餘年今尙頑健執務中ナリ、無爲持久幸ニ積立金五十二萬圓ノ實現ヲ見、縣下全國ニ類例ナキ好況コソ重役行員株主ト共ニ衷心欣快ニ堪ヘズ

### 二、同學生

第一ニ思ヒ浮ブハ同學ノ人々、卒業ハ明治十一年四月ニシテ、共ニ學窓ヲ出デタルモノ三十四名ト註ス。師範學校トハ稱ヘタレドモ實ハ縣ニ於ケル最高學府、集レル學生モ縣下ノ學者及ビ秀才ト見ルヲ得ベク從ツテ卒業後ノ飛躍目立チタル人々多カリキ、而カモ其人々殆ンド全部他界、田名部ノ西山留吉氏、弘前ノ田澤保次郎氏ト自分ノミ殘レルガ如キハ聊カ寂莫ノ感ニ堪ヘズ、今誠ニ同學生ノ記憶ヲ點呼シテ讀者ト追憶ヲ共ニスルモ興アランカ。

前後シテ靑森市長トナレル工藤卓爾、阿部政太郎、永年ノ弘前助役ヨリ市長トナレル成田德之進、縣屬ニ名ヲ成シタル三浦慶作、郡長ノ丸瀨正果、縣會議長蒲田廣、辯護士山田定雄、一度ハ縣下教育界ニ重鎭タリシ土屋淸心、櫻井政衛、伊澤信、中村至、一戸綱知、鬼柳民丸、坂本忠平、中村安之助、菊池周藏、西山留吉、田澤保次郎等々。

### 三、先生

先生ノ記憶中、特種ノ印象ヲ存セルハ校長藤田利勝先生ニシテ創業的手腕ト言ハンカ時代ニ相應ハシキ計畫者ト言ハンカ教科ヲ教フルト云フノ外人材ヲ錬ルト云フ方面ニ英雄的斷案ヲ實行セラレタルヲ思フ卽チ校舍ノ一部ヲ寄留舍ニ充テ家族的生活ヲナサシメ、處世術ノ實訓目覺マシク、今ニシテ之レヲ思ヘバ吉田松陰松下塾國士輩出ノ型ニモ似タルトコロアリシガ如シ、事務室ニハ天城政容氏アリ、書記トシテノ典型、謹嚴ノ性格ハ學生共ノ敬服ヲ招キタルヲ覺ユ。

### 四、教科

當時ノ最新文化的教科トシテ單語圖、連語圖ナルモノアリ、之レヲ揭ゲテ教師鞭ニテ指セバ、生徒齊唱スルト云フ教授法ナリシ、今之レガ記憶ヲ辿リテ見ンモ面白シ

（單語ノ初メ）イト、イヌ、イカリ

（連語ノ初メ）神ハ天地ノ主宰ニシテ人ハ萬物ノ靈ナリ

### 五、教へ子

卒業シテ教職ニ就キタルハ靑森小學校訓導、教ヘ子中特ニ思出多キハ當時ノ靑森縣令山田秀典氏ノ令孃、今ノ伯爵金子堅太郎閣下ノ奥方アルコトナリ。

以上斷片ヲ羅列シ創立六十周年ノ盛典ニ滿腔ノ祝意ヲ捧クト云爾。

明治一一・四・豫科卒業　菊池周藏

拜啓來る十月母校六十周年記念式御擧行之際記念號御發行の趣にて老生原稿依賴相成候得共老齡既に八旬身心共に耄し硯筆覺束なく候右に付不悪御賢諒被下度別紙及返戻候　早々

八月四日　南津輕郡五郷村本郷

明治一二・八・本科卒業

## 原子千代三郎

明治九年九月廿日小學師範學校ヲ青森ニ設置シ、本校ハ青森町字新町舊倉廩ヲ以テ本校假校舍ニ充テ、十一月十日ヲ以テ開校シ之ヲ本校創立ノ日トナス。本校生徒ハ本科豫科ニ分チ本科生ハ二十五名ナリキ、假寄宿舍ハ青森大町村井新助宅ヲ以テ充テリ（仝十二年迄）校長ハ藤田利勝、教員ハ鎬木信正、土岐八郎、鹿内喜典、對馬運作、棟方角馬、岡本長滿、傍嶋正郡、西舘忠央、桐野弘ノ十氏ヲ以テ本科一回卒業迄ノ授業ヲ終了ス。

明治十二年八月十四日午前八時講堂ニ於テ、卒業授與式ヲ行フ。全職員列席シ校長ヨリ卒業生十四名ニ對シ、各自ニ証書ノ授與アリ終リテ校長左ノ訓辭ヲ爲ス。

諸君ニ告グル一事アリ、曰ク、誠意誠心ヲ以テ眞實ニ職分ヲ盡スベシ、他人ノ勤惰ニ拘ラズ、自ラ勉メテ止マザルベシ、凡俗ノ毀譽ニ心ヲ動カサルル事ナクシテ能ク自立セヨ、縣下ノ靈黄君等ヲ春トシ、溫トシ、以テ發育ヲ遂ゲントス、宜シク夏日ノ威、冬日ノ愛ヲ兼備シ周歲ノ功庸ヲ全ウスベシ。

明治十二年八月十四日

師範學校長　藤田利勝印

本科卒業者諸君江

一、本科生ノ授業擔任者及ビ教科書ハ下ノ如シ

校長　藤田利勝　物理科（格物入門）地理科（輿地誌略）教育科（彼日教授論）歷史科（清三朝事略）

教員　鎬木信正　修身科（勸善訓蒙　正篇・後篇）

仝　傍嶋正郡　國漢科（松苗巖氏　國史略　正篇・續篇）文法科（中根淑　日本文典　二冊）

仝　對馬運作　數學科（算術、代數、幾何）

仝　土岐八郎　物理科（校長續、格物入門）化學科（化學訓蒙）生理科（健全學　杉田氏）

仝　岡本長滿　漢文科（十八史略）（作文）

仝　桐野　弘　經濟科（英氏經濟論）

仝　棟方角馬　画學（臨學）

仝　西舘忠央

仝　鹿内喜典　歷史科（國史略）（作文）

一、試驗制度ハ一學科十點法デ毎六ケ月ニ一進級ヲナス。及第點ハ平均點九割五分ヲ得ザル時ハ進級スル事能ハズ、併シ茲ニ及第點ヲ緩和スル法ヲ設ケ、即チ勤勉點六ケ月毎ニ滿點六點。人品點六ケ月毎ニ滿點六點。計十二點アリ。假リニ總學科目十二科目ノ時ハ、學科平均點ニ於テ八割五分ヲ得テモ勤勉點ト人品點、滿點十二點ヲ得ル時ハ一割ノ增點ヲ得ルガ故ニ九割五分トナリテ進級スル事ヲ得ルナリ。

一、我等明治九年十一月入學以來仝十二年八月迄、即チ卒業期迄ニ特記スベキ件ハナシ、併シ書クニ忍ビザルモ一回ノ「ストライキ」事件アリ、其事件ノ發端ハ學校ヨリ卒業期間際ニ至リテ四級ヨリ一級迄ノ讀ミ殘リノ本ヲ全部讀了スベク讀了ノ上ハ試驗ヲ行フトノ苛酷ナル嚴達ナリキ、是ニ於テ一級生全部十四名ガ擧リテ捺印シテ退校願ヲ提出セリ、幸ニ職員ノ一人ナル土岐八郎氏、職ヲ賭シテ其間ニ斡旋シテ漸ク其ノ命令ヲ取消サシメタリ、然レドモ生徒ノ惡感容易ニ去ラザレバ、之ヲ解消センガ爲メニ全員ニ對シテ縣ヨリ一名ニ付十五圓宛貸與シ、東京師範學校並ニ小學校學事參觀ノ名ノ下ニ學校長自ラ之ヲ統率シ往復一ケ月ノ見込ニテ四月出立セリ。

以上ハ御參考トシテ記錄スベキ材料ニナラザルベキモ、御依賴ニヨリ記憶ヲ辿リ、甚ダ粗末ナル書キ振リ請フ幸ニ諒セヨ。

明治一一・四・豫科卒業
明治一三・二・本科卒

## 田澤保次郎

芳翰拜誦吾か母校も爾來隆々六十年の星霜を迎ふること御同樣欣賀此事に奉存候御下命の件至極贊成に候へ共如何せん老齡老病にて從來の痼疾なる慢性腎藏炎再發年々兩三度は必ず襲はれ目下臥床に在り又復中止することは分り居り候へ共執筆草稿を貴誌に揭くる事は到底覺束なく存し候につき甚た遺憾に候へ共、何卒他の方に御依賴相成度、第一回卒業生にして弘前在府町成田德之進仝塩分町原子千代三郎第二回にて本市鷹匠町黑石正大三本木篠田龍夫千葉縣寓居の樋口亮諸氏へ御照會相成ては如何かと存し候に付御參考迄に申上置候それとも幸にして快方に向ひ執筆可能の節は御參考位迄に草稿呈上の意に候へ共目下の處全く見込不相立候間不惡御聞濟置被下度尙申上候が實費は呈上仕る可く候間御完成の後一冊特別に御配布出來間敷候哉否や出來得るならは有難く候目下臥床中執筆御判讀奉願候併て貴會の萬福隆昌を祈る

匆卒拜復

七月一日　弘前市西大工町二三

# 追憶

明治一三・二・本科卒業

黒石正大

母校の創立六十周年になるので、第二回卒業生と云ふ側で何か追憶談を書けと云はれるが、何しろ六十年も前の事であり且遲生れの十六歳の頃であり、をかしな話だが實は學校の目的もよく辨へずに小學校の先生の勸めのまゝに行つたやうなものであつた。

學校も津輕藩の米倉を手入れして、之に宛て、寄宿舍も初めは大町の村井新助と云ふ町年寄か何かの家に寢泊りしたもので、學科や教師の事は先輩原子氏が書き立てたと云ふから僕は別に云はぬが、黒石から一緒に入學した者は四名で皆本科に編入されたが、内二名は家庭の都合で豫科へ移り、他の本科生は重に弘前人で全部で二十四五名であつたと思ふ。蒲田、佐田などと云ふ人々は東奥義塾の高學年で相當にやつて來た人達であつたが、その人々の後についてやつと下等小學を卒業したばかりであるから、隨分苦しかつた。それでも漢文などは大分讀んで來たので、岡本先生から「夢にヒマラヤ山に登るの記」などといふ題を課された時なども漢文で作つて出したと思うてゐる。唯卒業の時に西舘先生から、鯉の瀧登りを書かされた時には閉口した、如何となれば棟方角馬先生や、西舘忠央先生は共に柔和な先生方ばかりだから、圖畫の時間にはずるけて碌に書かなかつたからである。それでも知識慾旺盛の時代だから英語などを少しの暇でもあれば稽古したものである。それは義塾から來た人達が教へて呉れたのである。ビネオの文典を藤田校長の奥さんから貰ひ、單語は初めは蒲田さんから書いて貰つて覺えたものだ。それでもパレーの萬國史やミツチエルの地理書や、グードリツチの英國史位を嚙りつけたものである。處が卒業試驗の時に落第した。殘念でたまらぬ、六ケ月遲れねばならぬ、段々と調べて見たら總點に於て一點半不足といふので落第だ。

當時一般に操行點とて通常十二點の恩點があつた、然るに僕には二點半しか呉れなかつた、それで一點半の不足である、幹事土岐八郎先生の處へ掛合に行つて、何の爲に二點半より呉れなかつたかを聞いた、別段之れと云ふ惡いこともしなかつた樣に思ふがどう云ふ譯でありますかと伺つたら「お前は人物が惡いから」とのことであつた、それで一言もなく落伍して第二回目に出たのである。

明治十年には西南戰爭が始まり、賊軍猖獗、殊に拔刀隊は鎭臺兵を惱ますので政府は東奥の雄藩たりし津輕の士族を起して之に當らしめんとし、津輕子爵を弘前へ出張せしめて徴募巡査を集めたのであるが、之を知つた佐田本科生



素より氣慨を以つて鳴りし人、一同に對して我々も國家の危急を見て晏然として居るべきでない、弘前に行き應募を申込まねばならぬと、一同之に和し、即夜同氏は弘前に行つた。

當時藤田校長並に蒲田本科生は、各所用ありて弘前に居り、之を知つて大いに驚き、佐田氏を拉して共に歸り本科生一同を教室に入れ、突飛な行動罷りならぬ、とえらく油をとられた。其の間僕なども外二名と山田縣令を官舍に訪ひ、是非やつて貰ひたいと歎願した。

其あたりは長官とても別に威嚴めかさず、青二才の學生が訪問したのに無造作に二階の居間に通され、今でも覺えて居るが湯上り浴衣の儘にて、傍に警部さんが一人居つたが、其志を褒め、尙國家がお前方を差向けるまでの急を告げて居らぬから安心して專心學問すべきであると、諄々說きさとされて引き下つた。

當時の米倉學校から縣廳通りがよく見え、杉山龍江・木村繁四郎等巡査隊の大將分の方々は錦の袋に刀を入れ、之を肩にして縣廳へ出入りするのを見て、一層感奮したものである、併し我々の其當時は武道すたれ、體操等は未だ系統立たず從つて身體の鍛錬更になく、軟弱そのものであるのに、よくまアあんな元氣があつたものであると思ふ。

年長者は在學中にも各郡へやられて、小學校教師の指導養成の爲派遣されたやうである、其中で若氣の衝動から失敗した人もあるやうだが、僕はそんな方面へは向かなかつたが、東京見物には加はつたのである。

今それを書き足さうと思ふ、段々卒業期になつたので縣廳で東京見物、今の修學旅行をさすことにしたので、縣から各〻十五圓を貸與して本科生丈けで（豫科生は行かぬことになつてゐた）行ふことになつた。藤田先生が引率で、參加者は確か十六名だつたかと思ふ、其時の同行者は今一人もない。皆故人となつてゐる。原子千代三郎氏はその時事故不參加、三本木の篠田龍夫氏は希望したが行けなかつた樣に覺えてゐる。

第一日は野邊地迄行つたものだ、僕は一番年少者で身體眇小で足弱の一人だつたので、馬門に着いたら足が上らなくなつた、村の中の橋に身を倚せて居つたら後から藤田先生と蒲田と二人駄馬に跨がり來られた、蒲田氏は確か兵站部の筈である、之を見て直ちに馬から降りて乘せて呉れたので助つた、宿に着いて見たら、足は肉刺だらけだ、皆の世話で手當をしたが中々痛い、已むを得ず翌日人力車に乘つて七戸邊り迄行つた。

三日目から何ともなかつた。福島縣白河町などは旅舘が青樓兼業であつた、御飯の時に兩側に並んで上座に校長先生あり、飯盛女七八人其間に侍り込んだ、累性がニヤニヤやるんで、一同茶碗の中ばかり瞰んで嚙込んで居るから、校長先生に「諸君は今日は誠に大人しい」などと賞められ

た。

それから氏家の先き二里許りの處に阿久津と云ふ村がある、今の寶積寺停車場のある所である、そこから川舟に乘つて下つたのである、尤も校長先生にはそこで別れた。此所は隨鑾紀程にも「陸羽方物馬駄至此舟運達東京」とある如く、この川を下つて中利根に這入つた、其時は宵であるので宛も月中天にかゝつて皓々晝を欺くやうであつた、上流より帆前船風を孕んで行き交ふ樣など、海に出たのでなからうかと驚いたものだ。

やがて舟泊りをした、關宿であつたと思ふが、我々の乘つてゐる舟には苫を掛けて夜露を防ぎなどしたが、酒肴を賣る舟が漕ぎつけて來た、佐田氏等はオーライトを極めこんでゐるは勿論苫の間から差入れて宜しくやつたんだらう、僕は酒盃を手にせぬ時だつた。

翌日は江戸川からそちこちと廻り廻つて東京市中の萬世橋下に着いた。アノ廣小路のとある待合に上がり、兎に角旅裝を解き、校長先生は本郷在住の方であるから其の附近に下宿所を極め置かれたので、先づ新しい足袋と下足を買ひ、二人乘の人力車を傭うて二人宛乘つて出かけた。確か十四日許りかゝつて到着したので、顏の色は相當に焦げついて居るのに新しい下足を大威張で、車側に突き出した處の其の對照が頗る目立つた。當時は鶴合羽と唱へ黑羅紗の胸の裏に赤い唐縮緬の切れをつけた、合羽を皆一着に及んで、眼鏡橋を勢ひ込んで走らしたので、人々が目を見張つて見る氣持がした。先づ立派なお上りさんであつたであらう。

色々見學したんだが、其時はまだ東京でも女子師範學校など至つて粗末な木造の低い椅子へ、大きなお尻を二つ並べて掛けて居り、伊澤修二先生は拍子木で合圖しながら唱歌の教授をして居られた樣な塩梅で、萬事其の調子だから格別深い印象は殘つてゐないやうである。洋式の建物位は學校で輿地誌略の挿繪で大分會得もして居るんだし、想像通りだと思つたに過ぎないので別に深く刻みこまれぬ樣であつた。無調法なお話だが吉原見物などの樣に當時の記憶は殘つて居らぬやうである。

一行は三組に別れて歸路についたが、僕は中組で五人して歸つた中に成田健夫君外二人は酒黨で、成田秀逸君と僕は餅黨、甲組は屹度晝食に一杯やる、乙組は到る所餅屋の看板を見れば一つでも二つでも食ふことにして來た。二本松まで戻つたら町の中央に坂があるが下りて兩向へ別々に這入つた、勿論晝食の爲である。暫く經つと僕らの居る店へ坊主頭の爺が、一方に銚子を持つて一方に小皿を携へて何かブツブツ言ひ乍ら這入つて來た。其の言を聞けば甲組の連中を鹿兒島の人間と見て氣持を惡くして避けて來たものらしい、ハテナと思ひ食事を濟ませて其所を出たら、甲組もやがて出て來た、何か面白い事でもなかつたか、と問



へば、筍の酢蠡で一杯呑んでから戊辰の戰爭の話をしたら、主人と覺しき人は早速出て行つた、さうして呑食の金は兎に角、早く出發して呉れゝばよい樣な風であつたと云ふ。

該地は佐幕の一藩で官軍、殊に鹿兒島人にコツピドクやられた處である。某君は容貌魁偉頭の頂上に一握の白髮簇生し言語又奇激加ふるに二十日間の江戸辯が加はり「竹の子の酢あへとそれや甘からう」「戊辰の戰爭の時は恐はかつたらう」などとやつたのでテツキリ御敵ござんなれと思つたからたまらない、何もかもいらぬから早く出かけて貰ひたいと言ふ素振で、亭主逃避行と極め、持餘のもので腹癒をしたと分り、あとで大笑した。

東京には三組が居ると思うて、我が組も油斷して雨だ風だで急がぬ旅をして、二十三日目かで歸校した、矢張昔流の呑氣な見物旅行をしたものである。鬼怒川下りは交通便利の今日はどんな影響を受けて居るだらうか、それは知らぬが、安積艮齋先生の下絹川記にある如くなれば、昔は方物舟運の便のみでもなかつたと思ふ。

明治一三・二・本科卒業　樋口亮

謹啓　師範學校六十周年記念誌御編輯の趣にて過日御下命の件小生過般來痛く健康を失し服藥療養中に有之乍遺憾貴意に應じ兼候間不悪御了承相成度候　早々

八月二十一日　　千葉縣市川市北方一二

明治一三・二・豫科卒業　田村東穗

母校創立六十年記念に際し在學當時を追憶記述すべしとの御注文に接したるも、老人は明治十三年豫科第五回の卒業にて、其時生れし人ありとするも五十八才なり。特に明治十六年以來縣廳其他に奉職教鞭を執りしは僅少の爲め一層其感少なし。

一、寄宿舍費は一人二圓五十錢にて、燈火、火鉢、（一室二個）まで含み今日の如く營養など問題ならず（明治十六年一家を始めし際白米一升金五錢）

一、先生は今日の如く俸給よりに非ず、教るを樂む有樣にて從て教授は親切なり。

一、昨年迄文部省在職の爲め各學校へ時々參り教具の進歩を見るに付け、當時は化學器械外の教具は玩具と同

様なり。化學は色川先生の助手を致したる爲め他に比しよかりしを記憶しあり。

一、生徒の氣質は一般に堅忍的と申べきか、奢侈の風なく適風紀關係のものなきに非ざるも、僅一二名なりし。

一、教師と生徒は今日より見れば全く反對にて、何事も服從なり。教師も亦親切にて、生徒に病者あらんか自ら看護しくるる有樣なる爲〇〇休業など聞きたることなし。

一、附屬の訓導も皆椅子を置きたりしも、撤廢方藤田校長に先生より進言せり。

一、中等學校の教師は、今日にては就職方いろいろ運動し、小學校教員も縣外に出るものある狀況なるも、當時は卒業近づくに從ひ卒業者一人に對し郡視學（督學か）二三人より申込あり、驚く勿れ夫れで月給七圓なり。

一、卒業式に際し縣廳よりは縣令（今日の知事）代理臨場赴任の上は充分勉強教授すべしと。各先生方も同樣訓示せしに、色川先生は足の底に付く飯粒位の七圓の月給では致方なしよろしく遊ぶべし、花を見又は雪を見るも遊ぶ氣なれば研究も容易なり生徒を教ふるも亦然りと。

當時より今日に至る迄基督者の神を知る研究は同じことなりと信じ余生を送りつゝあり。

明治一三・一二・理科卒業　**大島勝太郎**

母校創立六十周年祝賀會擧行せられるから、在校當時の追憶をとの御求でございますが、今年七十四歳、歳に比較して、より多く健忘、到底纒つた談が爲し得ぬから、御辭退致度いが、乍併創立當時を知れる生殘者は澤山あるまじと想へば、淋しい氣がする。寧ろ記憶を辿りて往時を偲ぶことが、貴命に叶ふ樣に思ひまするし、又枯木も山の賑ひと心得て、想出次第書きました。初め紙幅を縮少の心算で、推敲して見ましたが、流暢な文章になりませぬので、思切つて口語にしました、爲に冗長になつて、貴重な紙幅を埋める譯で御諒解を願ひます。

母校の追想談から脱線する樣ですが、其他の歴史地理を談る參考にならぬ事もあるまいから、聊傳說を附加させて頂きます。此地方に古く語り傳へられた口碑で、若干訛傳ありとするも、全然無形跡と排斥すべきでないと思はれます。正史にも、一曰、又、一說に云々と附記あるのは故ある事です。

青森といふ名は、今から約三百拾餘年前の寛永二年に、津輕家が港を經始する時、現今の米町六七丁目邊に、海上より標識となり得る、青き樹林があつたからだと傳へられて居ます。陸奥灣の中央に突出せる夏泊半島中の、茂浦、



浦田邊から、津輕海峽の西部に突出し、渡島の白神岬と、相對する龍飛岬に至る迄を、連稱して合浦外ケ濱といひ、青森の地は、恰度中間に位してゐます。合浦公園の名は、是に因つたのです。又此公園内に、舊藩主に由緣ある松の老大樹が五本あつた筈です、公園を此處に撰定したのは、其舊跡を懷かしんだのでありました。五本松の名稱を忘れたが殘念。古、此邊りを、陸ノ奥津輕の郡田舍の莊と稱へ、現今は見る影もない泥沼であるが、上古は千石船位出入自由なりし、海岸湖善知鳥沼に沿ひて、善知鳥村、安方村等の漁獵部落があつた。住民は無論エミシ人、又の名ヒナ、即ちアイヌ族であつた。平安朝の初期、將軍田村麿の蝦夷征伐奏功以來、漸次、和人が進出せるものと見え、藤原時代、善知鳥沼の、海に通ずる所に渡舟を設け、渡守は代々肴倉作兵衞といひ、義經から、此の度船渡させたる恩賞は後々の地頭、之を繼ぎ行ふべき者也との、墨附を貰ひ居たるを、何時の頃にや、御上にて取上げ、破棄されたと傳へられ、作兵衞の家に、代々襲名して、昭和の今日、尙新安方町邊に存在の筈です。義經蝦夷遁入の事實は、無きにせよ、平泉藤原家に留寓中、鐵工次吉といふ鑛業師と俱に、平泉の資源たる、蝦夷地の砂金探檢に、渡島せる事は有り得ぬ理由はない。三厩村に龍馬山義經寺があり、今別村の寺院に、大野九郎兵衞が、醫者と云ふ觸込みで寄寓して、筆蹟を殘してある等の傳說も、火の無い處から煙が出ないと云ふ諺に想ひ合せて見るがよい。演劇では、鳴くなる聲は、善知鳥安方とかいふ臺詞があつて、ウトーヤスカタ夫妻が、忠義の爲に死して、其靈が爲に化生したといふ、哀な物語であるが、私は、ウトーといふのは、アイヌ語のウと名付る海岸湖、即ち本州各所に在る、潟であるまいかと想像する（ウはアイヌ語、何を意味するか知らない）尤も想像であつて、深い根柢あつて主張するのではない。そして富士、伊豆、能登等は、アイヌ語から出て、青森地方に、入内、奥内、野内、野邊地等の、アイヌ語の地名が存するから、ウトーもさうであるまいか、謹で識者の教を請ひたい。

津輕藩にて、最初の港灣經營は、油川村即ち、大濱であつたが、同地は地勢可ならず、海は遠淺なるを發見し、青森に變更せる爲、責任者某は自殺し、其墓は油川明誓寺にある。然る處、青森港の發展も、松前領の開拓が、消極的であつたのと、内地産業不振とに伴ひ、眞に遲々たるもので、丁度百年前、有名なる大餓死ありたる、天保七申歳の飢饉直後の取調に依れば、戸數借家共千七百、人口八千二百、漁師九十七人、船數五人乘二人乘漁船丸木舟合せて七十六隻、馬五十一疋、町數十六、安方町西入口升形から堤橋向迄、長二十四町十間、幅四丁位の小市街であり、七十年前の明治初年頃には青森二千軒と唱へて居たに過ぎません。

然るに最近私は青森市へ參り見ると、知らぬ町名が澤山あります。元母校の在つた方面は堂々たる官衙公署の建物及民家櫛比し、そこがどこであつたか鳥渡見當がつきません。長島方面で、緣類を訪問して判らず、迷子になつたのであります。私共が母校の寄宿舍に居りたる當時は、大野田圃に人家は一つもなく、一里位は、遠望が利いたものです。蒼海變じて何とやら、隔世の感に打たれます。

善知山養仙寺跡や、先年回祿にかゝつた、正覺寺の、二尺八寸慈覺大師御作の本尊等に就ての話もありますが、余りに脱線しましたから戻つて本題に入ります。

青森縣廳は、大野村字長島に在り、舊藩時代は、御假屋又御陣屋といひ、東西五十間、南北六十間位、高き木柵を構え、堀を繞らし、水を湛へた一郭であつた。周圍は水田で、其直ぐ近き新町地内に、範範校舍が建てられ、寄宿舍は、舊藩の年貢收納所即ち御藏と云うた、大土藏を利用されたのであつた。梁間三四間、桁行二十間位、それが二三棟あつて、荒壁塗で、廢藩後用途なく、自然立ち朽る運命に置かれてゐたもので、背後は直ぐ濕地で短き草が茂つて居た。一條の小徑ありて、柳町から神明宮境内を通りて、縣廳に達して居た。衛生上の事、今日の如く八釜敷なく、經費と廢物利用の意味からか、簡單な改造で、壁を切拔き窓とし、紙障子を入れ、七島表緣無野良疊を敷きたる、至極質素な陰氣臭い部屋であつた。元來が採光通風の施設不十分、特に床下に留意せざりし故にや、脚氣患者出で、其重症者が、轉地療養の爲、友人に護られ歸鄕の途中、津輕坂と呼ばれる險路、今は舊道となつて車馬往來せぬ、鶴ケ坂の松並木に到りて、疾革まり、親族故舊を懷かしみつゝ家鄕の空を望み、憾を呑んで永眠に陷ちた。友人間には前途囑望された秀才であつたので、一入痛惜され、誰やらが松柏路傍鶴坂邊云々と弔詩を手向けたが、今想出せぬが遺憾です。

當局は善後策を講じ、寄宿舍を閉ぢ、新築に決したので私共は自宅に引籠りつゝ、食費を給與された事があります。

新築寄宿舍は、校舍に接續し、曲の手成に建てられ、外觀は洋風二階家であつたが、内部は依然七島表の疊敷で、私共は寺子屋式机文庫を並べて居ました。此時佐々木高行氏（後侯爵）が藤田校長の案内にて、仔細に各室を視察され、其節の揮毫が後に額となりて、廣間に掲げられたのを見て、私共も習字の必要を感じました。然れども科外なりし故に、姓名を記するに足るてふ項目氣取で學習せず、今尙悔えて居ます。元來書は、人格を表現する一の美術である、維新の名士は、殆ど例外なしに能筆であつた、私は薩藩の參謀大山格之助後の綱良が秋田城に在りて、我藩の杉山氏に寄越した、軍事上の通牒を見た事がある。奉書半折幅に書いたもので、却々立派な筆蹟であつた。今日尙履歷書の字の巧拙は、採否査考に影響あるは事實です。私の經



驗から青年に勸奬致したい。序にモ一ツ言葉多きは實少しといひ、贅辯は不可なるが、話術堪能ならんことを希望します。是も出世と大關係ありますから。余談に亘つて濟みません。寄宿舍賄は請負で、其頃麥入らずであつたが、副食物は、粗末で少量であるから、血氣の青年は不平に堪へず、時折賄方征伐といふ事をやりました、其は殊更に御飯を二三度炊き足させるのです、そして汁と漬物を多く飲み食ふのです、多人數だからたまりません、卑劣な凱歌をあげた譯だが、當時はさやうに思はなかつた、賄方は敗北して交迭一二あつた。學校側では、小使西村某を給養係といふ名で賄を担當させた事あり、盛切りの辨當にした處が、青年達は之を宛行扶持とて怒りて中止させた、何というても食物の敵だからひどい。當時白米一升小賣十錢位であつたと見え、五合食へば五錢だ、オケジヤオケジヤと寢言に賄方に同情せる溫厚者もあつて、其寢言が當時言ひ囃されたのだが、實際今日の學生が、想到せぬであらう程、より大に粗末であつた、營養價値は零であつた。

教授訓練學校行事は、格別印象ないが、教科書は全部貸與され、理化學教具器械等も、創立時代としては揃うて居ました。維新以來十一二年歐米文化が、不斷浸潤するに不拘、漢學が尙且勢力あつて、教科書に、岩垣松苗著國史略、支那史の十八史略、元明清史等、漢文物が用ゐられ、科外の日本外史、政記等も借讀出來た。從つて當時の學生は漢字に就て自と素養を得た譯です。又西南戰爭の翌年、政府の首腦大久保内務卿が兇刄に斃れ、廟堂俄に棟梁を失ひ、人心動搖の虛に乘じて、國會開設を迫るの聲、愈多きを致せる折ながら、吾等師範校生は、別段政治運動に熱中する者なく、寧ろ超然的態度で居りましたが、血氣旺盛者の集團故、中には尙幕末志士の氣節を憧憬し、靖獻遺言等を會讀して、自ら振つて居た連中もあり、私共も其に感孚された形であつた。而て教職中にも、後年學習院教授となられた色川圓士先生は、水戸人だけに、寄宿舍に於て、晉吐朗々詩吟されて以て士氣を皷舞され、黑瀧儀任先生は弘前藩士で江戸に遊び、漢學の造詣深く、吾等同志に文章軌範を講ぜられた。又私共記念寫眞中に、斷髮の一女性が加つて居ます。此人は後に昌子内親王殿下の御附となられた小川マサ子女史です、加賀の勤王の志士の未亡人と聞きましたが、其時女子範範教員として來任され、女性にして尙且漢學を講ぜられて居た。右樣の譯で、私共同人間には、未だバタ臭い空氣が釀されて居なかつた。弊衣破帽底でないが、木綿の羽織袴着で、洋服は一人も無かつた。後年の所謂蠻柄がつた氣骨稜々たる風格が多分だつた。中には髮を正雪頭にしたのもあつたが、後年の美術屋のキザさでなく、西洋の學者志士の風を模倣したのであつた。茲に此時より以外、他日再現しなかつたであらうと思ふ事がある。其は生徒中に、自宅に在りては、善いお父さまで、子供の

兩三人も有りさうな、相當年配者が若干あつた事です。此人達は、學問の素養もあり、又東奥義塾の米人教師に就き、通辯自由なのもあつた。是は當時の規則に依る小學教員の資格獲得の爲であるから、其態度老成、吾等後進の爲の儀表であつた。果して此人達の中から、代議士、縣議、市長等に推薦されたのが數人ある。

校長藤田利勝先生は、此時代に唯一人の洋裝で、常に詰襟蛇腹緣取のジャケツを着用され、一見洋人見た樣な風丰であられた。却々進歩的思想の持主であられたから、縣當局に對しては、强硬な態度で接して居られた。此時代に本科生十數人を引率して徒歩で以て官費上京を遂げられた、後年の修學旅行である。生徒の信頼も十分得て居られたから、永く在任されなば、胸像位は建碑が出來たでせう。江戸訛があつたが、頗る達辯、時折諧謔交りの演說を試み、生徒に悅ばれて居たが、或時獨逸船が家國を侮辱せる不法行爲を攻擊せる演說は、實に眞劍で、嚴肅、熱辯以て聽者を感動せしめた、私達も慨然敵愾心を惹起した事があります。

教頭小野恒剛先生は、慶應出の小田原人と聞きましたが、是はまた頗るの訥辯で、經濟學初歩を講ぜられたが、東北人の私共大部分には、余り興味を持たなかつた。それ故か同窓には理財に長ぜる者は出なかつた、私自身も其通りです。

師範學校は申迄もなく、教育鞅掌者の養成所であるから當局も優遇して、學費食料皆官給で、筆墨料名義の給與は、其實御小遣になつた。乍併後年の如き恩給制が無いから、義務奉職年限滿了後は、氣骨ある者は多く他業に轉じた。私の知れる範圍では、終始一貫教育に從事してる人は甚だ尠い。衣食足りて禮節を知り、倉廩滿て榮辱を知るてふ語がある、其待遇が生活安定を保証されず、先生といはれる程のバカがある樣に思はれた、無理解からであつたらう。其から比べて見ると現今は實に仕合せで、初等教育に對する認識も深まり、待遇亦他のサラリーに比するに決して已なくない、此點亦隔世の感がある。

最後に、私の先輩及同列中、後に代議士、縣議、辯護士、官公吏等になつた人は少くないが、並外れの惡棟者も、無耻無節操者の多く出なかつたのは、矢張當時の教養の然らしめたものであると、私は信じて居る。

撮影の時日は忘れたが、本校舍と寄宿舍とを背景とする記念寫眞を私は持つてゐる。縱三寸横四寸の小型に、本科第一回卒業生、八戸分校卒業生、其他在校生及教習教範取締等を合せて八十七名の多數を容れてあるのと、技術未熟故か、褪色して各人の面顏判明せぬのが遺憾です。追憶談御求に接して之を取出して見ましたが、氏名さへ漸く思出す位です、そして其中に今尙文通してるのは私共に三人しかありません、他は私共より皆年長であつたから、存命なれば七十五歳以上の幸福な長壽者です。祝賀會に於て名乘り合つて見たいものです。—昭和十一年八月廿九日記—



## 追　加

此追憶を書いてから想出しましたが、淺虫溫泉から西半里斗りの處に今鐵道の隧道がある。昔はトーマイカケハシというて懸橋があつたさうです、トーマイは善知鳥前の略で、其西に善知鳥神社の一の鳥居があり、三里にして本殿に到る、こんなのは上方にも無いと驚歎させたものと傳へて居ます、して見るとウトーといふトーも從つて廣大な海岸湖であつた事が想像されます。

明治一三・一二・豫科卒業　横岡巖

拜啓仕候殘暑未た不退候處各位愈ゝ御淸穆之段奉慶賀候却說本年は母校の六十周年に相當し來る十月盛大なる祝賀式御擧行につき貴部に置かせられては記念誌編輯を御計畫遊さるの由資料の御蒐集などには一方ならぬ御煩意の御事と奉拜察候就ては老生に對して何か追憶談を物せよとの御下命に候へ共顧れば老生卒業後五十六年の久しき星霜を經殊に明治十三年に弘前分校より師範本校に轉じ仝年十二月豫科卒業の上教職に就き候爲母校に在る事僅か半年有餘に不過候故當時に於ける觀察至つて薄弱且甚だ既往の事とて凡て忘却致し今より考ふれば教授訓練設備等現今に比し甚だ幼稚にて特筆すべき程の事項腦裏に浮び不申候に付折角の御依頼に背き汗顏の至りには候へ共御辭退申上度候間不惡御諒恕被成下度奉願候　早々敬具

九月十五日

東京府北多摩郡武藏野町西窪八〇六

明治一四・三・豫科卒業　小山內晴祥

仝　荒田長五郎

拜復御校創立以來烏兎匆々既ニ六十ノ春秋ヲ迎フ。吾人ノ一生ニ例ヲトランカ耳順ニ達セルナリ。吾等モ御校ヲ去リシヨリモ亦不惑ノ年ヲ經過セリ。當時同窓ノ人モ大半世ヲ去リテ影ナシ。今ニ到リテ往時ヲ回顧スルニ茫乎トシテ夢幻ノ如シ。唯余等生命ヲ瓦全ニ貪リ、聖代ノ餘澤ヲ浪費シ、豈慚愧ニ堪ヘンヤ。今ヤ御校芳書ヲ寄セラレテ、老生

等ヲシテ當時ノ記憶ヲ覺起スルノ已ム事ナキニ至ラシム。敢テ不敏ヲ以テコレヲ辞センヤ。惜ムラクハ事甚シク既往ニ邈リ、爲ニ老生等ノ腦裡ニ殘ルモノ淺微ニシテ語ルモ益ナク、唯人ノ嘲笑ヲ招クヤ必セリ。然ルモ老後ノ思出トセバ必ズヤ余輩ノ微衷ヲ了セラル、アランカト。爲ニ兩人相語リテ次ノ如キモノヲ得タリ。記シテ以テコレヲ呈シ、唯今ニ至リテ夫ノ西行ノ「命なりけり」ノ感ノ深キヲ覺ユルノミ。

## 學制ニツキテ

當時ノ制度ハ全學年ヲ本科豫科ノ二部トス。豫科ハ年限ヲ一ケ年半本科ハ二個年トシ、豫科ヲ修了後本科ニ入ルモノトス。其學期ハ各六個月毎ニ一級ヲ進ム。

入學生ハ四ケ月間假入學トシテ在校セシメ、其間其人ノ性質及學業ノ成績ニヨリテ本科入學ヲ許可セラレタリ。

在學中ハ一ケ月金四圓ヲ給與セラレ、其内食費及雜費トシテ參圓五十錢差引カレ、殘額五十錢ハ文具料トシテ、現金ニテ給與セラレタリ。若シ在學中不都合ノ處爲アリテ退校ヲ命ゼラレタルトキ、既給ノ學費ハ全部償還スベキモノトセラレタリ。

## 學習ノ狀態及學生ノ思想

當時在學ノ學生トシテ、自習トシテハ單ニ讀書ヲナシ、他ノ學科ノ如キハ別ニ豫習ヲナスモノナキガ如シ。然シテ自習ニ用フル補助ノ書トシテハ字書類、重ニ毛利貞齊著會玉篇ハ唯一ノ參考書ナリシナリ。故ニ當今ノ玉手箱カ（とらこ）ノアル時代トハ其學習ノ難易ハ比スベクモアラズ。

當時ノ風習トシテハ漢文ノ書ハ常ニ重ンゼラル、是レ蓋シ舊藩ノ時代ニ之ヲ尊重セル其遺風ニ依レルナリ。然シテ當時入學ノ學生ハ大部分舊藩士ノ子弟ナリシヲ以テ、コレヲ重ゼシコト當然ナリシナリ。然レドモ其當時ハ出版中々容易ナラザルヲ以テ、一部ノ書ヲ得ルニモ困難ナル故ニ、學生ノ中ニテ何カ善良ノ書ヲ得ル者アレバ、コレヲ得ント欲スルモノハ其人ヨリ借覺シテコレヲ謄寫セルモノ往々アリ。

又文集類（勿論漢文）例ヘバ文章軌範、又ハ八家文ノ如キ類、又詩集（コレモ唐宋ノ詩現今ノ西洋ノ詩ニアラズ）ハ大ニ學生ニ喜バレ、コレヲ學ンデ詩作ヲ試ミル。然シテ其當時學生等ハ協同シテ各自ノ創作ノモノヲ書載セタル雜誌ニコレヲ揭載シテ得々然タリ。是レト對シテ國語即平安朝ノ物語類ヲバ讀ム者少ナカリキ。サレドモ和歌ヲ作ルモノ又往々アリキ。而シテ漢詩カ其平仄韻字ヲ刻苦佶屈聲牙ノ語ヲ用フル。從テ其風貌大ニコレニ類シ、破袴扼腕恰モ山陽ノ前兵兒歌ノ如キアルニ反シ、和歌ハ其詞流暢ニシテ且字體マデガ圓滑ナルヨリ、コレヲ作ルモノハ其風貌亦之ニ類シ、全氏ノ後兵兒歌ノ如キモノアリシガ如シ。



當時當路ノ大臣ハ皆漢詩ヲ作リシモノ、如ク、且ツ學生ノ志望ハ何レモ皆目標ヲコレニ置キ、殆ンド其言行ハ將來ノ教育者ヲ以テ天職トセル者ナキガ如シ。從テ其當時學生ヲ間ニ盛ニ朗吟行ハレタリ。其詩句ノ重ナルモノ、一二ヲ擧グレバ左ノ如キモノアリ。

伊藤春畝作詩

豪氣堂々橫大空　日東誰使帝威隆
高樓傾盡三杯酒　天下英雄在眼中

木戸松菊作詩

一穗寒燈照眼明　沈思默坐無限情
回頭知己人已遠　丈夫畢竟豈計名
世難多年萬骨枯　廟堂風色幾變更
人如流水去不還　人似草木爭春榮
邦家前路不容易　奈三千餘萬蒼生
山堂夜半夢難結　千岳萬峯風雨聲

現今ノ學生等ノ俗謠ヲ歌フ如キトハ大ニ其趣キヲ異ニセシナリ。是蓋シ時代ノ推移トハ云フモ、現今ノ歌詞及其音調ノ淫靡ナルハ誠ニ慨歎ニ堪ヘザルナリ。

又生徒全體ノ會合トシテハ、毎土曜日午后ニ演說會ヲ催セリ。開會時間ハ二時間ニシテ之ヲ前後各一時間宛トス。前ノ時間ニハ其當日ノ演說者ヲ前以テ幹事ヨリ指定シ、其指定セラレタル者ハ、正當ノ理由ナクシテ欠席スルコトナク必ズ演說セザルベカラズ。後ノ一時間ニハ有志者ノ演說時間トセリ。此時ニハ希望者ハ隨時演壇ニ上リテ意見ヲ演ベタリ。

此等ノ演說ハ單ニ自己ノ感想、或ハ讀書中ヨリ役タル事ヲ陳述シ、未ダ時事問題及學校ノ處置ニツキテ演ジタル事ナカリキ。然シテ當時ノ演說者ハ單ニ學生ノミニテ、知名ノ士或ハ教師ノ講演等ハ極メテ稀ナリキ。此等ノ演說ガ終了スルトキハ、幹事ハ其說ノ適否ト、態度ノ如何ト、其發音ノ當否等ニ到ルマデ中々深刻ニ批評シ、或ハ稀ニハ教師ノ演說ニモ發音ノ當否位ノ事ハ忌憚ナク言ヒタルガ如シ。是等ノ批評ニ對シテハ心ニ不平アルカ、否カハ不明ナルモコレニ反駁セルモノナカリキ。

幹事其員數二、三人ニシテ學生中ヨリ公選シ、其任期ハ一個年トセリ。

## 教授ノ体裁及學科目教科書ニツイテ

教授ハ大概朗讀ニシテ生徒ハ教科書ヲ朗讀シ、教師ハ其意義ヲ說明セリ。教科目ノ名稱トシテハ讀書（今ノ國語漢文科）修身、圖画、地理、歷史、數學、物理化學（博物）ノ如キモノナレバ、現今ト大差ナシ。サレド教授ノ方法ハ重ニ前述ノ如キモノナレバ、其當時少シク器用ナル教師ハ一人ニシテ數科目ヲ兼テ教授セル人アリキ。サレドモ稍後ニ至リテ物理化學ノ如キハ簡單ナル實驗ヲ行ヒタリ。サレ

ドモ是等ノ程度ト其教授ノ巧拙トハコレヲ現今ノモノト比較スルコトノ無益ニ屬スルヲ如何セン。唯其當時使用セル教科書名及其体裁ノ如何ナルカヲ説明スルニ止メン。

當時教科書ハ指定ノ物ナク唯隨時都合ヲ見テ採用セルモノ、如シ。其書名ヲ擧グレバ

讀書

十八史略　七冊
通鑑覽要　十六冊
文明史略　四冊
國史略　五冊
日本文典　一冊

是等ハ皆漢文ニテ、時トシテハ歴史ノ問題トシテ其中ニアル事實ヲ試驗セラル、事モアリキ。

修身科

勸善訓蒙　三冊
西國立志篇　十冊

其他一二種アリシ樣ニ思ハル。

歴史科

萬國新史　十六冊
萬國史略
國史略（前掲）

地理科

日本地理ニハ教科書ハ不明

萬國地理ハ

輿地誌略　七冊

コレハ地理ノ教科書トシテハオーソリチーナルモノ、如シ。其ノ中ニ木版ノ圖、或ハ銅板ノ圖ナドアリテ仲々美ヲ盡セルモノ、如シ。

化學訓蒙

物理科

格物入門　冊數不明

コレハ全部漢文ノ無點ニテ中ミ老生等ニハ訓讀スルモ不能ナリ。故ニ漢字交リニ直譯セルモノ二三冊アリシガ其中ノ力學ノ部ノミナリキ。

以上ノ教科書ハ皆木版和紙ノモノニテ、十行二十字詰、紙數モ四五十葉ナルモノナレバ、其教材ノ分量ハ何レモ現今ノ三分ノ一ニモ及バズ。特ニ其程度ニ至リテハ現今ノ尋常科卒業ノ程度位ヨリナカリキ。次ニ是等ノ書籍ハ全部學校ニ備ヘ置キテ希望ノモノニ貸與セリ。

數學ノ如キハ前掲ノ學科ト其趣キヲ異ニス。其方ノ教師ニアラサレバ教フルコト不可能、且教科書トシテ學生ニ貸與セラレヌ。教授ノ進度ハ現在ノ高等小學校ノ程度ノ如キモノナリ。其當時用ヒラレシモノハ

筆算摘要　算術ノミ
洋算例題　一冊

算術全部重ニ應用問題集有志ノ研究ノ伴侶ナリ。



數學三千題　三冊

算術全部ニ渉リ應用題ヲ集メタルモノニテ、此ニハ相應ニ固苦ナル問題アリタル樣ナリキ。

ロビンソンノ代數學

コレハ譯書ニシテ二次方程式邊デアリタルラシ。

幾何學原礎　六冊

コレハ當時ニハ中々程度ノ高キモノ、如シ、蓋シコレハ現今ノ中等學校ノ程度ノモノヨリ稍容易ノモノ、如シ。

其他外國語ノ如キモノハ殆ンド在學ノ學生間ニハ顧ラレザルガ如シ。在學中當時化學ノ教科書外國ノモノ、飜譯ナリシニヨリ、時ニ其原本トシテ英文ノモノヲ見シコトアリシモ、是ヲ學バントノ志想ヲ起セシコトナカリキ。英語ニシテ然リ。況ンヤ獨佛語ノ如キハ夢想ダモセザリキ。

## 寄宿舍ニツイテ

當時在學生ハ皆寄宿舍ニ收容セラレ、毎月金若干圓ヲ、食費ヲ給與セラレ舍監ノ監督ノ下ニ在リタリ。

自習室及寢室ハ共ニ疊ヲ敷キ一室ニハ八九名、室長トシテ上級生一名コノ指導ノ下ニ置カル。然レドモ彼等ハ權力ヲ振フコトナク、下級生ハ皆舍ノ規則ニ服從シテ其規則ヲ破リシコトナカリシナリ。

寢室ハ二階ニアリテ一室ニ八九名ヲ收容シ、當時ハ廊下ニ燈火ナク、室内ニハ小サキ手燈一箇ヲ備ヘ、且ツ蠟燭一本ヲ以テ一週間ノ使用量トセリ。故ニ夜間燈火ノ不足ノ爲ニ、暗夜ニ衝突ヲ起セシコトモアリ。又試驗切迫ノ時ニハ小サキ石筆箱ヲ買ヒ來リ、コレニかんてらヲ入レ、光線ノ外部ニ洩ル、コトヲ虞レ、頭ヨリ夜着ヲ被セ其中ニモグリテ勉强セシモノモアリタリ。然レドモ眠氣ヲ催シテ之レヲ消スコトヲ忘レ、夜着ヲ燒キテ殆ンド火事ニ及バントセシガ幸ニ事ナキヲ得タルコトモ數度アリタルナリ。

如此ニシテ其狀態ノ稚氣ナル、コレヲ當今ノ飲食店ニ出入スル學生ト比較スレバ其純朴ナル或ハ愛スベキナリ。

炊事ハ舍監ニテ適當ノ人ヲ賴ミテ受負ハシメタリ。故ニ受負者ハ損益ノ計算上時トシテハ粗惡ノ副食物ヲ供給スルコトアリ。最初ノ一二度ハ忍耐スルガ數度モ續クトキハ、學生中申シ合セテ、賄方ノ征伐ト唱ヘテ、殊更ニ飯ヲ大食シ、不足ヲ生ゼシメ、新シク炊クコトヲ命ジ、以テ其意志ノアル處ヲ示シタルコトアリシ。如此事一年ニ二三回アリキ、是等ハ受負人ノ非カ學生ノ非カ不明ナルモ、實際ハ副食物ノ粗惡ナリシ事ハ事實ナリキ。

以上縷々述ベタル外ニ、當時ノ出來事トシテ記載スベキ事アリ。

事ハ明治十三年一月八日ノ時ナリキ。當日校舍新築落成式ノ祝賀ヲ兼テ、始業式ヲ擧行セリ（當時ハ開校式ト云ヘリ）。式典ハ無事終了、其餘興トシテ來賓ニハ酒肴ヲ提供

セルモノ、如シ。興酣ナル頃、來賓ノ或者ハ興ニ乘ジテ、酒席ニ婦人ナケレバ興深カラズ。何ゾ其方法アラザルカト、當時傍ニ在リシ職員ノ或者ハ茲ハ學校ナレバ不可能ナリ。學生中ノ可然者ヲシテ斡旋セシム。學生ノ然ルベキモノヲ物色シテ其任ニ當ラシム。斯クシテ學生ト來賓トノ間ニ杯ノ互換ト共ニ快談アリ。偶兩者ノ間、知識ヲ先ニスベキカ、德行ヲ先ニスベキカニ議論起レルガ如シ。學生等ハ皆元氣潑溂皆擧ツテ知識ヲ先ニスベキヲ主張セリ。來賓ノ側ニハ大ニ其非ヲ戒メ德行ヲ先ニスベシト、其故ヲ諄々トシテ訓戒シテ慰撫大ニ努メルモ、學生ハ何レモ持論ヲ固執シテ下ラズ。茲ニ於テ當時ノ縣令（今ノ縣知事）山田秀典氏大ニ之ヲ憂ヘテ、當時在舍ノ學生全部ヲ其室ニ召集（其時午后六七時頃ナランカ）シテ、大ニ德行ヲ先ニスベキ事ヲ訓諭セラル。（教室ノ中ニ一卓子ヲ据エ、一職員ハ一ノ提灯ヲカザシテコレヲ中間ニ置キテ、學生ハ之ヲ圍ミテ訓戒ヲ聞ケリ）事是ニテ結了シ、現今ノ如キ學校騒動モナク、翌日ヨリ學生ハ皆授業ニ出席セリ。サレドモ山田氏大ニ前途ヲ憂ヘ、公用ノタメ上京、當時ノ勞力アリタル、岩倉右府ニ其事情ヲ談ジテ「先德行」ノ染筆ヲ得テ、コレヲ本校ニ下シタルモノナリ。今現ニ講堂ノ正面ニアルモノ是ナリ。因ニ云フ縣令山田氏ハ體軀短小ニシテ、甚ダ近ヅキ易キガ如ク、治績ニツキ令聞アリシ人ナリ。以テ當時要路ノ高官ノ憂國ノ意氣見ルベキナリ。

次ニ今一ツ學生ノ無邪氣ナルコトニ就キテ記サン。

明治十三年頃（月日ハ不詳）弘前ニ非常ノ大火アリキ。事電報ニテ早ク已ニ學校ノ寄宿舍ニ達セリ。弘前ヨリ來學セル學生ハ舍ノ階上ノ廊下ニ上リテ其方ヲ望ミシニ、東南津輕ノ郡界ノ小丘ノ上ヨリ煙ノ立チ昇ルヲ見ルヤ、一同之ヲ憂ヘテ、直ニ弘前ニ向テ突進セリ。敢テ食事ノ用意モナク、只着袴セシノミニテノ擧動、暴虎、馮河ノ誇ハ免レザルモ、其無邪氣ナルヤ愛スベキナリ、然レドモ兩三日後皆無事ニ歸舍セリ。

一般ニ當時ノ學生ノ志想ハ現今ニ比スレバ單純ナルガ如シ。是レ時代ノ傾向ノ然ラシムル所深ク慮ルニ及ザルモ、現今動モスレバ赤化ノ傾向ノ危險アルハ、今ニシテ之ヲ救正セザレバ國家ノ前途、大ニ憂フベキナリ。本校ニ在學ノ諸君ハ將來ノ幼年生ノ志想ヲ陶冶スルノ重任ヲ双肩ニ担フノ士、大イニ思ヲ茲ニ致サザルベカラザランヤ。



# 懷舊漫譚

明治一五・二・本科卒業　黑　舍　人

【御斷り】五十餘年も昔の事なれば、大方は忘れ去りたれど一つ思ひ出した事あれば、それからそれと辿りて、どうやら當時の有樣が、彷彿として胸中に甦り來るを覺ゆるです。因て此等を書き連ねて見ましたが、本來文字に疎きものなれば、讀む方々の御笑恕をお願して置きます。

## 臺　臨

如何に歲月が立ち、如何に耄碌し、如何に忘れんとしても忘るゝ事の出來ない一事は、筆者が五十六年前に在學せし師範學校といふものへ、畏くも故有栖川宮熾仁親王殿下の臺臨遊ばされた事です。當時筆者の親しく目睹せる有樣は斯うでした。

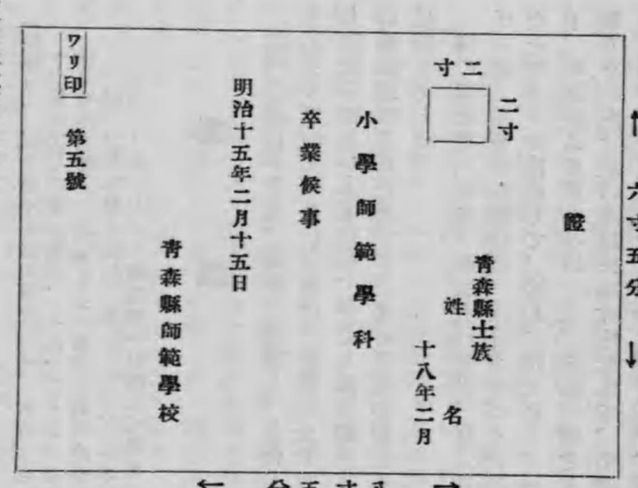
時の縣令鄕田兼德。學校長小野剛。階上の一教室。ペンチ一脚二名宛の四脚排列。大分ガタづく板張床。正面黑板をそのまゝ背後にして、極めて粗末なる、一個の椅子と卓子。卓面覆ふに青布を以てし、漢籍一冊をその上に載せてありました。此の漢籍は春秋佐氏傳で、手澤の附き居る者らしかつたです。向ツて右側に椅子若干、縣令その他六七人の顏見ゆ。末座には本校教員四名着席、內一名は當時跛行先生の名で知られたO氏。御座に向ひ二間位離れて生徒七名着席、勿論筆者もその一員でした。一歩進み出てたる代表者A氏。進講個所は城濮之戰の一節。

殿下には端嚴として御着席のまゝ、御體微動だも遊ばされず、勿論卓上の書籍には、御一指さへ觸れさせ給はず、御聽講遊ばされました。

嗚呼畏れ多い哉。跛氏無遠慮にも、その跛足を曳いてお側に赴き、その手を以て御前の書を開き、その指を以て講義の個所を示點して、跛行復席したるには、一同冷汗腋より滴り、恐懼譬へん方なかりしも、咽嗟の事とて何人も如何ともする事能はぬ樣でした。それ等には何の御關心も有たせられず、殿下には御前何物もなきかの如く、只前方を御正視遊ばされ、終始端嚴として約十五分、御聽講遊ばされて、御退席遊ばされたるを拜しては、只々感概に堪へませんでした。翌日金一封（五圓）縣廳を經て一同へ御下賜になりました。榮光永へに吾等七名の上に在り、而して五名は既に泉下にあり。筆者と他一名のみ今猶地上生活を惠まれて、此の記事を草する、又何かの因緣なるべし。

## 卒　業

筆者が受領せる卒業証書の寫シを御覽に入れませう。




紙はマニアイ紙と云ふもの此の校印は筆者には至つて懐かしいものですが、今日も尙存在してゐますかしら

更に其裏面に曰く

此卒業證書は本年本月ヨリ向七箇年間卽チ明治廿二年マテ其効ヲ有ス。

教員免許狀とては何も與へられません、是は卒業証と免許狀の化合躰と解されます。其の後右裏書有効滿期日に、東京府知事より、現今見る樣な形式の教員免許狀を與へられました。

## 任命

日を經て辭令は、青森縣の名に於て、三通到達しました。一に曰く任三等訓導。二に曰く三等訓導姓名南津輕郡牡丹平小學（校の字無し）外十二校在勤申付候事。三に曰く三等訓導姓名月俸金十五圓支給候事。

津輕方面では、何等の重みなき三・訓・でも、是が五十餘年前の下北郡僻陬地の學校（何れも皆な超寺小屋式）には脅威？ であつたらしいです。筆者に一度次の如き失敗談がありました。話しますから、どうぞ内聞にして下さい。曾て下北郡大畑小學外若干校在勤云々といふ、例ながらの辭令の下に赴任しました。巡回授業の時、郡書記T氏（教育行政方面）と同道せる事がありました。日割を前觸れしある事とて、其の日の早朝、宿舍へ駄馬が迎へに來ました。頃は六月の下旬、好晴に惠まれて心勇み、T君と騎否駄を駢べて駄驅々々と太平洋の浪打つ岸をぞ打？ たせける。四周の風光を賞觀しながら、其校に赴くの約半里許手前にて、一隊ではない一群の兒童、村人らしき二三人に伴はれ、路傍に佇立するのに逢ひました。これぞ新任三・訓・先生の御迎に出たのでありました。打看れば衣は膝頭



迄の襤褸、胸邊は鰯の鱗や洟涙など點着して光澤あり。跣足の者あり。アシタカ草履の者あり。下駄は一人も見えず。女の童は、髪の手入など思ひ寄らず、ボノコの邊り虫の子さへも見ゆるもの。埃を頭から浴びたる者。髢附油と汗の混成臭は、ソヨ風に乘りて來る、蓋し一異觀なりでした。兎角して導かれて、落着く處は學校にあらで、村の月番なにがしどのの宅でした。着は午后三時過ぎなれば、其の日は休息。そこで夕食時にもなりぬれば、現今なら、處女會員とでも云ふ格の少中女子へ、お賀らしいのなど雜りて若干人、月番宅へと乘り込み來る。それ等は、割烹や給仕など手傳ふのです。やがて、運び出されたる膳部を見てあれば、文字通り山と海との珍味。生來嘗めた事のない樣な異味。何も彼も盛り澤山で以て、村酒を侑められました。——お酌を上手にして、お客を醉ひ潰ぶし、翌日の御難を、多少緩和する目的であつたとは、後にぞ思ひ知られける。——當時弱年の筆者は、酒出來されど、强ひられては已むを得ず二三杯、それに日中駄驅れる疲れも出て、飯後早々寢室に退きたるが、T氏の左手は、是からが佳境に入りたると見えて、「高談雄辯驚四邊」底の賑やかさ、仕舞には、手傳のお賀達まで、台所邊からのさばり出て、仲間入りしたらしき氣配して、甚以て安眠を妨害された譯です。一睡覺來、陽光上床。驚いて起き出づるに、四邊人影なし、而もT氏今何の處にか在る、皆目分らず。一時は呆然としましたが、その中に、兒守らしき少女の姿を見付けて問ひたれば、裏二階にもやあらんといふ、懐中時計を看れば、既に九時を過ぐ。起して來て呉れと賴みたれば、その復命に曰く、「ナンボ起しても！〳〵！〳〵起きサマシネヌシ」とか云ふ。甚困り居る中に、人々ソチコチから出て來ましたから、せき込んで、T氏を起さしめにやつとギツシ〳〵と音立てゝ、階を下り來るものあり。只見醉眼朦朧、足取いとも覺束なげに、頸垂れて面羞げなり。それやこれやで、遂に晝食となりぬ。それから七八町村端に位する「所謂學校」（居宅の一部）へ赴きました。垢染みた白兵兒帶を無造作に卷き付けて、中年の夫子鞠躬如として出て來る。天井なくして、屋根裏の垂木から四壁まで、燻烟されて、黑光りを放ち、窓はその紙勿論煤けて、處々破れたる名のみの教室へ伴はれた。三間に五間位の一室に、蓆を敷き詰め、怪げなる大小形狀のまち〳〵なる机を竝べて、兒童三四名、物珍らし相に我等をのぞき見るのみ。夫子故意に聲色を勵まして、他童の如何せしかを尋問せしも、その答は區々として要領を得ず、既に山か海邊かに散らかれる雛子を如何で拾收すべけんや。夫子撫然として苦笑するのみ。チト氣の毒であつたから、無據暫時夫子と座談せるに過ぎませんでした。お蔭で本日の豫定は、見ん事失敗に終りました。前途尙數校のある有り、次からは此の手に乘るまいと、一大經驗を得た譯です。因に、當時旅費は一文

も給せられざるも、宿泊や食事は、何等關心の必要なく、只一身を月番どのへ任せて置けば、それで宜しいので、大樂々でした。

## 學　科

卒業證書に添へて、成績表が交附されました。之をそのまゝ、ご覽に入れる事としませう。

ワリ印 第五號　成績表　横壹尺六寸、縱六寸三分 用紙は例のマニアイ紙

青森縣士族　姓　名

十八年二月

全　科　乙

授業法乙　生理學甲
教育學甲　心理學甲
修身學甲　經濟學甲
地學甲　數學甲
史學乙　簿記甲
文章學甲　習字甲
物理學甲　圖画丙

化學甲　體操甲
博物學丙

明治十五年二月十五日　印　例の二寸平方の懷しき校印

師範學校長　小野恒剛㊞
師範學校教頭　色川圓士㊞
一等助教諭　窪川信靜㊞
二等助教諭　野間謹爾㊞
三等助教諭　對馬運作㊞
三等助教諭　小友謙三㊞
傭教員　百川精一郎㊞
傭教員　成田泰㊞

實際教授を担任せるも、不在かその他の事故で、奥印の列にあらざる人々に、藤田利勝、本多絢夫、元木貞雄、越川文夫、林某あり。

そこで各學科に一言づゝの説明を加へます。先づ第一に此の授業法。百川氏指導の下に、附屬小學にて實地授業せしむるので、別に教科書はなかつた樣に記憶してます。教育學。初はノルゼント、後でベージ教育學、百川氏と窪川氏が講者たりと記憶す。修身學。箕作麟祥譯の勸善訓蒙續編、外に小學定本か何かを讀んだやうでした、之に小野校長と小友氏。地學。輿地史略、和裝美濃版、文字刀鐫、殆



ど生徒の自習に屬す。史學は日本外史、十八史略、春秋左傳、泰西史鑑などで、藤田校長（先生は左傳御得意の積り）小友氏。文章學は主として本多梅南（絢夫の號）小友地山（謙三の號）で、文章軌範や孟子の講讀と、一週一題位の自作文添削。物理學は物理全誌とか申す譯書で、小野校長、窪川氏等實驗拔きの空講義。化學。是丈けは其當時の新知識として、色川教頭の獨壇場。講義實驗兼ね備はり、大に學徒の心を惹き付けたものでした。用ひたる教科書は「新式化學」と題し、中形濃紺表紙、和裝十冊物、用紙は画仙紙に似、文字は皆刀鐫だつたと覺ゆ。それでも、卷を開いて內容を覗へばフラスコや水槽などの圖が掲げられてある。面白いのは、今日の化學方程式（chemical equation）之を諭例と譯してあつて、「酸素一和量と水素二和量と化合して水二和量を生する諭例は次の如し」などと來る日には、ウンザリしてひどく惱まされたものです。今日の中學生が、化學方程式に弱らされる（是は失禮）以上でした。博物學。是は博物新論とか云ふ漢文譯の和裝大形の三冊物を講讀するのみ。何人が受持だつたか記憶なし、或は自習質問位でしたかナー。生理學。越川氏にて、生理提要といふ十冊物の小形和裝譯本。心理學。是は窪川氏、小友氏にて、西周氏譯の、實に當時目の醒むる程美しき洋裝本でした。但し講者も、聽者も、怪しき迄分らんでした。經濟學、ウエーランド經濟論で和裝三冊物、窪川氏の專任でありました。先生は、常に原書をば小腋に、風呂敷包に添へて抱へ込み、靜かに室に入り來る。椅子に腰を卸してから、入念にその落付をためして、夫からヤヲラ衣紋を繕ひ、扨包を開き、昨日の續きを讀み始むるに、左方に開ける原書を時々覗き、學徒等との質問戰酬にして、少し受太刀になると、熱心に原書に讀み入り、原書の威力を借りて、以て問者の口を巧みに緘せしむるを常とす。筆者はつくづく、原書讀みを、其時羨しく思つたのでした。

數學。算術は教科書なくて專ら筆記、サッパリ分らず、其の譯は後段にしるします。代數學はロビンソンのアルゼブラで、色川教頭の受持。我流の發音で原書を讀みながら、問題を黑板に書き上げて、直にそれの運算に取掛る。その早さは一瀉千里で、質問の餘裕も何も、あつたものではない。ノートする事さへ滿足に出來れば、一大誇りであつたのです。或時、例ながらの我流音讀しつゝ板書するに quantity をハツキリと、「クエンチチー」と、一種妙知奇林の身振りに絡んで、口から出た時には、一同思はず爆笑を禁じ得なかつた、御自分も、イヤといふ程、嚴貌をお崩しになられて、苦笑遊ばされた爲、滿堂の空氣は、暫時笑氣を以て飽和されて仕舞つた事がありました。此の時から、代數の事を「クエンチチー」と戲呼せり。甲「オイ次の時間は何であつたけ？」乙「茫やりでは困るぞ、クエンチチーじやないか」通りかゝる他級生「明日も、クエン

チチーがアルガデア」――（註）「アルガデア」とはあるか？との問語で、是は隔意なき朋輩の間か、目下のものへ掛ける問語で、男子間に限る。「見ダガデア」は、見ましたかの意、「往ッタカデア」は、往きましたかの意、「食テシマッタガデア」は、食し終りしかの意、是等を、板に付く位甘く言ふことの出來る他縣の人士は無いようです、尤東奥のグライダー子邊に就て八九十年も勉强すれば出來るかも知れません。脫線しました、請恕焉。

簿記は慶應義塾版の和裝二冊物で、對馬氏の担當。習字は自習。圖画は成田氏の鉛筆画。體操は卒業間際に野間氏新任して、一二回啞鈴や、球竿を手にしたるに止り。唱歌は全然なし。英語は元木氏宅へ特志者のみ赴くといつた風でした。

## 友　愛

筆者は、卒業の前年十一月、激しき赤痢に罹り、數日間昏睡狀態で居た事がありました。寄宿舍同室の五名は――他の一人は通學生――舍監O氏と共に、敢然一命を投げ出して、家人の來る迄、看護の任に當り呉れたるは、友愛の切情からとは云へ、今より回想すれば、實以て戰慄に値する事でした。縣官公吏を狼狽させた上に、生徒全部を十日間の休學に陷らしめて、何とも申譯がありませんでした。後日縣廳より、五名へは賞賜ありたりと確聞せり。それから、公立病院に一週間、伯父某の家に二週間餘り、それから弘前の自宅にて養生。翌年一月の始業に、ヤット間に合ひました。於是同窓の諸君を、堤橋畔の旗亭に請じて、小祝宴を開き、聊か謝意を表した譯でした。

## 腦裡のアルバム

**藤田校長**

極度の近眼。眼鏡の底に、ヤット細目に開き居る眼を有す。お聲は纖細玲瓏。常に霜降りの背廣を一着に及ばる。お手の甲に目立つ位毛生ゆ。

**小野校長**

容姿端麗。躰軀堂々。頗る美丈夫。言語穩雅。聲は鈍色を帶ぶ。怒氣を含みし顏色を見ず。眼鏡と洋服慣用。

**色川教頭**

黑眼鏡を外せし事なければ、肉眼の格好は、誰も拜せしものなし。お顏方扁、髭髯甚深し。洋服慣用、冬季中は、長さ踵に達する肉厚の外套を着けたるまゝ授業。その教室に入り來つて壇の正面に立つや否や、「ソコデ!!」と一聲カン高く發言する癖あり。何の前口上もなく、いきなり書を開いて講述にかゝる。又一奇癖あり、講義しながら教壇の一端から他端まで、往きつ戻りつする事なり。此の週期



的運動は、學徒に重大なる利害關係を及ぼすのです。その譯は、此方へ向ふ時はノートし易いが、彼方へ轉向する時は聲音次第低になり、遂には聞取り難くなりて、是には困らされました、チョットも落付く事なく時々諧謔を交ゆ。

**窪川氏**

中肉中脊、無髯の眼鏡黨。講義の際は着席を常とす。諄々として說き來り、說き去り、毫も昂奮の色を見せず。アンチ洋服黨。

**野間氏**

教員中の最年少者、白面朱唇、小柄で筋肉締り、無髯にして眼鏡を用ひず。生徒の或者達より年少し「アンコ」の綽名あり。

**對馬氏**

顏に痘痕あれど、目障になるほど醜からず、寧ろ愛嬌あり。眼いと小し。小柄で口元締る。無髯。和服にケリ（靴の事）を穿ちて、草履をはきしを見ず。頭を常に右へ傾くる癖あり。口吃りて說明サッパリ分らず。算術にてさへ斯の如くんば代數に入つては思ひやらるゝと一同協議して、校長へ受持變更を願ひ出でし事がありました。それで色川氏と林氏の應授授業が出來た程でした。綽名を「コセカント」と云ふ。之はロガリズムの表を繰つて、一同が計算に沒頭中、何か偶然奇聲を發したからであつた樣でした。

**小友氏**

足疾あり。顏は丸形で赭し。鼻下八字髭を蓄ふ。御手入が至つて不精、時として、ひけの末端に筋子納豆の附着せるに氣附かざることなどありき。綽名を「ドン・バター」と云ふ。舍監として室を巡視するや、廊下の遠き彼方から、足音高く提灯の光が高低參差として來る。犯人を發見せる例なし。

**百川氏**

躰軀ガッチリとして方顏、無髯、氣壯矣。

**成田氏**

面長にして顋尖る。お人好しの方。只物の言ひ樣と、顏面筋肉の動き、何となく特異性を帶ぶ。學徒に魯視さるゝ傾あり、ウルトラ洋服黨。

**本多氏**

ぶッたらとして全體緩みて見ゆ。寒中に裕衣一枚で、講義中慄えて居るを時々見る事あり、故意にか否かは不明。人は言ふ塩町出入の崇りと。先生孟子が御得意で「自ラ反ノ而不レ縮（ナホカラ）、雖ニ褐寬博ニ吾レ仄焉（ナホクシバ）。自ラ反ノ而縮雖ニ千萬人ニ吾往矣（カシ）」、講じ來り講じ去り、引例旁證、得意滿面、眼光は次第にその輝きを增して、少しく濕を帶ぶる邊、寒中更不覺寒の概あり。洋服の絕緣体。眼鏡をかけず、無髯。

元木氏

長軀面長無髯。額より眞直ぐに禿げ上る。肌膚滑澤赤黄。顏面の筋肉動かず、從つて何等の表情なし。金緣の眼鏡は白襟と相映發頗る美なり。綽名を「ダウ」といふ。

（藩政時代、弘前城の松樹に、ダウと云ふ鳥群り棲む、聲甚喧し羽色淡赤黄、鳴き聲は鼻音多し）

越川氏

中脊無髯。大々的の酒徒。宿醉の爲の缺席、往々一週日にも亘る事も珍しからず。「長安市上酒家眠」の概あり。舉止輕し。

林氏

綽名を「カケンジヤ」と云ふ。算術教授の時に、此と彼とを乘ぜねばならぬ云々といふ時に「カケンジヤナラン」の語を、餘りにも多く、繰り返すより來る。容貌記憶になし。

辿れば辿るほど、色々なのが出て來るので、止めますが、實以て、地下の諸先生達に濟まぬ事と思へども、是も懷しさの餘りから、自然出て來るので、どうか御寛恕を願ひ上げて擱筆致します。

昭和十一年十月

弘前城北の小人島蟹窟裡にて

——黑舍人記す——

明治一五・七・本科卒業

## 齋藤恒之助

拜啓　炎暑之砌貴兄等益々御清榮之段奉恭賀候陳は本年は母校創立六十周年に相當り候に付記念誌御編輯の計畫ある由にて御下命相成身に餘る光榮と存し候得共實は老生教育事業に關係せしは僅か一年半位にして其後は全く關係を斷ち候に付其方面につきての記憶としては無之殊に今や七十有餘の老齡に達し身神耗弱筆を採るの勇氣とては無之只た生きて居る位のものに有之候間此事は御宥免被成下度老生と同窓にして先年迄教育し居りし錦地浦町の高橋虎一兄又は八戸の栃内初太郎兄などは適任と愚考仕り候間御賢察被下度右早速御返事可然筈の處暫く不在にて御尊書も遲れて拜誦從て御返事も遲引と相成候段不悪御了承被成下度先は返翰迄如此に御座候

八月七日　敬具

弘前市若黨町九九



# 師範學校在學當時を偲びて

明治一五・七・本科卒業　高橋虎一

師範學校創立六十周年記念に當り、往時を追憶して何か昔話でも書かうと思うたが、何しろ六十年前の昔で、今は記憶に殘存してゐる事は、幾何もないので、記念式日に岩藤先生へ御斷りしたが、先生は何んでも宜しいから記憶にある斷片的雜事でも、との御話ゆゑ茲に記憶を辿り雜事を書くことにした。

### 入學當時の弘前分校

當時の師範は豫備科、豫科、本科と分れて、弘前は分校の一つで在る。僕は創立早々弘前分校に入學した。校舍は舊藩時代の廢倉を假校舍としたのである。實に腕白時代で師範の卵時代である。然し年長者もある、年齡に制限がないので、二十、三十位の小學校の先生達も在學してゐた。豫科を卒へて先生になつたのもあるし、本科へ昇進して之を卒へたのもある。當時は一般に國家が物騒で、世界未聞の大彗星が東天に顯はれ（普通の二三尺に見ゆる星の何十倍もあるのだ、之れは今天文學者の記錄にあるかどうか）又舊三月廿五日櫻花爛熳たる時に大雪が降つたり、天變があるなど世は戰亂を望みつゝある時代なので、隨つて學生の氣風も今と雲泥である。如何なる長鯨が孵化して敎壇に立つか、先生方も心配であつたらうと想起される。是れが殘存の僕等の卵時代である。隨分亂暴ではあつたが、茲で螢雪の苦學をして本科へ昇進したのは明治十三年の二月である。

青森本校は今の赤十字社及市役所の處で、赤十字社の方は本校舍で、市役所南側の方には舊藩の倉庫、即ち附屬小學校である。新町小學校は其の北方にあつて、平屋建の小さな學校で、この青森には莫町小學校と、二校のみであつた。本校は二階建で當時では立派な建物である。生徒は全部舍生であるが、僕等の宿舍は西側より東へ折れ曲れる二階建の一棟で、校の向ひは農事試驗場で、肝油の製造、西洋葡萄の栽培も試みられてゐた。其の南方は平野で香取神社より遠く水田つゞきである。東は今の市役所向ひから拘置監迄神社境内で、老樹鬱蒼僕等の暑さ凌ぎの場所でもあつた。香取神社境内にかけて狐の巢窟場である。茲で敎育され本科壹ケ年小學師範科一ケ年を終へて、卒業の榮に浴し、人の師となる身となつた。十里の路程も足輕く山坂越えて鄕里弘前へ歸つたのは、明治十五年七月である。當時僕等の修めた學科目は左の如くであつた。

授業法　敎育學　修身學　地學

史學　文章學　物理學　化學
博物學　生理學　心理　經濟學
數學　簿記　習字　圖画
體操　以上十七科目

## 校長諸先生及生徒

弘前分校時代には黒瀧先生、佐藤先生（今の佐藤蕃氏の御親父）土岐先生等あつて薫陶された。黒瀧先生は有名の漢學者、佐藤先生は縣下第一の數學者で、何れも人格の高い方で、生徒の信頼も特に厚かつた。本校の方に轉勤されて僕等は又々教はつた。青森本校の方には福澤諭吉先生門下の四天王と呼ばれし、小野恒剛先生を校長と仰ぎ、色川圀士先生を教頭に、他に小杉俊二郎先生等あつて、何れも人格高潔にして、僕等生徒の師表と仰いだ方々だ。校長は溫厚篤實政治經濟の新知識に深かつた方、教頭の色川先生は氣象は反對の方で闊達豪毅、明治の前後水戸で活躍した烈士の一人、獄舍に投じられた事もあつたと聞く。先生が化學專門家となつたのは不思議の感を抱かしめた。磊落な氣風や辯舌爽かで政界に活躍せしめたらと思はれる人物だ。先生の公開演説「石炭を喰ふ動物將に東北に出でんとす」の演説は公衆の目を醒したでせう、是れが有名なものであつた、公開演説は青森で初めてゞせう。

時代は西南戰爭の餘燼未だ滅せず、各地に不平不滿の士族が殘存して、氣風も荒く、西鄕未だ死せずの慷慨家もあるので、僕等生徒達の氣風も今日とは比較にならん。南部三郡とは違ひ、津輕方面は殊に荒い。粗野朴訥彼の頼山陽の前兵兒の詩其のまゝだ。然し當時先生の氣風も未だ全く舊時の氣風を蟬脫してゐないから、能く生徒を諒解してくれた。如何に先生と衝突しても熱が醒めると忘れたかのやうに、毫も念頭に置かず。先生も其の通りであるので、師弟の間は圓滿で、僕等は愉快の中に學校生活をした。在學中僕等は先生の講演により修身練膽をしたより、寧ろ先生の人格と僕等の人格と接觸し、知らず識らずの中に人格を練られたと思ふ。當時學校には如何なる修身綱要や訓練法があつたか、今は念頭に殘つてゐない、師に接し、師と談笑してゐる間に、自然精神も練磨された。今になつて愈ゝ痛感す。幾百千の文字よりも、師の人格の如何こそ、感化の要諦であることを。

當時の生徒は年齡に制限がないと見え、十四五歳のものも二三十歳の年長者も混在してゐた。豫科を卒へて教鞭をとつた方も、進んで本科へ進むものもあるので、僕等は豫備科から進んだ年少者、即ち學校の卵時代である青森本科生となつてからでも、今の中里忠香君と同期生には川村潮君の如き、老年者もあつた位だ。僕等より學期は一二下級でも年長者がある。多分小學校の先生であつたのが入學し



たのも多かつた爲めだと思ふ。僕は師範の卵時代から育つたので割に年長でなかつた。だがそれでも僕は土岐先生と衝突し、御叱りを受けたのを憤慨し、休學ともつかず有耶無耶の間に一年を空過したので、津輕方面からの同期生中では年長者の方であつた。同期生の生存者は現在少くて、多くは早くも十萬億土へ旅立つたのが多い。殘存者は多分、栃内八太郎君、高田不二夫君、齋藤恒之助君、僕と四人しかなからうと思ふ。心淋しい感も出さうである。此の頃の手紙で、札幌市に居る高田不二夫君は「僕は同期生中最後の一人となる」とさも頑强さうに通信があつたが、其の裏面を想像すると、同輩が續々彼世に旅立するのを悲觀してるんではないかとも思はれて、此の記念式に久しぶりで、昔話でもして慰めようと期待したので、當日目を圓くして彼處此處と搜したが、一向見當らないのでがつかりし、殘念至極である。僕もそろそろ悲觀者の一人となりさうだ。呵々。

## 寄宿舍生活と學生風

當時の寄宿舍は西南に面した二階建で、茲には僕等師範生ばかりでなく專門學校生徒も僕等仲間と同宿してゐた。故人の工藤卓爾氏を始め、三戸郡の木村太郎氏、弘前の蝦名氏、北郡の佐賀氏、等も政治家や理學者然として居り、時々議論に花を咲かした。殊に木村君は愛嬌者で議論好きであるので僕等に好く調弄はれたものだ。學生は何れも綿服で袴をつけ、今の高等學校生徒の和服姿の一層粗野な風采と見れば間違ひない。夫れに無帽で寒中でも素足、吹雪の時も寒がりやは首卷をしただけだ。僕は其の連中の一人であつた。其の御蔭か今以て嚴寒にズボン下などを用ゐない。外出してゐる風采を今から想起すと可笑しくもなる位だ。然し純情無垢愛すべき生徒達と今でも思うてゐる。唯仲間中には女臭いものも二三あつたので、舍監に注意させ嚴罰させようともしたが、寛大にしてゐた。後で聞くと夫れは其地方の風習らしい。然し僕等に卑下されてゐた宿舍生活中、僕等は先生の御叱りを受けたのは、舍監に二三度位で、夫れは有名な賄征伐と、階上階下の寄宿生が二つに分れての大襲撃だ。誰も負傷なく、其れも無邪氣な戰爭遊戯のやうなものだ。確か縣廳へ聞えたので御叱りあつたと思うてゐた。一つは賄の不味な處から五錢の大金を投じ、青森名產の鰯を買ひ、洗面處で調理の上、洗面器を利用し、之を室内で煮て一同で鰯腹食べた時であつた。其の美味な香氣が舍監室迄した爲め、舍監に嗅ぎつけられて、御目玉を頂いたが、程よく言ひ譯して事なく濟んだ。

然し是れは後日賄征伐の好材料となつた。學生は經濟を知らずにゐたが、五錢の金で一室中の大食仲間が滿腹御馳走に舌打した。賄方如何に利得してゐるかが感じられ

た。當時の賄たら實に不味い鰯の腐敗しかけた塩からいもの五六尾に、味噌汁と漬物少々である。毎月二圓五十錢づゝの賄料を出してゐる當時。三圓も出すと御客樣扱ひに、立派な下宿生活が出來たのだ。寄宿生一同の賄に對する不滿は、そろ／＼醸成され出した。舍監も賄ひがどうかと注意するやうになつたが、それは又僕等と雲泥の差であつた。そこでいよ／＼學生一同申し合はせて、いよ／＼賄征伐を決行した。先づ一同紙を用意し、飯を紙に入れて握り、袖に隱し、之れを裡の溝溜に棄ること、二度目は磨立てであるから不味いとて食はずに、又々飯を炊かすこと、三度目には好く出來たら食べて運動すること、就寢は遲くなるから、起床は舍監に起してもらふことに密約した。月日は記憶にないが、愈々實行した。賄の隙を見ては飯を食はずに紙へ入れて握り袖へ打ち込む、口に入れしは半分、握飯は半分、不思議や飯は少時間に食はれ、飯の催促四方から起つた。賄方大狼狽飯不足で今炊くからと詫び、暫時休息と來た。一同賄室を出て、例の握り飯を、溝溜へ投入し、庭内で自由に運動し、先づ第一次の成功を心密かに祝し合つた。賄も舍監も不思議の感があつたらう。午后八時過ぎだらう、賄や舍監の方から第二次食事の通知があつたので、一同賄室に入つた。果せるかな炊立の御飯不味一同立腹し、其飯を舍監に差出し、賄方を責めた。賄方恐懼、舍監に叱られ、生徒に怒られ、青くなつてしまつた、早々又ゝ炊き直しと來た。寄宿生一同又ゝ庭内へ出て大騒ぎしてゐる。今度は餘程注意したと見え、長時間かかつた。其の間一同から矢の催促、賄、舍監の苦しみ想ふべしだ。十二時頃漸く飯が出來たので、一同賄室に入り食事についた。今度は常の飯であつたので、一同不足分を食べた。食後僕等は舍監室へ出かけ、當夜の賄方不注意から此の大失態を惹起した事を申出で、一時間の食後運動時間を請求し、併せて朝起の時刻二時間を後れさせる事、等を請求した。舍監は授業に差支へるからと拒み、生徒の方は聞入れない。そこで舍監の方で止むなく、朝は舍監の方から各室を巡り一々起すから、夫れ迄就寢して宜しいとの言質を取つて引上げた。朝起時刻少し遲れて、舍監が各室を巡る音がした。僕等は眼が醒めて居たが殊更鼾聲高く狸寢をしてゐた、舍監がドアを開けると夜具を頭からかぶつて、兩手で夜具を握つてゐた。舍監が一人一人搖り起して最後の僕の處へ來て誰だ／＼と呼び起し、夜具の襟を引き剝がんとしたが、なか／＼剝ぎとれない。僕もをかしくなつて失笑し大あくびで兩手を夜具から差出した。例の仲好しの大友先生である。先生も苦笑した。僕の擧動が餘り惡戯らしかつた。僕はその事件の首謀者と見られたのか、當事の事情を校長迄報告し、僕等數名を處罰せんとした。僕は機先を制せんと、數名打ち連れ、校長を訪問し、當時の事情、舍監の生徒に言明した遲起の事情等を、詳細陳述した處、例



の溫顏でにこ／＼話し合ひ「委細諒解した」との御挨拶だ。僕等に凱歌が揚つたので、何の事なく良結果を得た。大友舍監先生達は却つて校長から叱言を頂いたと聞き、實に同情に堪へなかつた。賄方も改良され、食物も前と違つて、皆滿足した。それは賄征伐の一幕だ。

次は狐狩だ。前言した通り附近は神社の樹林帶で、南方は田畑續きである。今の香取神社境内は樹木鬱蒼、狐の巣窟だ。此處で一頭穴から出る處を待伏して刺殺したこともあるが、學校の南方に在る小屋に狐が巣を作つて、常に出入するのを發見したので、何んで見逃さう。生徒一同包圍し、喊聲を發して之を捕獲せんと、穴から攻め立てた。内へ入つた者は、板を一枚剝ぎ取り、茲で苦しまぎれに飛び出た狐を遂に捕獲してしまつた。數日後之を屠つて、野間先生は解剖して生理の實試をした。殘物は狐汁として平げた。之れが大騒ぎで縣廳迄聽えたので、騒動でも起つたのかと心配したさうである。

此んな惡戯騒ぎもあつたが、師弟間の圓熟は後々の師範學校には多くあるまいと思ふ。唯舍監を苦勞させた些細の事があつたにとゞまる。然し友好的で常に同情的である。斯く上には小野、色川兩先生が師表になつて居られ、下には小杉、黑瀧、野間各先生が居られるので、師弟相和して面白く日を送つた。在校中僕等迄が一回も處罰された事はない。雜談は茲で終りませう。

回顧すれば六十年前からの追憶談だ。實に感慨無量の感がある。當時は各藩地方的感情は未だ消解してゐない。旅立するに車なく、汽船の往復もない位、帆船が唯一海上の便をなし居る位であるのだ。學校への往復等徒歩だ。馬背を借る旅行も自由でない。卒業後赴任等には笈を負ひ下駄足駄で旅した事もある位。この青森市もまだ二千戸足らずの淋しい町で、今と比しては話にならない程だ。磊落時代の青年達だ。宇内大國論を腕を捲つて論議し、天に二日なく地に二王なしなど〻政治家風をしてゐた頃を思へば、今別天地だ。鐵路は網の如く敷かれ、黑煙天を敵ふ大都市、工業界は、目醒める程大發展、旭日昇天の勢ひを示してゐる。我が現時の狀態が世界嫉視の的となるのも無理ではない。是れも神の國の本態が現はれつゝあるのだ。此の隆々發展しつゝある大日本帝國は、僕等の後輩たる教育者諸君の双肩にかゝつてゐる。旭日旗が地球上到る處林立する時代も、教育者諸君や、國民一般によつて作り得るのである。敢て現在の師範學校に育つ所の諸君等に熱望する。

# 青森師範の搖籃期

明治一五・七・本科卒業　高田不二夫

本記事は青森師範創立六年目の明治十四年及同十五年の實想を叙述したものである

## 一、學校及び宿舍の狀況

私の青森師範學校弘前分校に入學したのは、明治十二年だが本校の青森師範に進入したのは、創立より六年目の明治十四年である。

明治新時代に國民教育の衝に當るべき、教員の養成機關として出來た青森師範學校弘前分校は、龜甲町にあつた舊藩米倉を其まゝ造作したもので、藩制期の武士魂を遺傳し羽織袴の服裝をした學生には、調和してふさはしかつた。青森に來て見ると、新町の本校は木造ながら、初めから學校として設計された二階建だから、倉庫に出入した私には頗る立派に見えたものである、教室と宿舍は連接し廊下傳ひに出入してゐた、室の數は記憶がない、宿舍は樓上樓下とも約十二疊乃至十八疊で、一室八人乃至十二人を入れ、一人に一個の平机あり、勿論寢室修養室に兼用されてあつた。夜には燈の設備がなく、且點燈は嚴禁である。冬には火鉢を配付した、同室内の各生は年の少長となく平等の資格を保ち、室長も内規も慣例もなく、協和して圓滿に自治された。舍内はいつも平和で何れも沈着に修養してゐた、夜には幹事の巡檢がある、偶には恒例の惡戯豚を讀めの號令で空斬を連發し、甲室から乙室へと順次續いて行く。食事は官給で請負に任せられてゐた、粗末な副食物が續くと賄征伐と稱し、暴食して二回も飯を炊かせて休み休み食したこともある。

## 二、教授並に訓練の模樣

教科目左の通り

授業法、教育學、修身學、地學、史學、文章學、物理學、化學、博物學、生理學、心理學、經濟學、數學、簿記、習字、圖画、體操の十七科目である。

之が教科書

教育學は彼日教授論、修身學は勸善訓蒙、地學は本邦忘却外國輿地誌略、史學は（漢文）國史略、續國史略、十八史略、元明清史略、外國史忘却、文章學は文章軌範、物理學は物理楷梯、化學は新式化學、博物學は初學須知、生理學は初學人身窮理、心理學はヘボン心理學、經濟學は實氏經濟論と英氏經濟論、此外の分記憶に浮ばない。



要するに史學文章學は漢籍其他全部飜譯書であつた、そして教科書は凡て學校が貸與した。

其先生として

校長小野恒剛、教頭色川圀士、一等教諭小杉俊次郎、三等教諭森谷辰三、一等助教諭窪川信靜、同黑瀧儀任、二等助教諭野間謹爾、三等助教諭對馬運作、同小友謙三、傭教員百川精一郎、内海重男、成田泰の諸先生あり、地理は小杉、歴史は黑瀧、體操は野間、數學は對馬、授業法は百川、圖畫成田各先生の外、其他各學科を擔任された先生は忘れてしまつた。

其教授法

教授科目は西洋直譯のまゝなるも、教授は藩學法の延長で凡て讀物として取扱つた、只舊時になかつたことは、史學、文章學、數學、簿記、習字、圖画、體操の外は暗記の學問としたことである、結局新制度は電光石火のやうに大急ぎで輸入はしたが、諸學科特別の取扱法は置き忘れてゐた、併し物理器械も一通り化學實驗の器具と藥品及人體圖地圖等、物質的文化は輸入されたが、うまく活用されてゐなかつた、夫は文章の説明に使はれたに過ぎない。

諸學科は自學自習し、教室では輪讀輪講し、諸先生は監督されただけである、畢竟最初の學生は讀書の素養出來てゐた。

其訓練

訓練については殆ど考へられてゐない、兎に角舶來書學科の知識注入と教員の速成に急いだ、訓練は後年教育令の洗錬された頃ほい、各方面に工夫された陶冶法であつた。

## 三、學校行事の有樣

日々教科の進行、學期末の試驗以外一切の、行事がなかつた。

## 四、生徒氣質の追憶

文明開化は只壁ばかり、趣味の讀物も軍談軍記に代る雜誌や小説はまだ生れない。擊劍柔道に代り亞鈴や、棍棒體操は入つたが娯樂兼備の競技にならない、口腹の欲を充たすには二三人打連れ町に出て餅を食ふこともあつた、蕎麥を食ふたとか酒を飲んだとか異性の噂をするものとか絶對にない。

序に云ふ。學校に宿泊し、教科書と食事の官給は前出の通り、此他の衣服文具小使錢は自給であつたが、何れも率直で必要以外の學資を持つてゐなかつた、要するに生徒の氣質は水のやう玲瓏淡白であつた。

以上は僅か一ケ年間、簡單な生活をした學校内の見聞

で、素より生徒氣質の片鱗に過ぎぬ、若し稍深酷な觀察は四十年前の學生氣質と題し弘前出身學生氣質の實相を提出してゐた筈。（校長先生に提出）

## 五、教師朋輩の思ひ出

小野校長先生は重厚の君子人、福澤塾でも重望あらせられた新知識と風聞せられた、小杉先生は磊落の學者、黒瀧先生と意氣投合し德利と鮮魚を兩手にして訪問されたことを見たこともある、黒瀧先生は流暢快活の儒者昇平坂學校出身者、小友先生は虱を撚りて、當世を談ずる王猛流の儒者、筆蹟頗る雄渾であつた、野間先生は諸先生中最少年者、新式體操術を入れた謹直な方、百川先生も快活の方、弘前分校長士岐八郎先生と同時、仙臺師範第一期の卒業者と聞いた、對馬、成田兩先生は寡默な方、色川先生は水戸出身で、御國風の烈士の俤があり、押しが強く終に我等と衝突せられた、森谷、窪川兩先生の俤も御擔任學科も憶ひ起せぬこと呉々も殘念である。

同窓は半以上弘前出身で同鄕だが、各町に分れてゐたので竹馬の友が一人もゐない、大半物故し書信の往復は高橋虎一君（元姓花田）一人である、外八戸市出身の栃内八太郎君とも舊交を溫めてゐる。

【附　錄】

其一　附屬小學校

附屬小學校もあつたが其所在地を忘れた、新町小學校もあつたが、代用でもなかつたやうである。其頃十歲前後の生徒で、毛内靖胤、脇坂寛、井關初彥、岩本丈夫、沖津綠など、よく私にからまつて遊んだものである。

其二　專門學校

專門學校は師範學校内に併置されてゐた、教室と學科を別にするだけで、彼我の見境をつけなかつた、同一程度の學級生に若干の友人もあつたが、今猶手紙を交換してゐる人に佐々木丈虎君がある（舊姓毛内）、工藤卓爾、毛内嘉胤、高北義時外二人許り上級生であつた。

以上日常の表面に見えた學生は、小雀やら小犬のやうに柔順そのものらしい、併し其氣魄は、なかなか猛烈であつた、又無邪氣で爛漫たる天眞を發揮することもあつた、過渡時代の俤は矢張其裏面でないと覗かれない、豚讀め賄征伐は僅に其尖端で豪放なもの左の通り。

### 一、狐狩り

或る土曜日附近の畑に出沒する狐の足跡をつけ、其巢窟を發見して、小刀を鍬に代へ、穴口を廣げ、之を生擒し、寄宿舍廊下の押入に飼ひ、食後細引を手綱とし散歩の御伴



として市中を曳きづりあるいたことがある、狩の翌日は日曜日で畑主學校に來り、大根畑の損害賠償を要求する爲面會を幹事に申出たと賄方から密告してくれた、我等畑主を應接所に案内させ、其鋭鋒を摧く手段として外から錠付し、約一時間監鋼の後、風采年齒口辯とも合格者として成田直衛君を幹事に僞裝し、畑主に應接させ証據を示せの一點張りで之を擊退したこともある。

### 二、解剖の實驗

月に一度位市中より小犬を拉致し來り、解剖の實驗と稱し、撲殺して洗面所で料理し、皮は賄方にて味噌と交易し、洗面用金盥で煮て食ひ野性を發揮することもあつた。

### 三、間食

月に二度位醵金して飴をしやぶる、これは舍内の慰安である、味慾の低級と財布の輕さ、之は社會の反映である。

### 四、教室の珍風景

日課の進行程度は大抵定つてゐたが、先生と遊ぶ氣持で豫定の程度を一瀉千里に流し去り、其前程につき質問を連發する、當年の學生は多小の素養もあつたので、此種の質問は師弟の位置を顚倒し、先生方を惱ましたものである。

### 五、猛烈な氣魄

威壓の抵抗に發揮した猛烈な氣魄は、同一題目で別に略叙したから茲に省く。

時は文化の建設中にて何もかも、また板につかない過程の我等は拾石であつた。

今の若人の前に五十年前世相の一方面を展開する。

其一　今昔の感

一、今の學生達が外出する服裝に、お構ひなく無頓着である。

昔の學生達が外出するには必ず袴を着けたものである。

二、今の學生達は讀書する場所や姿勢に頓着なく、寢轉ぶ位は平氣である。

昔の學生は座敷の机に正座し禮容を以て讀書するものとした。

三、今の學生達の友人に異性をもつもの少くない。

昔の學生達は異性には無關心沒交渉であつた。

四、今の學生達には軟文學の趣味者が多い。

昔の學生達の周圍に軟文學は絶無であつた。

五、今の學生達の運動趣味は陸に水に多角形である。

昔の學生達の運動は擊劍柔道游泳に過ぎない。

六、今の學生達の談話の範圍は個人を對象とした各自の環境を出てない。

昔の學生達は口を開けば天下國家を論じた。

其二　超　凡　人

一、梅　坊　主

油川の異彩に繪畫の名人梅坊主がゐた、一日初對面の私が一升德利の清酒を携へ、其山門に入り畫を懇請した、師快諾微醉氣分となつた頃私の墨も亦磨れた、師筆を揮ひ立ちどころに唐紙全紙二十四枚を描く、墨痕淋漓樹幹奇矯雅致逸脫一枚も無駄なく、妙趣超凡其人と同じである。

五十年後私が旭川中學に在勤した時、達摩太師が九年も洗はぬ顏した梅坊主の令孫大井昭君が、紅顏貴公子の風采で我中學に着任され、一夜其祖の磊落瀟洒を語つた奇遇もある。

二、蓑　蟲　山　人

蓑蟲山人何れの國の產か知らない、庵を靑森近村に結び仙人生活をなし、晴には耕し、雨には畫かれ、世界の乾坤に悠々として自適された、其畫風は昔の鳥羽畫、今の文人畫より一層奇拔超越、之に對すれば羽化登仙の思をなさしめた、私は其畫を見たが其庵を叩かなかつたこと殘り惜しい思出の一である。

明治一六・七・本科卒業　石井武修

## 一、學校及び宿舍の狀況

學校は新町にありて木造二階建にして附屬小學校は舊倉庫（土藏）を使用せり。

寄寄舍は自修室、寢室兼用にして疊附十二疊に六人乃至八人づゝ、外に押入に寢具及衣裳を入る、一定の制限なく羽織袴を着、體操の時は襷掛せり、自修室には小机に向ひ座して修學せり、昔の寺小屋式にて現今の思ひ及ばざる狀態なり。

## 一、教授並に訓練の模樣

當時の校長は沖津先生、首席は黑瀧先生（共々碩儒）にて德育智育に重きを置き、體育を輕んずるの傾きあり、常に體操を課するのみにて柔道や擊劍を正科とせざるなり。

## 一、教科書又は教具の狀態

學科は修身、讀書、作文、習字、圖画、理化學、博物、地理、歷史、算術（算術のみにて珠算を課せず）代數、幾何、簿記、農學、教育（授業法管理法）實地授業等にて修



身書には小學論語、讀書には國史略、十八史略、元明清史畧、文章軌範（歷史、讀方、綴方は以上の書によりたりと思はる）試驗の際には學務課員（現今の學務部長）及校長受持教員の面前にて講讀せり、物理化學も實驗器械不充分にて教科書を讀了して縣案せる狀態なり。

## 一、生徒氣質の追憶

概して教育者となるべき重任を思はず大臣參議たらんことを夢想し人格を重んじ卑劣の行爲なかりき。

## 一、教師朋輩の思出

先生を尊敬し、毫も抗することなく、目下の如く同盟休業する等の行爲なかりき。

朋友間は舊藩士の氣象を失せず、南部津輕の舊觀念を存して兎角圓滑を缺き、信愛の念乏しく、時には衝突せしことあり。

以上は明治十五、六年頃にて今より五十年以前のことにて長年月の事なれば、失念せしこと多々あり御洞察を乞ふ。

昭和十一年八月下旬　　七十四翁

# 回　想　談

明治一六・七・本科卒業　故　成　田　貢

明治十三年四月から十六年七月まで靑森縣立專門學校があつて、文科と農工化學科との二種の生徒を養成したことがある。この學校は名稱こそ違へ、わが師範學校とは最も近き緣故がある。教師を共にし、教室を共にし、寄宿舍を共にし、食事を共にし、喜憂を共にしたのである。況や專門學校が廢止されてみれば、母校を亡つた孤兒の境遇にある兄弟を見捨てる事を欲しない。永くわが校の准同窓生として待遇してゆきたいものである。今同校卒業生中余輩の知れる諸氏の卒業後に於ける狀況一斑を述べて諸君に紹介する。

文學科本科卒業生四名（十五年七月）

故毛內嘉胤君、卒業後直に本縣學務課に奉職し本縣學政に功勞尠からざりき。

工藤卓爾君、師範學校豫科卒業後入學せり、曾て代議士に擧げられ又靑森市長たり現に靑森市會議長として令名あり。

木村太郎君、先頃迄靑森裁判所の監督書記たり、令息其

君は東京高等師範に在學中。
高北義成君、消息知らず。
左の諸氏（二十九名）は明治十六年七月廢校の爲本科第二級で出されたり。
故發田米太郎君、溫厚篤實黑石尋常小學校長として令聞ありき。
海老名昌一君、永らく米國にて苦學せらる、農學士となり曾て本縣畜産學校長となられたることあり、今某縣に技師たり。
故鳥谷部銑太郎君、春汀の雅號はよく人の知る所、人物月旦を以て名聲嘖々たる文筆家。
本郷榮君、高等官四等正六位勳六等の檢事で山形地方裁判所に在り。
白鳥鴻彰君、現に縣會議員たり。
鈴木武登馬君、君も現に縣會議員たり。
故工藤隆君、元の中村健次郎君のことなり、曾て本校の教諭たり。
清野德雄君、卒業後本校高等科を卒へ今本縣屬として奉職せり。
藤林健作君、東郡書記事業係なり。
佐々木丈虎君　畜産學校教諭たり。
右の外小枝勝藏、嵯峨助太郎、三上登太郎、吉田武貴（元の成田傳次郎君）成田傳之進、山田公正（舊名平吉君）齋藤有藏、武田英一、高北義時、毛内太熊、浦田文輔、成田常藏、阿部峯太郎、木村熊藏、槇政次郎、小島政之助、安田彦吉、是等諸氏の中には物故した人も五六あり、官界にある者、實業界に活動して居る人もある。

（明治四十二年十一月青溟寮誌ヨリ轉載）

# 在學當時の追想談

明治一八・七・本科卒業　成田武三郎

余は明治十八年の卒業生でありますから、今を遡ること殆んど五十二年、恰も母校創立十年目に當つて居るのであります。然るに翌明治十九年新たなる師範學校令に基き、組織を改められて、青森縣尋常師範學校と改稱せられ、茲に一期を劃して萬事改新されたのでありますから、其の以前は草創日尚ほ淺かりし母校の上世期時代とも稱すべきであらうと思ふのであります。

其の頃の校舍は、今の縣廳前なる赤十字社青森支部の場所にありましたが、敷地も狹く、隨つて校舍の規模も亦小さく、到底今日とは比較にならんのであります。階上は全部教室に充てられ、階下は職員室、事務員室の外更に體操



場にも使用されてあつた樣に思はれます。只理化教室丈は別棟として特に一室設けられてありました。先生方の中には理學士や、農學士も居りましたが、母校卒業の先輩も助教諭として三四名居つたのであります。習字や漢文科は重に舊藩時代の有名の書家や、漢學者方が担任されてありましたが、何れも老先生でありました。體操は唖鈴球竿棍棒等の器具を使用する體操で、無論兵式體操などは無かつたのであります。學科種目中手工と音樂は、全然無かつた爲め、後に至りて吾等時代の卒業生は、實際困つたのであります。尙ほ小學校に於ける從來の舊式授業法が、一變されて實物教授開發授業と云へる、新式法の行はれる樣になつたのは、當時の教諭野村成次郎先生が始めて、傳へられたのであつたと思ふのであります。而して吾等在學中には今日の樣な嚴肅なる、儀式を行つたこともなく、柔道、劍道の稽古は勿論、運動會や修學旅行等の施設もなく、諸事凡て簡易にして且つ不完備であつた樣に思はれます。教科書及び用具類は全部學校より貸付せられ、筆紙等も亦毎月給與された外、更に小使錢として五十錢づゝ支給されましたから、節約さへすれば別に費用を家庭より仰ぐ必要もなかつたのであります。

寄宿舍は校舍に接續して有りましたが、至つて小規模な建物でありました。舍生は一室に普通六人位居りましたが八九人居つた特別室も、一二ケ所あつた樣に思はれます。室内には全部疊が敷かれてありましたから、寢具は各自の家庭より持參の夜具布團を用ゐて居りました。其の頃は未だ電燈の話もなかつた時代でありますから、各自勝手に買ひ求めた置きランプを用ゐて、消燈時間九時頃迄自習したのであります。尙ほ食事の方は一切學校にて取り扱ひ、賄は多分請負者の仕事であつた樣に思はれます。副食物は餘り結構でなかつた爲め、時折り突發的に御飯を鮮腹食べまして賄方を手古摺らしたものであります。之を賄攻擊と稱して、其の後も幾度かあつたことゝ思はれます。

茲に生徒の身裝に就て一言しますと、當時は現今の樣に制服も制帽もなかつたのでありますから、木綿の羽織袴に履物は下駄、足駄、靴等各自勝手の物を用ゐ、頭髪の如きも亦各自の自由であつたので、短髪、長髪、分け髪等、是れ又更に一定する所なく、宛然私塾學生其の儘で少しも官費養成の學生らしい風はなかつたのであります。併し氣質は概して潔白明朗で、苟も生徒の體面を瀆すが如き惡質なる行爲言動は毫もなかつた樣に思はれます。

以上の記事は甚だ粗雜ではありますが、若し母校の上世期時代を偲ぶ資料の一端ともなれば望外の幸甚とする所であります。

明治一八・七・本科卒業　加藤源三

私の卒業は明治十八年の七月ですから早、足掛五十二年になります、當時を追懐すれば今仍心中を往來する物事が無數ございますから其の内一、二を書いて見ませう。

一、生徒の氣質

當時の生徒は津輕人の子弟が最も多く、會津人（斗南藩士）の子弟が之に次ぎ、南部人の子弟は少うございましたが其の氣質の特徴が一見して分る樣でした。

生徒の中には如何はしい者もあつた樣でしたが、概して氣節があつて思想も單純で無邪氣であつた樣に記憶してゐます。

日常の談話も數人寄れば藤田東湖、吉田松陰、維新の三傑、其の他明治維新前後、殊に幕末に於ける志士を語り、果ては慷慨悲憤して盛に賴山陽、雲井龍雄及以上志士の作つた詩を吟じたものです。

南部及び會津の子弟は多くは溫厚であつた樣でしたが、津輕殊に弘前士族の子弟は未だ昔氣質が失せないで、衣骭に至り袖腕に至るといふスタイルで肩を怒らして市中を濶歩したのも多うございました。

當時は一般に粗削りの者が好かれて、老成ぶる者が嫌はるゝ風があつた樣でした。

一、教師の思ひ出で

教師にも如何はしい者もあつた樣でしたが、優秀の方が多かつた樣に記憶してゐます。

校長は小野恒剛先生で、先生の樣な重厚な方は容易に見られません。其の後歷代の校長に先生の樣な長者は無い樣に思はれる。

沖津醇先生の論語の講義、黑瀧儀任先生の漢文の講義の樣な講義は今日東京へ出ても容易に聞くことは出來なからうと思ふ。

小山内暉山先生は（習字の先生）年最も高く、生徒を遇すること孫に對するが如く、教室内は常に和氣靄然としてゐた、今尙親しみを感じます。

野間謹爾先生は（體操の先生）容貌端麗、技術巧妙で、先生の樣な方は全國にも容易に見られなかつたと思ふ。

加藤常七郎先生は理學士で、實驗の巧妙なることは今尙目に見える樣です。

野村成次郎先生は本縣に於ける、開發主義の第一の先陣で、以來注入主義は漸次跡を絕つ樣になつた。先生は伊澤修二先生の高弟で、始めて視話法も敎へられた。

其の他佐々木農學士、對馬先生、窪川先生、小友先生等も記憶してゐるが略する。



# 師範學校時代の追想

明治一九・二・高等科卒業　玉内勝藏

## 一、はしがき

私が三戸郡立八戸中學から、本縣師範學校へ入學したのは丁度明治十五年九月であつた。在學三ケ年半で高等師範學校を卒業し、三等訓導に任ぜられ、初めて八戸高等小學校へ奉職したのであつた。回顧すると今から凡そ五十有餘年前の昔のことで、在學當時に於ける委しい事柄の記憶に殘つて居るものが甚だ少い。けれども今年幸にも母校にて創立六十周年の記念祝賀式が行はれる由で、記念誌をも發行さるゝに就いて寄稿して呉れと、態々箋紙を添へて御書面を戴いたので、其出身者の一人として、懷舊の情に堪へぬ所から、思出の僅禿筆を揮うて見たが、何分にも忘れ勝の多いために詳細に涉つて、書けないのは甚だ遺憾であるが、其邊は幾重にも寛恕を乞ふ次第である。

## 一、青森縣師範學校

明治五年五月始めて敎育令が頒布されたが、其後亦學制の改正があつて、明治九年九月始めて本縣師範學校が開校された。其當時は本科と豫科とを設け、又引續いて弘前や八戸や其他に分校が設置されたが、同十五年七月師範學校に初等、中等、高等の三科を設け、又地方の分校在學中の者は本校に來て卒業するのであつた、初等科は一ケ年、中等科は二ケ年、高等科は四ケ年であつた。當時高等科の敎科目は

修身、讀書、習字、作文、算術、幾何、代數、地理、歷史、物理、化學、博物、生理、地文、經濟、簿記、本邦法令、心理、敎育、學校管理法、圖画、農業、唱歌、體操、

の二十四科目であつた。當時の敎育方針は全く儒敎主義に則り、漢籍に重きを置き、修身讀書は勿論萬國史も漢文のものを用ひ、作文も漢文の作法を敎へらたので、漢文の研究には便益を得たことが多かつた。今試に其敎科書の一部を擧げて見ると、卽ち修身讀書としては、十八史畧、元明清史畧、文章軌範、論語孟子、小學近思錄左傳等であつた。そして當時は六ケ月毎に進級試驗が行はれ、初等科を卒業した者は小學初等科敎員の資格を得て七等訓導に任ぜられ、中等科を卒業した者は初等中等科の敎員となることが出來て五等訓導に任ぜられ、高等科を卒業した者は初等中等、高等の三科を通じての敎員たることが出來て、三等訓導に任ぜられたものであつたが、尋いで等級がなくなつ

て、單に訓導と稱することゝなつた。其後明治十九年四月に至つて師範學校は四ケ年の尋常師範と代り、又三十一年四月に至つて師範學校から尋常の二字を削つて、單に靑森縣師範學校と改稱されて今日に及んだものである。因に記す。我々在學時代の師範學校長は前には小野恒剛先生で、後には沖津醇先生が代られた。そして當時の同窓は工藤淸四郎君、小島晉之進君、山中嵯峨之助君、三橋外太郎君、角田岩太郎君、長谷川力太郎君、大石友次郎君、竹森熊次郎君と僕と九人であつた。

## 一、小學校

小學校の始めて出來た當時は、上等、下等の二種であつたが、地方にては上等小學が出來ずに、此名稱は無くなつて單に八戸小學などゝ稱へて校の字も用ひなかつた。そして其頃の修業年限は四ケ年であつて、初年は八級と稱し、一級に進む迄には六ケ月毎に進級試驗があつたもので、其後師範學校に初等、中等、高等の三分科が設けらるゝと共に、小學校にしても同樣、初中高の三科に分れて居た。其時の高等科では地文や幾何などの學科もあつて、讀書の敎科書に小學や、十八史畧などの漢文本を敎へたもので、漢文として今日の中學校の五年級の程度であつた。其後英語はやつてもやらなくても地方の隨意であつた。師範學校では最上級になつて三ケ月づゝ交代で、敎生として附屬小學校で新式の敎授法によつて、實地授業を練習したもので、當時の附屬小學校は新町裏にあつて、古びた倉庫内を敎場として授業をやつたものであつた。

## 一、敎授法

小學校の敎授法と云ふのは最初は中學校でも、師範學校でも、舊來の寺小屋風の因習に從つて、敎師は始めから何遍となく敎科書を朗讀して聞かせ、それから直ぐに講義をやると云ふ有樣であつて、敎師自分が働き、生徒は只傍聽して居る風で、今日の如くに標本や實物などの用意も無論無く、只管暗誦法を用ひて無闇に記憶せしめる、謂ゆる注入法で澤山詰め込むと云ふ主義であつた。其後次第に歐米の敎育及敎授に關する譯本が澤山出來て、彼日敎授論や那然の小學敎育論などを採用して居つたが、其後明治十七八年頃からペスタロッチー氏の唱導せる、所謂開發主義の敎授法が始めて行はれ、兒童腦力の發達程度を考へて、成るべく直感に訴へ、實物敎授に重きを置き、知力發達の順序に從つて、簡より繁に粗より密に已知より未知に及ぼすと云ふ有樣で、盛に問答法によつて其能力の開發を目的として敎授を行つたものであつた。敎可とか級決とか云ふ言葉さへ用ひられたもので、敎授上に於ける一段の進步であつ



た。其頃は伊澤氏の敎育學や、學校管理法や、井上氏の心理新說や、高峰氏の敎育新論や、若林氏の改正敎授術などが盛に歡迎愛讀されたものであつた。次に當時の體操は未だ兵式が行はれ無かつたが、器機體操としては啞鈴や、球竿や、木環や、棍棒など云ふものを用ひて居つたが、今日では其器械さへ見ることが出來なくなつた。

## 一、寄宿舍

私共の居つた當時の寄宿舍は新町裏にあつて本校に接續し、道路を隔てゝ南側は斜に近く、縣廳の構内と相對してあつて、木造二階建の壯大な建物であつた。始めは專門學校生徒と同宿して居つたが、明治十六年專門學校が廢されてから、舍全部は師範生徒の寄宿舍となつて、階下の第一室から始まつて、階上の第十六室迄で、室に大小があるけれども、一室平均六七名づゝ居て、總數凡そ百二三十名内外であつた。此外に凡そ三四十名、都合の通學生があつたこともある。そして階上の突當に舍監室があり、舍監は敎授兼務で三浦千代次郎先生、金谷熊四郎先生、小山内健三郎先生が交代に詰めて居て、舍長は舍監の命を受けて各室長と舍内の庶務は總べて、協議してやつて居た。當時の舍長は工藤淸四郎君と僕と小島晉之進君と三人で、交代に階下の舍長室にて事務を執つて居た。此室には舍生全部の名札が寄順に揭げられ、札の表面には氏名を白書し、裏面には朱書し、外出の場合には朱書の方を現はし、歸舍すると白書の方に掛け直すのであるから、一目して在舍か否かがわかるのであつた。そして外出中歸舍時間に遲れた時は、証明書を持つて歸るのであつた。それから屆書や口頭での申出は、舍長にて取扱はれ、又每日朝と晩との二回の點呼があつて、此時は各室順次に室前の入口に整列して、舍長の檢閲を受けるのであつた。そして朝起や、就寢や、食事の際は拍子木を擊つて相圖をしたものであゝ。當時多數の靑年が一堂に集つて居つたために、中々賑やかであつて、津輕方面から來て居る者は數多く、氣風は概ね活潑であつたが、南部方面から來た者は數少く、大抵溫順であつて、兩者の氣風は自ら異なるものがあつても、其間に衝突や喧嘩などの起ることは殆ど無かつたばかりでなく、何れも皆能く相親睦して、交際して居た。特に其頃の學生としては師範を以て自から任じて居るから、思想着實にして、且つ質素であつて、能く勤め能く勵み、切磋琢磨の効が著しくて、若し不勉强なり不品行なりで成績が惡いと、勿論入學の資格が無くなるばかりでなく、學費を償還しなくてはならぬのであるから、各自能く自重したものであつた。只こゝに一の遺憾なことがあつたのは、賄方の者が粗末な料理を續ける時は、賄方を苦めて、各自平素より食事を貪つて、飯に不足を生ぜしめ、再度迄も炊かせて、賄方を閉口

させたことが有つた。賄方もそれがために料理に注意を拂つたものである。これは抑も當時の賄方は請負仕事であつたので、こんな弊風が起つたことであると見らるべきである。それから賄方の仕事は食事を供するの外に、風呂を沸かして入浴さして呉れること、火鉢に用ふる木灰や、ランプ用の石油を各室に分配供給することであつた。試驗間近くなると、消燈後も密に豆ランプに點燈して、深更迄勉强する者もあつた。其當時は舍費は無論全部縣費支辨であつたので、其食費に剩餘があると、其殘金は僅少でも給與されたものであつた。又舍長や室長にも僅かばかりの手當があつたものである。我輩は長らくの間此寄宿舍生活をやつたものであるが、家庭に居て朝寢をしたり、夜更迄起きて遊んで居たりなどで甚だ不規律な生活をやつて來た者であつたが、舍生となつてからは決してそんな自墮落をすることが出來ないから、自然と規律正しい習慣を得たばかりでなく、協同生活の眞味をも嘗め來つて、他日の修養上に有益な結果を得たことは、これ全く舍生時代の賜であつた。然るに寄宿舍生活は實に苦しかつたものであるなどゝ云ふ人もあるが、僕等は少しもそんな感じを持たぬばかりでなく、却つて愉快に平和に勉强し得たことは、今以て忘れられない。それから幸にも病氣などで缺席したと云ふことも殆ど無かつたのであつた。

明治一九・七・高等科卒業　**築瀨榮**

私は最初本校の中等科に入學しましたが、其後高等科に進み、明治十九年七月卒業したものであります。依て其在校當時の狀況を申上げようと思ひますが、今から五十年前の事ですから忘れた點も、又間違つた點も多々あると思ひます。其點は幾重にも御了承を願ひます。

## 一、學校及宿舍の狀況

本校は專門學校と併置で其位置は新町の裏手今の赤十字社支部及市役所の一部に在つて、縣廳通に面し、門には青森師範學校の札が懸けられ、門を入れば直玄關に至り、其側に授業時間の合圖をする鐘が柱の上に吊されてあつた。校舍は洋風の二階建で教室の外に校長室、職員室、事務室、教具室、圖書室及體操場等があつた。職員は本校並に專門學校兼務で二十七名許。生徒は兩校にて百三十名許であつた。修業年限は初等科一年、中等科二年、高等科四年で、卒業試驗には在校中履修した全教科目に就き、每年二月、七月の二回に行はれ、初等科卒業生の多き時は十八名少き時は九名。中等科卒業生の多き時は二十五名、少き時は二十一名。高等科卒業生の多き時は八名少き時は五名。



大體是位の人數であつた。又附屬小學校は本校の近所に在つて、教生は卒業の際其半數が三ヶ月交代に實地授業の練習をした。此の校の生徒は概して中流以上の家庭の子供達だから、教授も訓練も能く行屆いて學科の成績も至つて好かつた。

教科目は、修身、讀書、算術、代數、幾何、歷史、地理、物理、化學、動物、植物、鑛物、生理、農業、心理、本邦法令、教育、經濟、學校管理法、簿記、作文、習字、圖画、唱歌、體操等であつた。

職員は小野恒剛、沖津醇（以上校長）對馬運作、黑瀧儀任、百川精一郎、窪川信靜、小友謙三、成田泰、三浦千代次郎、野間謹爾、加藤常七郎、金谷熊四郎、森谷辰三、野村成次郎、佐々木善次郎、林慶作、成田熊太郎、大井民吾、傍島まね、蒲田廣、樋口亮、小山內健三郎、折井松若、今助次郎、小山內暉山（以上教諭）新谷孫十郎、廣瀨常之助、西澤勇助（以上事務員）等であつた。

本校からは食費と學用品費とを給與せられ、圖書、器具等は貸與せられた。着物、袴、夜具其他の日用品等は自費であつた。

宿舍は校舍に續いて建てられ、二階建の疊敷で、室數は十七內に舍監室、一一室每に七八名づゝの生徒が收容せられ、其監督として舍監の外に室長があつた。外出の時は、舍監室にある名札の裏を覆へし、歸つた時は表を現はし置くやうにした。若し門限時間に遲れた時は、心ず證明書を舍監に差出なければならなかつた。夜間は一室每に二個づゝのランプが點ぜられたが、其外に各自勝手に豆ランプを机上に置いて勉强したものである。舍內では酒を禁ぜられたが、煙草と菓子とは許されてあつた。食事起床及就寢には賄方が擊拆を打つて時間を知らせたものである。食堂は宿舍に續いて設けられ食事の時は食卓上に供へられた。飯鉢と汁鉢とから勝手に盛つて喰べたものだから、時々飯が不足して賄方が篦舞することが屢々あつた。

## 二、教授訓練の模樣

教授は一般に注入主義で澤山物事を教へて智能を啓發するのが目的であつたから、學科の進むことは非常に早く、殊に讀書科の如きは一段の進歩であつた。然るに明治十八年開發主義の教授法が行はれ、主として教案の作製方に力を注がれ、教案の巧拙に依つて教授法の採點をせられたこともあつた。之と同時に新しく兵式體操を課せられ、此の時始めて軍服を着、軍帽を被つて體操をした。其翌年には唱歌を課せられ、是亦始めて卒業式の莹の光や、紀元節の雲に聳ゆる高千穗のなどの唱歌を歌つたものである。

訓練は基礎を修身科に置き、實踐躬行を目的として、校の內外を問はず、何事にも勸善懲惡の道を講ぜられ、且先

生は身を以て範を示し、品性陶冶の任に、當られましたから、生徒は皆其人格と德望とに感化せられ、誰一人として不良の行爲をなす者がなかつた。それゆゑ學校には校則もなければ、校訓もなく全く不文律の狀態であつた。

## 三、教科書又は教具の狀態

教科書は國史略、十八史略、元明清史略、小學定本、論語孟子、春秋左氏傳、近思錄、正續文章軌範詞の八、衞筆算提要、代數教科書、幾何新論、彼日教授論、學校管理法教育新論、改正教授術、物理全誌、植物學、動物學、鑛物學、有機化學、無機化學、萬國史記、日本地誌略、輿地誌略、地文學、初步心理、新說本邦法制、寶氏經濟學、農學階梯、生理提要、帳合の法、小學画帖、小學唱歌集等であつた。

教具は總て專門學校と共通で、動植鑛物標本、織物標本、人體模型、生理圖、物理化學機械、日本地圖、外國地圖、地球儀、唱歌掛圖、啞鈴棍棒、球竿、木環、オルガン等であつた。

附記

私の在學當時は今のやうに分り易い辭典類や、解釋物など殆どなく、其他理化學の機械なども至て少く學習上大に困難したものである。

## 四、學校行事の有樣

本校には年中の行事と申すべきものは殆どなく、唯入學式と卒業式と位のもので、他の祝祭日の如きは其當日休業して祝祭の意を表したものである。

## 五、生徒氣質の追憶

生徒の氣質は一般に質實剛健で、常に進取の氣象と勉强心とに富み、毫も傲慢無禮の行なく、又輕佻浮薄の風なく、殊に思想上に於ては純正無垢の生徒であつた。尙之を仔細に觀察すれば津輕人は剛毅で、南部人は柔順であつた。

## 六、教師の思ひ出

私の卒業した當時今泉禮次郎君と一所に、恩師佐々木善次郎先生を尋ねた。其時先生は津輕地方の農業は已に視察したが、南部地方の農業は未だ視察しないから、是非案內して貰ひたいとの話であつた。そこで其翌日先生と私達二人は一所に徒步で青森を出發し、途中海岸の景色を眺めながら夕方野邊地町に着き、飯田屋旅館に一泊した。其翌日は朝から雨降りで困つたが、雨を冒して出發し、途中田畑の耕作上の話を聽きながら、夕方七戶町の福善旅館に着いた。早速番頭が出て來て、私達三人の身形の粗末なのを見て、階下の暗く穢い一室に案內した。間もなく粗末な茶菓と宿帳とを持つて來た。そこで私は筆を取つて、青森師範學校教諭農學士佐々木善次郎先生と私達二人の姓名とを記してやつた。さうすると宿の主人が態々出て來て、御粗末申上げてすみません、どうぞ二階の一番へ御移り下さい、と頻りに申すので、遂先生は笑ひながら二階の一番へ移られ、御蔭で私達二人も一番へ移つた。晩餐近くなる頃偶々南部玉味噌の話が出た、先生は其玉味噌を是非喰べさせて貰ひたいとの話であつたから、早速宿の主人に命じ、豆腐汁を拵へて差上げた、さうすると先生は其汁を吸ひながら、是は有名な岡崎の八丁味噌によく似てゐるが、味は少々劣るやうだ、玉味噌と言ふ名は美しいが、其割合に味は惡いと申され、一同大笑した。其晩先生は得意の味噌釀造法を說かれ、宿の主人を始め皆々謹聽した。其翌日先生は七戶地方の農業を親しく視察して、歸靑の途に就かれました。

明治一九・七・本科卒業　**中村良之進**

今は昔、明治十七年十一月十三日まで、予輩は弘前師範分校に在學したのであつたが、同校は廢止となつて靑森の本校へ收容せられたのである。其當時弘前と八戶に分校を設置せられたのは、大いに理由の有つた事で、又兩分校の廢止せられたのは當然であつたのである。

其れで予輩は其の十一月十四日の夜分、股引脚絆に草鞋掛で、弘前を出立したが、生憎此日は初雪で、而も西打付の吹雪で、鶴合羽は恰も雞の羽ばたきして、飛ぶやうにばためいて、さも予を愚弄して居るらしく惡くらしくあつたけれども仕方はなかつた。特に道路は醬油を掛けた、大根卸と思へば間違はない。其れを十二里の間徒步で通したので、今日から見ると到底想像も何も付かない實狀であつたのである。

何しろ五十年以前の昔の事であれば、只夢路を辿るやうなものであるが、特に印象の深い事實だけは記憶に殘つて居るので、普通の事柄は大概忘れて了つて居る。先づ生徒の數は約百名で、其內の半數は弘前人で、勢力が有つたから、屢々佞武多式の惡垂をやつたものである。其れに比較すると、南部人は大人しくして、能く勉强もするから成績は良かつた。中にも予輩として模範生であると予の目に映つてゐたのは、何としても大庭恒次郎君であつた。其れから學科の事では、予輩時代に初めて課せられたのは、唱歌で、教師は傍嶋まね先生で、小學唱歌集一の卷の「招け靡け野原の薄」から初められたのであるが、予輩に執つては一番珍しかつた。

次には兵式體操を課せられたのである。其れまでの生徒は和服であつたから、體操の時には褌掛でやつたのであるが、此度は俄に服裝一致で、小倉の洋服に獨逸帽、皮靴を新調したのであるから、是れで子供らしく市中を威張つて歩いたのであつた。其の他の運動は組織的に出來て居なかつたが、野球はベスボールと稱へて相當にやつた。又擊劍も自意で、學校の裏門の所に柿崎の道場が有つて、市中の人達と共に稽古に行つたが、餘り成績は好くなかつた。

娯樂物では第一に碁であつたが、全部紙製であるから、何んだか張合が無さそうに見受けられた。打手で拔群に強かつたのは山形正雄君、今の富士雄君で、生徒同士では五月蠅がつて居た。其れからトランプは予輩時代に初まつたもので、其動機は一日同士輩は汽船に遊びに行つて初めて見て、其の傳習を受けて來て、早速市中へ出て、トランプと云ふものは無いかと搜して歩いたけれども、中々見つからから無かつたが、博勞町の一商店に於て只一通發見して、鬼の首でも取つた勢で歸校したが、其れは舶來品で馬鹿に高價であつた。尤も是れは新規娯樂であつた許りでなく、勝負も早く、多人數で出來るから非常に歡迎されて、忽ち札は切破れたから、今は仕方なく画用紙を切斷して無繪の手製札を作製して、各室共晝夜兼行で遣つたものだから、室内と云はず廊下と云はず、此札が散張つて居るので、學校から嚴しく禁止せられたが、トランプは是れから四方に宣傳せられたものと思はれる、但し其時の打方は今とは多少違つてゐた。

**賄征伐**　予輩の惡垂の内で稍計畫的に遣つたのは、此の賄方征伐だけで、在學中此位壯快な事は無かつた。今其當時の賄の事を展べて見ると、新町の某氏の受負であつたが、予輩は學校から給與されて居たのは、此の賄料と炭油丈けで有つた。尤も教科書は貸給された。而も賄の内容を展べて見ると、朝晩は汁が出るのであるが、其の汁と云へば多量の汁下地へ、采の目より上手に切つた油揚豆腐を泳がして居るのだから、泥鰌抄ひの手業で、餘程上手にやらないと小杓子の中へ豆腐は一切も這入らない。其れへ晝からは皿が付く、皿の中にはおがん子ア顏の毛（眉毛）のやうな、塩鱒の切れつぱしで、其れは白砂糖を振掛けたかと怪まるゝ程、白かつた。其れは毎日繰返されるので、滋養物所の話ではない。其れに稀れに馳走と云へば、鮟鱇の共あえが出る。尤も鰊とか鰯のやうな、時の物は出るが、大方塩物で、是れも極少量で小鰯二尾なのであつた。其れで日頃此賄に對して不平が有つたのである。所が物價の變動も何も無いのに突然賄料の直上げと成つた。其れも材料の改良とでもあれば仕方ないが。内實は賄方の家庭の都合からで有ると云ふ事が判明したので、忽ち輿論で賄征伐の旗擧と成つたのである。尤も賄料は公費で幾等給與されて居るものか、敢て聞かないが、毎月食費の内から二三十錢



の餘分が出來て、其れは詰り、筆、墨、紙に充てられて居たのであるから、言はゞ各自の懐中藜口金庫へ差押が掛つたも同樣であつたから、騷ぐのも無理は無いと思ふ。特に此の旗擧の策戰計畫は、先づ便所の内へ廣告したのであつた。其文意は今日晩方〇〇先生の送別會で、職員一同濱町へ呑みに行つて幸ひ誰も居ないから、今日全校一致で賄征伐をやるのである云々と、あつたので、各室雀躍した。次いで激文と申合は廻つて來た。其の文言は漢文句調で、中には食盡き箸折れて然後罷む云々——。今日五時食事の報を聞いたら一室内を甲乙と分け、甲は食堂へ、乙は外出し、三十分にして乙は歸舍して食堂へ、甲は外出して三十分にして歸舍し、再び食堂へ出來得る限り之を操返すのである云々、とあつた。予輩が飯八杯も食したのは此時である。又一方賄方では飯を三回焚いて、猶不足してたんば色をきらして、送別會場へ急報したので、某短氣な職員は飛んで來たが、其の言動に一つ穩かで無い事が有つた。今ならば大問題に成るのかと思はれる。然し一方生徒の處分は控へて居るから默止する事に成つた。其れから事件の取調に掛つたけれども、無論全校生の輿論で一致して遣つたのだから、發頭人は勿論、可笑しい事には犯人も出ないので、遂に認定と云ふ事に成つた。然し廣きに渉つて多くは禁足位のもので有つたから意外に平穩に納まつた。是れは賄征伐の顚末で、確に手答は有つた。此の外に小奇談は幾等か有つたけれども書立る程の事は無いから、予の追憶談は是れで終結を告げる事にする。

明治二〇・三・高等科卒業　石井多作

## 學校及び寄宿舍の狀況

明治十六年乃至廿年頃には、本校は現今の赤十字社支部所在地にあり。校舍は二階建にして、一棟の内に教室、屋内體操場、職員室、事務室、當直室、寄宿舍等あり。理科室は東南側に、炊事場は北側にあり。附屬小學校は其側に隣接せり。理化學專門學校は當校に併置せられ、其生徒は師範生徒と同じく寄宿舍に收容せらる。此校は十八年頃廢止となれり。初校長は沖津醇先生なりしが、後本縣學務課長たりし小野恒剛氏兼任せらる。職員の重なる者を擧ぐれば、教育學には大井民吾先生、讀書には黑瀧儀任先生、小友謙三先生、小山内健三郎先生、修身には沖津醇先生、書方には小山内暉山先生、地理歷史には窪川先生、三浦千代次郎先生、對馬運作先生、理化學には加藤一先生、佐々木善次郎先生、數學には成田熊太郎先生、對馬運作先生、球算には沖津醇先生、圖畫には成田泰先生、體操には樋口亮

先生、折居松若先生等擔任せられたり。

## 教授及び訓練

教授法は教師に依て各特種なりしが、一般に教科書中心主義にして、教師親ら講讀をなすあり。生徒に講讀せしめ教師之を訂正するあり。教科書の重要なる部分を指定して之を記憶せしめ問答法を以て練習せしむるあり。數學の如きはその例題を說明し、應用問題は前日之を指定し、生徒をして當日教室に於て之を解答せしめ、之に依て平素の成績を見ることあり。理科に於ては教師自ら教科書を講讀し、或は實驗して生徒に示し、翌日其要點につき問答して、生徒の成績を見ることあり。宿題を下して解答せしめしことは自學自習に効果頗る見るべきものあり。

訓練に於ては教室内にて教師に對する敬愛の情を重じ、生徒をして教師の面前に於て修身談をなさしめ、之を批判し、時には教師親ら格言若しくは逸話を講談して、生徒に感動を與へたり。寄宿舍に在りては舍監其監督をなし、生徒の行動を觀察し、不逞なる者に對して之が訓誡をなし、尙改心せざるものに對しては相當の處罰を加へたり。

## 教科書又は教具の狀態

教科書は全部學校に於て備附け、之を生徒に貸し付くるものとす。而して教育には能勢榮氏教育學、改正教授術、學校管理法、心理學等あり。修身には小學定本、大學、論語、近思錄、讀書には石村氏國史略、十八史略、元明清史略、孟子、春秋左氏傳等、數學には算術（教師參考書）數理學（教師講話筆記）田中矢德氏代數教科書、スミス氏代數教科書、幾何學教科書（平面）地理歷史には定まれる教科書なし、日本史は國史略拔萃、東洋史は十八史畧及び元明清史略拔書、漢文の萬國史等あり。理化には無機化學筆記、有機化學書、生理提要、植物、礦物、動物教科書等あり。農業には農學全書あり。

理化機械は專門學校併置の爲相當に備へ付く。教師之を使用して生徒に見しむ。稀には生徒にも實驗せしめたり。人體解剖圖（人躰摸型、キンストレキ器）等をも備へ付く。地圖には陸奥地圖、日本地圖、萬國圖等あり。體操には啞鈴、棍棒、球竿、木銃等を備へ付け跳躍階段、轉回運動鐵棒、木馬等の施設あり。劍術柔術等の器具はなし。

## 學校行事の有樣

三大節及び祭日の儀式規定、修業證書授與式（年二回）卒業式規定あり。試驗は日課、學期（年二期）卒業の三種に分つ。夏季冬季二回の休業には寄宿生徒に歸鄕を命ず。寄宿舍に規定ありて起床、就寢、食事の時刻を定め、朝夕



點呼を行ふ。外出には名札掛替の制あり、而して外出の時間を定めり。生徒相互間には詩文の雜誌發行をなし、或は夜間言語練習會を行ひ、時には休日を利用して炮烙調練を行ふ。

## 生徒氣質及風習

當時の生徒は一般に剛健にして進取の氣力を有し、成功を期して止まざるの風あり。互に競うて勉學し、各自己の成績を擧ぐることを努む。朋輩相援け、己れの長所を以て他の短所を補はんと欲す。而して事の善惡に關せず協同一致して事をなさんとするの風習あり。彼の狐追事件及び賄方抗擊の如き是れなり。又地方的感情を抱きて、相排斥し喜しからざる傾向を有したり。南部人津輕人と稱ふる如き是れなり。

# 懷舊談

明治二〇・三・高等科卒業　故　今　力　太　郎

私の本校に在學したのは明治十六年の春から同二十年の春までであります。その頃の師範學校は今の赤十字社支部のところ、附屬小學校はその後方、寄宿舍はその西方にあり、今の巡査教習所卽ち當時の中學校寄宿舍とは十數間の空地を隔てゝゐました。

在學中に學制が頻りに改正せられた爲め、始めは中等科それから高等科、次に尋常科に編入せられ、卒業の時は矢張高等科で出されました、この高等科はたつた四回しか卒業生を出さないで總人員三十七八人ばかりしかなかつたのです。

當時の學風は一般に漢學を尊ぶ風がありまして、課業の讀みものは大抵漢書が多くありました。作文も三年級から漢文を作らせ、主要學科に置かれました、漢書の讀み物を擧ぐれば讀書（國語漢文）では文章軌範、孟子、春秋左氏傳、修身では小學定本、論語、近思錄、歷史では國史略、十八史略、元明清史略、萬國史記であります。就中左氏傳の如きは大冊物であり、近思錄の如きは仲々六つかしいもので、大分骨が折れました、當時漢學の受持には黑瀧儀任、沖津醇、小山內健三郎の諸先生がありました。

從つて漢詩の流行も中々盛なもので、何々詩會とか云ふものが幾つも出來、遊戯にも詩加留多が盛に流行し、唐詩選の五言七言の絕句は全部暗誦して居りました。

理學方面は理學士加藤先生から物理化學を、農學士佐々木先生から農學博物など敎はりました。また化學實驗室の

如きはチヤンと別棟に建てゝあつて、當時の學校としては立派な設備であつた樣です。それはその少し前まで縣立專門學校と云ふのが師範學校に併設せられ、文科と理科と對立して居たため、その餘慶が存してゐたものと思はれます。それで學生は理學的方面にも可なり力を注いだやうでありますが、その代り唱歌、體操、英語などと來ては殆どゼロ、圖畫の如きも誠に幼稚であつたやうです。

寄宿舍は疊を敷いた室を、自習室とも寢室ともなし至つてゆるやかな取締で、舍監と云つても一人位しかなし、大抵、生徒役員の舍長といふのに任せてありました。夫故隨分思ひ切つた惡戲も折々行はれましたが、其代り卑劣な行爲などに對しては、相互間の制裁が可成り强かつた樣であります。

ところが明治十九年に師範學校令の發布があり、青森縣尋常師範學校と改稱せられ、從來の職員は全部解任となり、生徒は全部退學となりました。實にこの時の英斷と云ふものは素晴しいものでありました。その時私共は高等科一級で、教生として附屬へ參つてゐた爲か（當時附屬の授業は全部教生の擔當故教生なければ附屬は全部閉鎖の外なかつたのであります）退學を免れたのであります。それに職員の任命までには大分日數を要したので、その間と云ふものは全校寂寥として、吾輩のクラス十七名の獨占に委したものであります。その時の愉快といふものは、今尙忘れることができません。

間もなく新に選拔したる四十名の入學生來り、寄宿舍に大改革を施して專ら軍隊式とせられました。生徒の中より選拔して副舍監、組長、什長、分隊長などの役員を置き、室は自習室と寢室とに分れ、兵式休操の大奬勵と相俟つて、規律嚴肅、號令嚴明、昔日の觀を止めない樣になりました、是が有名なる文部大臣森有禮の方針でありました。

課業の方にも英語、手工、唱歌など加り、學生の勉强も平等的になり、休操特に兵式休操は大臣親しく巡視して奬勵せられた程ですから、數年間は全盛時代であつたのであります。

かくして四年間の星霜は一瞬の內に過ぎました、當年の乳臭兒が今日殘軀を提げて聊か母校の洪恩に報いつゝあるを思へば、是亦人生の快とする所であります。

（明治四十二年十月、青灣寮誌ヨリ轉載ス）

明治二二・四・卒業　小坂甫三

老齡既ニ古稀ニ入リ貴部ノ期待ニ副フベク往時ヲ記述スルノ餘力ナキヲ遺憾トス聊カ其ノ追憶ノ一部ヲ十七文字ニ綴リテ左ニ笑覽ニ供シ候　敬具



但季題四季ニ涉リシト御送附ノ原稿用紙不足ノ爲其ノ使用ヲ見合セタルコトヲ御斷リ申置候　好文齋東園

校長小野恒剛先生ノ威容高風ヲ慕フ

一輪に庭の落付く牡丹かな

教頭大井民吾先生ノ開發教授法ニ奮起シテ

國體の美は此處にあり菊根分

黑瀧儀任先生ニ漢籍ノ蘊蓄ヲ傾聽シテ

其の奧は神のみ園や閑古鳥

森谷辰三先生ニ電流ノ實驗ヲ見セラレテ

陰陽の流を見たり天の川

蓄音機電話等ノ講釋ニ耳ヲ傾ケテ

我か聲も月に取次け時鳥

成田泰先生ニ初メテ圖畫ヲ教授セラレテ

梅書いて櫻の點を貰ひけり

傍嶋まね先生ニ唱歌ヲ教ヘラレ初メテオルガンノ音ヲ聞カサレテ

花の春鳴物入れてはやしけり

炎天下兵式體操ニ油ヲ取ラレテ

我影を踏む眞晝なり暑さなり

學期試驗ノ準備ニ夜中密カニ點火自習ノ競爭

連れを捲く道もありけり茸狩

試驗ノ都度同僚間ニ答案交換ノ惡流行アリ

莫逆の罪な仲なり花盜人

日曜祭日ノ外出ヲ無上ノ樂トセシ往時ヲ思ヒ浮ベテ

花一ト日餅屋漁りに疲れけり

イツモ歸舍門限ノ喇叭ニ狼狽シテ

暮告くる聲に寂あり秋の風

寄宿舍ノ疊座敷ナヲシ頃ハ

晝寢して顏に樂書せられけり

舍ト自習室寢室ノ區別セラレタル後ハ其整頓ニ一週一度ノ檢閱アリ

怠りの隈見られけり煤掃

與ヘラレタル舍寮ニ自治生活ヲ任サレテ

自給自足規律正しき田植哉

舍ノ週番室ト小使室ノ間ニ合圖ノ針金ヲ結ビ付ケテ

留守にして蜘蛛に取られな鳴子繩

食事改善ノ要求ニ舍生擧ツテ賄方一齊射擊ノ敢行

夜や寒し.嗟來の食に檄飛す

言語練習會ノ創立ニ役員爭奪ノ策動

田打勢南部津輕の小競り合

汽車自動車ナキ時代學校ノ往復ニ數日ヲ費シテ

道連れに蝶も出て來る日和哉

雪の日は毛布の旅を續けけり

卒業後ノ地位開拓ニ寧日ナシ

朧を得て蜀を望むや鳳

香よ味よ出來試さるゝ新酒哉

時ノ文部大臣森有禮閣下學校檢閲ノ講演ヲ拜聽シテ

廟堂の威儀嚴かに風薫る
兵式體操ノ活氣ヲ賞揚セラレ附屬教生ノ無氣力ヲ叱責セラレテ
雨に伸ひ風にも育つ青田哉
翌年二月十一日凶刃ニ殉セラレシト聞キテ
勳業の淺き憾みや紀元節

明治二二・四・卒業　菊池郡次郎

拜啓　愈御隆昌奉慶賀候陳者母校創立六拾周年祝賀式典記念號御發行ニ就テノ御仰越御同樣欽慶之至ニ不堪候顧レハ小生ハ明治二十二年三月、尋常師範第一次ノ卒業五十年前ノコト乃チ停年制アル現代旁々以テ記憶其ノモノカ疾クニ時効ニ罹リタル心地セラレ候

強テ申述フレハ小生ノ學級ハ學制改革ノ草創教科其ノモノ、洗錬日淺ク何レモ半端的ノ如クニ感セラレ候

只恩師各位ノ熱意ト眞面目トハ深ク腦裡ニ浸染于今感激罷在候御仰越ノ各事項ニ渉リ簡單ニ申セハ

一、學校及宿舍　今日ノ外觀ナシト雖其精神ト面目躍如タリシト思フ。

一、教授並訓練　主トシテ獨自ノ識見ニ基キ甚權威アリシ。

一、學事ノ行事　初メテ兵式ニ則リ、紀律、訓練、當時ノ面目ヲ一新シタリ。

一、生徒ノ氣質　主トシテ地方ノ俊良、氣位高カリシ。

一、教師及朋輩　熱心目眞面目トカ心肝ニ銘セルカ殊ニ小生ノ腦裡于今大井民吾先生ノ高風ト眞切トヲ欽慕措カス、又朋輩相排斥スルカ如キナカリシ。

以上謹テ紀念式典ノ祝辭ニ代ヘ度尙

當代ノ恩師各位ヲ始メ既往及現在ノ校長及職員各位ニ對シ深甚ノ敬慶ト感謝トヲ致候　敬具

明治二二・四・卒業　佐藤象一

## 一、歩兵第五聯隊の見學

我青森縣の師範學校の生徒として兵營の見學は生等を以て嚆矢とせん。森書記官は先導となり、小野校長の引率の許に聯隊長の案内によりて、歩兵第五聯隊を見學せり。銃器は勿論寢台に至るまで目新しかりき。此の後我々も銃を肩にし、寢台に起臥することとなり、凡べては兵式的の訓



練を受くることとなれり。

## 一、立食の饗應

銃を肩にし弘前方面に修學旅行して歸校すれば、校長より立食の饗應を受くることとなりたるも、其の食し方を知らず、生進みて校長に食し方の教を乞ふ、小野校長笑うて箸と皿とを取り大皿鉢より各一個づゝ皿に盛る、生徒小衆皆之れに倣ふ。

## 一、森文部大臣の臨校

森文部大臣は長らく文部省の御用係となり、教育上に一見識を有し、大臣となるや其抱負の實行に着手せり。一年我校に來臨し各學級の教授を視察し、終りて各教員及我々上級生を前にして批評及訓示を試みられたり。曰く今見し教授の一番善いものを言ひませうか。體操の教員。一番悪いものを言ひませうか。誰も聞きたくないであらう。これより人物の養成につきて話さん（筆記せされ）人物を養成するには修養を要し、修養の最善の方法は各自其短所を知りて之を矯正するにあり。故に校内に投書函を設け、其投書に依り各自の短所を知るを要す云々。

## 一、卒業證書

改正學校令によりて、尋常師範學校は勿論各小學校に於ても、卒業證書に人物優等、人物尋常、學力優等、學力尋常の四種の卒業證書を見るに至れり。然るに此の卒業證書は我々卒業生を以て初めとす。然り而して卒業生間に於ても人物優等の卒業證書を受くるものは異論なきも、然らざるものには不平を免れず。卒業證書授與の前日、在校生は我々卒業生に對し送別の會を開く。此の會に於て卒業生の一人しかも草案を手にし、大聲叱呼して曰く、我々卒業のものは小學校の兒童の人物査定の方針を受く。これより我々は本校人物査定の方針に從ひ、人物を査定せんか、必ず父兄の滿足する所とならん。諸君も人物査定につきて留意せられたい云々と述ぶるや、臨監の舍監の忌避に觸れ、其の草案は沒收せられ、翌朝某氏につき詮議の筋あり、卒業證書授與せられざる旨掲示せらる。茲に於て我々卒業生は委員を擧げ、我々と同時に卒業證書授與方を時の幹事により校長に陳情せり。然るに詮議なり難しとの返答に及べり。依りて幹事に再度陳情し、苦し貴幹事に依り校長は此の陳情を受諾せられずば、我々は直接校長に面會を求めんと。この時開式の時刻せまり、遂に擧式のラッパは吹奏せらる。所謂人物優等の委員は幹事室に止まるを得ず。獨り人物尋常なるもの平然として幹事室にありて、校長の許諾を受く。生舍内に一人殘れる某氏を伴ひ、式場に出で、同時に卒業證書を受けたり。

## 一、大井民吾教頭

所謂開發教授なるものを初めて我々に教授せられたるは大井民吾先生なりき。然るに開發教授の眞意義を失し、笑止すべき教授をしたるは我輩なりき。尋常小學一學年用の讀本に、山は白し雪ふりしならんといふ句ありたり。生はこれを開發教授法により教授し、却て兒童をしてならんなる句を會得せしめ得ずして時間を空費せり。大井先生今年八十四才の高齢にして、青森市柳町に老後を樂みつゝあり。

## 一、農業實習場

尋常師範學校となりて、農業、手工、英語の三科目は正科となり、校内に手工教室、校外には農場の設備あり。今の知事官舍の東隣は農場にてありき。農業科受持教員は教頭農學士佐々木善次郎先生なり。

明治二二・四・卒業　上田永二郎

茲ニ母校創立六十年記念誌編纂ニ當リ何カ書ク樣ニトノ事デ順序モナク思ヒ出スマヽニ書ク事ニシタ、何ニセ卒業シテ五十年ニ垂ントスル今日自ラ記憶モ薄ライデキルカラ其ノ邊ハ豫メ御諒承ヲ乞フ。

小生ノ師範學校入學ハ明治十八年デ、當時ノ師範學校ハ二年制ノ中等師範、四年制ノ高等師範デアツタガ、中途ニ尋常師範學校（四年制）ニ變更サレ多數ノ生徒ノ中カラ學業、體格ノ試驗ヲ經テ二十名ヲ選拔入學ヲ許可セラレ、學課モ改正サレ唱歌、手工、執銃、柔軟體操等モ課セラレタ。

學校長ハ小野恒剛先生、佐々木善次郎先生、大井民吾先生ヲ始メ、中等師範、高等師範學校出身ノ教官等熱心ニ教育セラレタノデアツタ。

唱歌ハ音樂學校出身ノ傍島まね先生ニヨリ始メテ教授サレ、手工ハ木工デ森谷先生ト田中某ト云フ大工ヲ助手トシテ授業ニ當リ、體操ハ現役軍人及軍人出ノ教官ニ依ツテ課セラレタ。

小生ハ郡立中學校ヲ卒業後入學シタ爲メカ學課ハ比較的困難デハナカツタガ唱歌、手工、體操等ニハ頗ル苦心シタ樣ニ記憶シテ居ル。

當時モ體育ニハ非常ニ重キヲ置キ、各學期末ノ休暇前後ニハ醫師ニ依リ嚴重ナル體格檢査ガ行ハレ、專ラ保健ニ留意セラレタ樣デアツタ。

當時本縣最初ノ運動會ハ本校ニ依ツテ行ハレ、縣下ノ大校長連ハ態々來觀セラル、等盛大ヲ極メタモノデアツタ、



ソノ時本校體操ノ先生ガ東京カラ「ベースボール」（今ノ野球）ヲ持ツテ來ラレテ盛ニ校庭デ行ハレタモノダガ、現今ノ完備シタ野球ニ比較シテハ、實ニ滑稽ト言ハウカ、乱暴ト言ハウカ、此ノ進歩ノ跡ヲ顧テ、轉々今昔ノ感ニ堪エヌモノガアル、當時寄宿寮ニ於テハ現今ノ通リ、自修室ト寢室トニ分ケラレテ居ツタガ、起居ハ總テ軍隊式デ、寢具（毛布八枚）ハ貸與サレ、教官ハ軍隊出身ノ方ト、外ニ軍隊カラ派遣サレタ、現役軍人ノ下士官ニヨツテ、指導セラレ起床、就寢、消燈其他授業ノ終始等ニ至ルマデ、總テノ號音ハ「ラツパ」ヲ以テ行ハレタノデアツタ、服裝ハ幾分「モダーン」デアツタ樣ニ思ハレタ、帽子ハ所謂「ワツパ」帽デ頭髪ハ分髪ガ多カツタ、學校カラ給與セラレルモノハ食費ハ勿論、筆墨紙、洋服、カラー、靴、靴ノ修繕費、入浴料ニ至ルマデ支給ヲ受ケ、其他一週間十錢ノ小遣錢モ給セラレ、家庭カラ送金ヲ仰グト云フコトハ殆ンド無カツタ、尙如何ナルモノカ全校生徒中長男ガ多ク、級ノ五分ノ四位ヲ占メテ居タコトハ妙ナ現象デアツタ。往時ハ今ニ比較シテ交通ノ便甚ダ悪ク、隨ツテ中央ノ名士ニ接スル機會モ少ク、在學中印象ニ殘ツテ居ル名士中ニハ、時ノ文部大臣森有禮氏、陸軍大臣山縣有朋氏、大山巖氏等デ、其ノ感激モ亦一入デアツタ、卒業ノ前日卽チ二月十一日朝、前述ノ森文部大臣ハ凶漢西野文太郎ノタメ暗殺セラレタ由學校ニ入電ガアツタ、面ノアタリ其ノ風聲ニ接シテ、幾バクモナク此ノ凶變ニ接シタノデ、其悲シミモ特ニ深カツタコトハ今尙ホアリ〳〵ト記憶ニ浮ンデヰル。

學校「ストライキ」等ト云フ無茶ナコトモ矢張一、二當時ノ記憶ニ殘ツテ居ルモノガアル、其一ツハ或ル教育講習開催中ノ出來事デ、當時小生等ノ實地授業ト次學年ノ實地授業ノ異ナル點ニツキ、某講習生ヨリ教育科擔任ノ某先生ニ對シ、附屬ノ授業ハ之レト相違セリト云ヒシニ對シ、先生ハ今ノ教生ハ自分ノ教ヘタモノデナイカラ、自分ノ關シタコトデ無イト云フ樣ナ、マコトニ不親切ニ突放シタノデ同期生結束シテ、排斥運動ヲ始メ、其間種々ナ感情モ加ハツテ勢ヒ何所マデ進展スルカ一寸見當モ付カナカツタガ、時ノ校長ハ今暫ク事實調査ノ上善處スルカラト、諭ストコロガアツタノデ其マヽ、有耶無耶ノ中ニ時日ヲ經過シ、自然解決ヲ見タト云フ至ツテ罪ノ無イ事件デアツタ。今一ツハ賄進擊ト云ツテ賄方ヲ苦メル方法デ、之レ又餘リ悪質ノモノデナイガ、賄方及學校當局ニトツテハ相當ノ悪戯ト認メタラシク、此日小生ハ友人中村健次郎、寺田辰三等ト野内方面ヘ散歩シ不在中ナルニモ拘ラズ、主謀者ヨリハ輕ルカツタガヤハリ罪ニ處分セラレタノデ、前記友人ノ二君ガ小生ノ爲メ極力「アリバイ」ヲ申立テ、學校ノ不法ヲ糺彈シタガ聽キ入レラレズ、學校生活中最モ記憶ニ殘ル痛時デアツタ、其主謀者トハ日常交際深カツタノデ、自然誤解サレタモノト思ハレル、又小生等卒業ニ當リ、在校生主催トナ

ツテ送別會ヲ開イテ呉レタ、席上卒業生ノ一人某君ハ、謝辞ヲ述ブルニ方ツテ學校當局ノ攻擊ヲ大イニ之レ努メタ、臨席ノ先生ノ激怒ヲ買ヒ、同君ニ對シテハ卒業証書ノ交付ヲ見合ハスト迄ニナツタ、茲ニ於テ同期生一同然ラバ我々卒業生全部ハ、卒業式場ヘハ絶對參列セヌコトニ申合セ、最惡ノ場合モ覺悟シテ、諸先生等ノ勸告モ頑トシテ聽キ入レズ、結果頗ル强固ナモノデアツタ、此時既ニ知事ヤ其他重ナル來賓モ續々臨席セラレ、開式ノ時刻モ刻々ト迫リ、コヽニ學校側モ漸ク狼狽ノ色ヲ爲シ、結局同君ニ對シテハ假卒業証書ヲ交付スルト迄ニ讓歩サレ、兎ニ角卒業式ハ紛擾ノ中ニモ、ドーヤラ無事ニ終ヘタノデアツタ、今ニシテ之等ヲ追想スレバ甚ダ滑稽ノ極ミデアルガ、當時弱年ノ小生等ハ頗ル眞面目デアツタ。

汲メドモ盡キヌ思出モ、或ハ淡ク、或ハ濃ク、共ニ學ビシ老友ニ大方ハ死別シ、小生練兵町ニ居ヲ占メ、朝ニタニ甲田ノ聖峯ヲ仰ギ、合浦ノ濱風ニ時折ハ凉ヲ追ヒ、老ヲ養ヒ母校ノ智育、德育、體育ニ益々發展スル樣ヲ目近ニ見、或ハ聽キ、聖恩ニ感ジ日本國民トシテ、感謝ノ生活ヲ續ケテキル次第デアル、時ハ過ギ幾世ノ星ハ移リ、學ブ人ハ變ツテモ、同ジ理想ノ流レヲ汲ム卒業生、在校生諸兄諸君、散策ノ折モアラバ老生ノ茅門ヲ訪ネラレンコトヲ希望シ、併セテ彌榮ヘン母校青森縣師範學校ノ洋々タル、前途マスノ〳〵隆昌多幸ナラムコトヲ祈念シ擱筆ス。

## 學校植物園

明治二二・一二・卒業　濱館藤雄

私共の師範在學當時の思ひ出として、別に申し上ぐる程の事もありませんが、唯一つ今に印象に殘つてゐるのは、學校植物園であります。私共の農業と植物との、御受持は佐々木善次郎先生でありました、先生は植物學の御造詣深く、其上教授には非常に御熱心でありまして、生徒等のために植物園を造つてくれました。其時の師範學校は今の赤十字支部のあるところで、植物園は今の度量衡檢査所のあたりでありましたが、後で今の新町小學校の裏の運動場のところに移されました。園は花壇式分科配列で、此邊にある普通植物は大概植ゑられてありました、私共は晩飯後此の植物園の中を逍遙しながら、植ゑられてある植物と名札とを見くらべて、歩くのを日課の樣にして居りましたが、何時の間にかそこに植ゑられてある、植物の名稱ばかりでなく、其形態や生態までも、知らず識らずの間に覺えてしまひました。今でも目を閉ぢて考へて見ると、當時の花壇の有樣がありありと見える樣な氣がします。

百聞一見に如かずとは、よく言うた格言であります。都會の子供は田舎の子供に比較すれば、其常識の發達せる點



に於て、迚も比べものになりませんが、只一つ田舎の子供に劣つて居る點は、動植物に關する智識であります、夫れは言ふまでもなく、田舎の子供は常に山野を跋渉して、動植物に接する機會が多いからでないでせうか。今日は學校の敷地内に植物園などを、設けてもらひたいと言うたところで、到底望むことが出來ますまいが、聞くところによれば、我が青森市では、市内各所に小公園を設けられるさうですが、夫れは誠に時宜に適した企てであると思つて居ります。序に若し出來得るならば、東京市に上野動物園と、小石川植物園とがある如く、公園の一部に小植物園を設けて本市兒童教育の一助とせらるゝならば、此上ない仕合せと思つて居ります。餘談に渉つて、誠に申譯がありませんが、不斷に思つてゐることなので、知らず識らず書かさつてしまひました、あしからず。

## 約五拾年前

明治二二・一二・卒業　坂本紋作

私の入學したのは明治十九年の春でした。其前の年あたり迄は、各郡に師範入學生を勸誘員とも云ふ樣な、役人が出張して、入學を勸め（各郡に初等中學校即ち今の高等小學校に似たものがありましたから）漸く募集人員を纏めたらしい。私等の入學試驗を受けたあたりから、競走が始つた樣な譯です。なんでも四十人に對し受驗者は八十人ばかりあつたと思ひます。

其當時の校舍は、今の赤十字社の所で、東は新町小學校（今の市役所）南は中學校（後弘前に移轉）縣廳、警察署抔今と同じです。勿論寄宿舍がありましたが、各自持參の夜具で着物も無論羽織袴でした。寄宿舍は五所川原の中學校で、餘程慣れたもんだから、何も窮屈を感じなかつた。唯入學一週間目の就寢の際自分の布團の上で逆立の稽古をしてゐたのを、小山内先生といふ舍監に見つけられ、舍監室に呼ばれて大變油を絞られました。又私等の寄宿舍に既卒業生で未だ任地のきまらない人々が三四人居て、毎晩の樣に大きなおこし（菓子）を喰つて吾等に罪を造らせた、或晩彼等の一寸不在を伺ひ、拳で其おこしを壞はし、夢中で之を喰つたら御飯のコビであつたので大笑しました（賄方より徵發）。

十九年の夏、其當時の初等師範學校（各郡にありました）師範學校中等科、高等科も廢止となつて、職員も生徒もなしと云ふ事になりました。小野校長曰く、私は校長でも何でもないが、便宜上一言する、今回學校解散職員もなく生徒もなし、八月末迄に出校通知があつたら御出でなさ

い、通知のない方は夫れつきりとの事、併し乍ら全部だから大變元氣で歸鄕しました。さあ八月二十日過ぎになると、甲乙丙丁互に通知があつたか〳〵と往來頻繁でした。私等も五所川原の齊藤傳左衛門を中心として、坂本兌、對馬稱美、鈴木敏吉等往復しました。

九月より尋常師範學校が生れ、山内元八君等は二年生で吾等は一年生でした。其外翌年卒業すべき舊師範の高等科の殘りが一學級ありました。工藤隆、今力太郎の組です。

前掲解散の爲、四年、三年、二年、一年何れも半數位自然退學となつた次第で、學制の改革上止むを得ない次第です。（小學校も改つて尋常小學校、簡易小學校三年で授業料を要せぬものとなつた筈です）併し上級の退學者には訓導の資格を與へたさうです。變革の爲私等は私等より一年早く入學したものと混合した學級でした。

寄宿舍は今と同じで、寢台軍隊式となりました。體操を主として訓練された樣に思はれます。今でも當時の竹内體操先生を忘れることがありません。執銃、柔軟體操などはほんたうに嚴硬體操で、五聯隊から軍曹が來て教へたものです。晩餐後校庭へ出て號令などを稽古したものです。

教授は隨分乱暴なもので、私の樣な頭の悪いものにはなか〳〵解り悪くかつたです。算術の如きは最もひどく「先生割れません」などゝ云へば「割れないなら斧を持つて來て割れ」と云ふ樣な案配で、愈教へるとなれば、生徒を後ろに一人黑板に向つてコツ〳〵と解式を書く樣な譯で、私の樣な凡くらでは容易に解りませんでした。三年生の時からでしたか、歸一法の算術の雜誌が發行されて、其御蔭で少々解つた樣な次第です。

凡ての學科は教科書がなく、皆筆記でした。洋紙でも半紙でも、筆、墨、鉛筆、ペン、凡て學校から給與されたから、何も不自由がありませんでした。ペン先、洋紙抔は卒業後も澤山殘つて、自分も使ひ、生徒にも呉れました。又物品給與ばかりでなく、夏休、冬休の食費は御錢で呉れましたので旅行するのには大變よかつた。併し教育と唱歌と英語は教科書がありました。教育はジョホノツト、英語はロングマン、唱歌は小學唱歌集でした。

教具も何もなかつたが、手工の道具だけは一通り各自に渡しました、呉れたのではありません。オルガンも壹個ありました。東奥義塾のものだとの事でした。其樂器で傍鳴先生からヒフミヨイムナヒ——抔と稽古して唱歌を習ひましたが、恥かしくつて聲が出ませんでした（振へて）たまによく出來たと思つたら、坂本さんのは盆唄のふしがまじつて抔と、ひやかされたものです。

年中行事として別段なかつたが、在學中公園で運動會が一回ありました。三年生の時、大舘、小坂方面へ修學旅行しました。卒業の年弘前、黑石へ一回、嶽の湯を經鰺ケ澤、五所川原へ一回修學旅行したきりです。



思ひ起す。私等三年生の時、有名なる文部大臣が參りまして、各教室、寢室、食堂、附屬小學校（私等は執銃小隊教練）全部隈なく見終り、晝食後職員生徒全部を一堂に集め、赤い顏して（一盃飲んだのでせう）附屬の授業がクダ〳〵しいの、食堂に缺けた茶碗が隨分ある、ブリキの茶碗にせよ抔と、何も彼も味噌糞に言はれた（時々テイブルを叩いて）、然るに最後に體操は頗る良かつた。「良かつたネ、日下部君」と、當時有名な教育雜誌記者を顧みて證明を求めた、時に體操の竹内先生ホペタの筋肉運動はげしく破れるのでないかと思ひました。其晩竹内先生舍監でしたが御機嫌斜ならずで寛大々々。

夫からヤレ北海道、ヤレ秋田、ヤレ山形抔と視察者が折々來て、又も體操の教練のと、ウルサイ程注文されました。四年の時弘前へ往つた時も、銃劍術體操をやらせられました（公園で）。

何しろ卒業後五十年に間近いので、當時の同級生中、弘前の三上虎雄、柴田熊太郎、齊藤典治（生死不明）平出將太郎、青森の窪田春吉、三戸の北村芳太郎、北郡の濱舘藤雄、鈴木敏吉及僕位存命で、十八名中大部分死亡した樣な譯で、何も思出がなくなりました。

明治二二・一二・卒業　三上虎雄

拜復　時下益々御清穆奉賀候陳者今回母校創立六十周年の記念雜誌御編輯の企圖に付小生に當時在學中の事項を綴り送附可致旨御下命に相成候事御快諾可申上筈に候得共健忘性の上小生に取りては四十七年前の事故に相當忘却致し記憶に存するものも甚だ少く當時を追懷して誤りなきかと相談する學友もなく誤れる記事を出しても却つて不都合を來すに付寧ろ御地の濱舘藤太郎、窪田春吉の兩君に御依賴致さるれば兩君御相談の上なれば正確なる記事を得らるべくと存じ候に付兩君に御依賴遊さるゝ樣御取計被成下度御願申上候　敬具

六月二十六日　弘前市在府町

明治二二・一二・卒業　鈴木敏吉

立食

本年は母校創立六十周年に當るので、紀念誌を發行せらるゝとのこと、至極結構なる御計畫である。夫れにつき在校當時の追憶談を寄せられよとの事であるが、五十年に垂

んとする昔、母校としては上古史時代で、今日では其の記憶も消え失せなんとしてゐるのであるが、永久に頭腦に刻まれた校長先生の、海山も啻ならぬ慈愛の籠つた訓育を、感謝せずには居られないので、茲に不束ながら筆を執ることゝした次第である。此の記事は先輩、同輩よりも寄書があるだらうと想はれる。何れなりともよしなに御採擇して、斯の校長の慈愛の、御眞心を末永く、世人殊に母校に育まるゝ士に味はせたい。併しながら詳細のことは前述の通りであるから、彼か此かと暗中摸索の狀態で僅かに左の骨子を纒めた次第である。

時は明治二十年か二十一年の秋の頃かと思ふ。我々三四年生は兵式訓練法を、採用してからの第二回の行軍で弘前に來た。武裝しての徒歩である。しかのみならず、其の日は小雨があつて疲勞も可なりであつた。途中浪岡に一泊して翌日黃昏頃弘前に着いた。やれ嬉しやなと思うたが、宿舍に着かず。今の公園二の丸下乘橋の傍であつたか、又今の師團長官舍の建てられた芝生であつたかの所に引率された。何の爲めだらうと、暫時休んでゐると、市內の人々が數十人も集まつて來た。引率先生から只今弘前の敎育關係の方々より、兵式體操を見たいからと云ふ交渉があつた。併し諸子も連日の疲れ故斷はつたが、是非にとの請ひを止むなく容れたから、一つ我慢せよとの事に、叛くも本意ない事として銃を持つた、重ね號令の體操を數分間やつた。

當時は軍隊で盛にこの體操をやつてゐたものだが、軍人外の人は滅多に見ることはなかつたものであるから、參觀者から非常の禮讃を浴せられた。此の往復四日の行軍で何れも綿の如く疲勞し、足痛せぬ人は幾人あつたでせう。途中歩みつゝ眠れるもあり。休憩中に鼾をかく人もあつた。然し一人の落伍者もなかつたと記憶してゐる。翌日は慰勞休で、湯へ行く者、寢てゐる者など思ひ〳〵であつた。正午頃舍監から體操場へ集まれといふ命令が下つた。痛い足を引きづつて、該所へ行つたら、小野恒剛校長先生を初め、各先生が列座してゐられた。場の中央には二抱もあらうと思はるゝ皿鉢や、井に色々な鮨を山の樣に盛り上げ、傍に澤山の小皿や箸を添へてあつた。併し一つの腰掛もない。一同整列すると校長先生例の溫雅なる態度で徐ろに開會の辭を述べられて、曰く今回の行軍大に御苦勞でした、無事な歸校相互に悅ばしい、就ては聊か祝意と慰勞を兼ね、茲に立食の席を設けた次第である。尙一言添へたい事は、近頃東京では立食といふものがある。之れからだん〳〵地方へも及ぶ事であらう、諸子は地方開拓の先覺者であれば、こんな事も知つておく必要があると思ふ。と言ひつゝ、校長先生始め各先生方が、先づ範を示すが如く、皿と箸を取り、夫々の鮨を盛り取られた、我々も亦夫れに眞似て御馳走を頂いた。此の時までは誰も立食と云ふ事を耳にしなかつた。校長先生の生徒を愛しむ眞情には一同感謝の涙を禁じ得なかつた。



## 二、洋　食

明治二十年か二十一年の頃である。時の文部大臣森有禮閣下は、敎育視察として、我が母校に御出になられた。其時各級では、夫々授業の狀態を御覽に入れた。我が級では兵式體操を演つた處が、閣下より其の場に於て、賞讃の御辭を頂いた事は、我等在校中の天狗の一ッであつた。此の事は何時かの同窓會誌に、記載された事があつたから省略する。今日なら大臣歡迎會は盛大に行はれるであらうが、其の時は學校職員丈けで、校長室に（金森であつたらう）西洋料理を取り寄せて、晝食を差し上げた。大臣も氣取るといふ事は無かつたものと見えて、一杯聞し召され、赭顏になられてあつた。午後全校生徒を體操場に集め、一場の訓示をなされた。內容は忘れたが、威重、從順、整正（ホンタイ）といふ三綱目であつた樣記憶してゐる。其の御話の內に、本大（シン）臣は云々と云はれた。今まではダイジンと濁つた音であつたがタイシンと清音で發音することが一時校內に流行した。之れは改めて言ふ程の事でもないが、序に附記する。此の頃は洋食と言ふことは紳士社會はいざ知らず、一般には殆んど無かつた樣である。其の後職員間では、一週一回職員室に於て、洋食會を催された（晝食）。其の頃或る日の事、舍監室へ獻立帳を持つて行つた事があつた。舍監は室に居ないで、校長室に居られた。そこへ行くと、校長先生は、君は洋食を食べた事があるか、と御聞きになられたから、否と御答した。すると先生は、傍に居られた伴小四郎さんと言はるゝ書記の方に向つて、「洋食も段々流行つて來るから、洋食を加味する必要があるネー」と言はれた。其の後賄方に命ぜられたものか、洋食風の副食が加へられた。其の副食の內容は兎も角も、我々の常識養成に心を配られた御誠意には感鳴に堪えざる次第である。敎育に携はる我等としては、最も服膺すべき鑑であらうと思ふ。

## 三、竹　篦（ヘイ）

何年の頃で、又如何なる動機から始まつたものか、今では五里霧中であるが、兎に角竹篦といふ（指を他の指で反して彈く）「蠻的ながら無邪氣な遊戯があつた。自由時間には、自室或は他室に遠征して試合を挑むことが屢あつた。今日の選手とも稱すべき、豪の武士が居た。高橋君、山平君、中里君、坂紋君、齋典君等はそれであつたと記憶して居る。竹刀否指刀の名稱も振つてゐる。親指を神代指刀、人差指を指南指刀、中指を大指刀、藥指を藥研指刀、小指を小太刀と名附けてあつた。又其の劍士により、得手勝手があつて、指南刀の使ひ手もあれば、藥研刀の使ひ手もあ

つて、皆夫々に異なつてゐる。夕食後あたり、或る劍士から一本行かうかと挑む、他の劍士あこいと應じて、鎬を削り、否指に灰をつけて滑らぬ準備をして、パンと打ち込む、強いのにやられると、掌でもビリ／＼と痛む、況んや手の甲にやられると、腫れ上がることが往々にあつた。或る時は武器なる指刀を定めて、試合ふこともあり、又銘々得意の指刀を以てすることもあつた。今から考ふると詰らん樣であるが、當時は冬の遊戯としては、雪合戰位は闘の山であつたから、こんな蠻的な遊戯も時にとつての興であらう。今やスキーとかスケートとか、樣々の新運動が勃興して來たことを思へば、今昔の感に堪えぬ處から、往時を偲ぶ料にと貴紙を汚す次第である。

# 故森文部大臣の事

明治二二・一二・卒業　故　張間多聞

師範學校の過去を追想する時には、故森文部大臣の事は何うしても書かずに居られない。一體私共は明治十九年一月に入學し、高等師範科四年後期に、編入されたのであつた。然るに七月に至り後期を了ると、制度がすつかり改正になつて、從來の師範學校は廢校となり、更めて尋常師範學校一學年に編入せられた。是が卽ち有名な故森文相の大改革なのだ。何ういふ樣に改革されたかと云ふと、新校則では一切通學といふことを許さず、全部寄宿舍に入れることになつた。全部と云つても一學級の定員が二十名で、四學級だから八十名に過ぎない。又從來羽織袴であつたのが洋服着用となつて、全く當時の兵卒其のまま。從來の疊敷は除かれて椅子、卓子、寢台と變り、寢室、自習室と分けられた。又寄宿舍內の人員の編成も軍隊其のまゝで、全體を一中隊として、中隊長は舍監之に當り、又三小隊に分けて、各小隊長があり、一小隊を更に左右半小隊に分けて、半小隊長則ち什長があり、半小隊を更に二つに分けて分隊があり、分隊長則ち伍長があつた。小隊長以下分隊長迄は主として四年生が當つた。外出時間なども仲々嚴しくて一分時と雖も遲れると直ぐ始末書を取られる。それが三度目になると禁足と云つた樣な始末であつた。帽子の徽章が曲つて居ても舍監に呼びつけられ、上着のホックが一つ外れて居てもお目玉頂戴と言つた樣な譯。上長と話すには舍監の先生には勿論、小隊長、什長、伍長に對しても直立不動の姿勢を取らねばならぬ。長上の命とあれば如何なる命と雖も服從で、若し不服があつても一旦服從の上改めて申出でよと言ふのである。

夫から兵式教練などは仲々嚴重で、寧ろ嚴を通り越して



酷と言ふ程であつた。何しろ銃を左右の手に一挺づつ持たされて前後左右に動かすのであつた。同じ動作を三回やらされるともう動かなくなる。すると陸軍から廻されて居る現役軍曹が二名宛やつて來た時代であるから、我々を視ること兵卒の如く、有らん限りの聲張上げて、「二つの睾丸を持つてゐる者がそんな事でどうなるか」と怒鳴り付ける。偶には背中をどやし付ける。この人格を無視した横暴振りには誰も彼も憤慨せぬ者はなかつた。恐らく常時の全國の師範生は擧つてさうであつたらうと思ふ。されば明治二十一年に森文相が親ら視察に來て職員と我々生徒とを前にして、恰も叱りつける樣な演說を聞かされた時には如何に傲慢不遜な者であるかと感じさせられた。

然るに明治三十三年に台灣で學務課長木村匡氏に逢つたが、同氏は森氏の秘書官の一人であつたので、この師範制度改革の消息を聞くことが出來た。次官局長の反對をも押しきつてこの改革をなした所以は、主意が教育その物のみではなくて國家の最高政策の實現に在つたのである、多年の苦い經驗からかくするより外に道がなかつたのである。故に教育の純理論の上からは非議すべき點も少くないが、憂國の至情學者の理論など顧る暇がなかつたのである。

嗚呼歷代の文相の中彼程に國民教育、師範教育に重きを置いた人が他にあつたであらうか、大臣の東北視察の頃は塩釜以北には鐵道がなかつたのである、それにも不拘殆ど草鞋ばきでやつて來たのである。是を思ふ時に我々を慨嘆りつけた眞意が分つたのである。嗚呼是程の熱誠憂國の士は何處にあるであらうか、思へば我々の大恩人である。私は一生の間に是非とも故森文相の墓に御詣りして自己の不明を詫び感謝を捧げたいと思つてゐる。

——五十年記念號ヨリ節錄シテ轉載ス——

明治二五・三・卒業　鈴木通孝

拜復　豫テ創立六十年記念事業ノ件ニツキ追憶談御答申ス樣御申込被下候處餘リ年數ヲ經テ殆ント忘却仕候ヘ共四十餘年前ヲ追懷スルニ

明治十九年森有禮交部大臣ニ任命セラレ、學制ヲ改革シ教育ハ人物養成ニ在リトシ、先ツ師範學校ヲ改正シ教育家ヲ正ニ大人物ニシテ、有用ノ人物ヲ養成ストノ理想ヲ以テ人物標準、人物査定等、當時ヤカマシキ問題ニシテ、熱心ナルペスタロツチー諸氏ノ論議ノ燒點ナリシヲ想起ス、其方法トシテ三質ト稱シ其標準ヲ定メラレタリ、曰ク規律、曰ク整頓、曰ク從順、頗ル面白可笑コトニ候

又當時寄宿舍ノ狀況ハ當時ノ一端ヲ知ルニ足ル寄宿舍一ツトヤ節ヲ述ベテ一粲ニ供セントス

一ツトヤ一度校制改まり／＼
　舍内の整頓嚴しい／＼
二ツトヤふるき鐵砲とさび劍は
　兵式體操に使ふ品／＼
三ツトヤ見るもなか／＼いやなるは
　厠の隣りの食堂よ／＼
四ツトヤ夜の七時は歸舍門限
　一足遲るも始末書／＼
五ツトヤ鰮に鯖やきライスカレー
　葱汁菜漬で日を暮らす／＼
六ツトヤ無類の馳走と言ふべきは
　日曜土曜の生卵／＼
七ツトヤ何より規律は第一よ／＼
　規律を乱すは不人物／＼
八ツトヤやたらに掃除はするものよ／＼
　土台は古びし校舍なり／＼
九ツトヤ小倉の洋服只一つ／＼
　外に衣替はあらばこそ／＼
十トヤ十は十まで束縛の／＼
　身なりし吾等ぞ悲しけれ／＼

# 回顧斷片

明治二六・三・卒業　今省三

本年は母校創立以來六十周年、誠に慶賀の至りであります。抑々現時に於ける縣文化の進展は、我が母校の貢献に負ふ所頗る多きは、言を俟たいなのであります。私は今母校の過去六十年の光輝ある歴史を回想し、欣懐措く能はざるを覺ゆるのであます。而して今後に於ける時代の進運と、關係者各位の撓まざる努力は、必ずや校運の隆昌を將來し、益々縣文化に寄與することの大なるを信ずるのであります。我が同窓會はこの機會に於て、記念大會を催ふす外計畫せる數々の記念事業、並に母校雜誌部の記念誌編纂など、何れも機宜に適し且つ頗る有意義のものであります。從つて該事業の圓滿なる遂行を衷心より切望する次第であります。

× ×

さて私の卒業は明治二十六年で、今から四十四年前のことです。在學當時を回顧すれば、凡ては隔世の感個々の記憶は稍々朦朧としてゐます。今その朦朧たる記憶を辿り心に浮んだまゝ、系統も順序もなく左の數項を申上げ、舊き母校の當時を追想して見ます。

## 一、不時點呼

私は明治二十二年九月補缺として入學し、間もないしかも本入學も未だ許可されなかつた、或る夜中のことです。オイ／＼とゆり起され、熟睡から眼を醒まし驚きの眼をみはつた。「ランタルン」（提燈）を提げた舍監先生と週番の組長とが、枕邊に屹立してあつた。何事か起つたのであると思ひ、不安と恐怖に襲はれ胸はどき／＼した。何ぞ知らんこの夜不時點呼が行はれ、寢込んだ私は遂に不參加の反則者となつたのである。しかし單なる熟睡の爲めとあつて、處罰されなかつたのみか全然不問に終つた。私は舍監先生のこの寛大な處置に對し、衷心より深く感謝した。

## 二、夜中の顚落

顚落といふも二階又は階段から顚落したのではない。私は新入學のほや／＼のある晩のことである、夜中異樣な響きに眼を醒ました。何事ならんと眞闇な寢室に耳を澄ました、響きは私の寢台の右側に起つたのである、A君が寢ざうが惡くて寢台からころげ落ちたのである。怪我はせなかつたが痛い／＼と苦笑しつゝ、更めて寢台に匐ひあがり再び眠についた。翌朝このことが舍内に傳はり、見舞にきた學友もあつた、A君はテレて苦笑を續けてをつた。

## 三、修學旅行

明治二十三年第五回内國博覽會が東京に開催された。四月初めの新入學生の入舍期日を延期し、二學年以上總員六十餘名東京へ修學旅行した。汽車のない時のことである、確か四月三日霏々たる雪の早朝、「ランドセル」を負ひ、草鞋に足をかため、隊伍堂々校門を出た。雪はいよ／＼降り積り、夕方小湊についた頃には、かなりの積雪で道路は泥濘を極めた。それより九日目岩手縣一の關に着いた。その間弱脚のため五、六の落伍者もあつた。私もその弱足者の一人で、たゞならぬ足痛に惱まされたが、辛くも落伍の浮目を免れた。

一の關より早朝北上川を大傳馬船にて下り、夕刻河口野蒜についた。野蒜塩釜間の海上は小蒸汽船の通ひある筈なのに、生憎同汽船の船長不幸の爲め休航中であつた。止むなく數艘の漁船を艤し野蒜を出帆した。軍歌や唱歌で何れも大元氣であつたが、松島附近通航の頃は日全く沒し、風波漸く強く激浪舷を擊つて潮水飛沫をあげ、船の動搖甚だしく、嘔吐するあり呻吟するあり、僚船互に見失ひ難航に難航を續け、夜の十二時相前後して漸く塩釜港に入り、い

づれも蘇生の思をしたのである。翌早朝塩釜驛にて所謂岡蒸汽に初見參し、大なる好奇心を以て乘車し、車中囂々として東京へと急いだのである。當時の色々な出來ごとや感想は、拙ない私の筆にはつくし難いのである。東京滯在約一週間餘り、各種の見學はいふまでもないが、特に許されて宮城拜觀の光榮に浴したるは、誠に感激に堪へぬところ、今尙ほ記憶の新なるものあるのであります。

歸途は盛岡より秋田縣に入り、途中流行性感冒患者續出するなど、相當難儀な旅行であつたが、五月二日一同歸校したのである。蓋しこの行は、母校の東京への修學旅行の最初のものだと思ふのである。

## 四、女姿男性の賄夫

學生達の賄は請負人によつて營まれてあつた。明治二十三年夏頃のことである、賄夫の中にからだの姿振は全然女性であり、もの影にて其の音聲を聞けば、これまた全くの女である、容貌だけは確かに堂々たる男性なのである。異性に親しむより同性に深い親しみを持つといふ、頗る變態なものであつた。學友O君は殊の外最負にあづかり、さかんに付纏はれ頗る迷惑がつてあつたことは、當時の一笑話柄であつた。

## 五、主張

主張と云へば何にか意見の主張のやうだが、そんな眞面目なものではない。自修室のきまりとして、午後七時から九時までの二時間は、默讀自修時間であつた。遊びたい食ひたいの青年盛りの私達には、この二時間は相當な辛抱でなければならなかつた。默讀自修の最中何處からか、主張と低聲ながら力强い一叫びが聞える、周圍の誰れも彼れもが贊成々々とこれまた力籠つた低聲、各自は直ちにポッケットを探つて一、二錢づゝを醵出する、主張を提出したものは、其の醵金を集めて燒芋か啖切飴の買出しに出掛けるのである。一二錢の醵出と笑ふなかれ、當時の學生達には相當な出費であり、そしてまた此の主張は大きな慰安であつたのである。ある晩主張成立し、一同啖切飴を頰張りつつ、默讀自修中突然舍監先生の巡視があつた。舍監先生巡視の際は、室長（伍長）は直れと號令し、室中の總員起立することは規定になつてある。生憎室長は丁度頰張最中のことなとて、直れの號令が出來なかつた、いづれも顏見合はせ口唇を緊張させ、自發的にしかも不規則に起立した。舍監先生夫れと察したものか苦笑し無言のまゝ去つたのである。こんなことは主張時の最大失敗の一つである。



## 六、火災

明治二十三年九月のことである、ある日の夕刻食事を終へ、自修室にて机の引出中に半紙の將棋盤を敷き据ゑ、（當時は娛樂室なく娛樂などてんで許されなかつた）駒の配置にむちうちになつてゐた。突拍子に火事だといふ大聲を耳にした、將棋ところではないそのまゝ飛出した、學友の喚き走つて行く食堂の北側から、朦々と黑煙を吐いてるではないか、湯殿から發火したのである。舍內は忽ち非常な大混雜を極めた。八時頃には校舍並に附屬建物全部を燒盡し鎭火した。學友達に怪我もなくまた他に延燒しなかつたのは不幸中の幸であつた。（校舍の位置は今の新町小學校の西側赤十字支部のある所）この夜は私達が武裝し燒跡を撤夜警戒した。年少の私達には相當悲愴なものであつた。

## 七、校內たつた一人のクリスチアン

一部の人々は未だ耶蘇教を切支丹宗として、邪教視してをつた時代である。當時私は校內たつた一人の耶蘇教信者であつた。舍監先生や一部の學友諸氏の、私に對する壓迫は、相當なものであつた。舍監のある先生は私を叱して曰く、君は毛唐野蠻人の宗教を信奉するとは何事ぞ、學校で教へてある倫理で澤山ではないかと、當時の倫理の教科書は所謂毛唐外人某の著はせる譯本であつたのである。井上博士著教育と宗教の衝突の出版された頃のことである。當時私を目し教育家にして宗教家たるは不都合千萬なりと、難詰せるが如きは、餘りに目當違ひにてたゞ苦笑の外なかつたのである。四十餘年後の今日から見れば、全く嘘のやうな事實であつて、感慨無量を覺ゆるのである。

## 八、ノート

私達の在學當時教科書の定まつてるのは、教育、倫理、國語、漢交、數學位で、他は悉く先生の口授をノートしたものであつた。今日のやうに萬年筆あるでなし、ペンは英習字の時のものであるし、教室に於けるノートは、みな日本紙に鉛筆か毛筆でとつたのである。一時間の口授は大抵半紙二枚乃至二枚半である。放課後毛筆で淨書するのであるから、ノートの整理はなか〳〵の骨折で、今日から見ると全くむだ骨のやうなものである。しかしよい教科書のない當時では、この淨書したノートは、私達にはこよない教科書で、試驗前には死にぎはの念佛といつて、さかんにこのノートに嚙りついたものである。

## 九、大井先生

明治二十五年頃である、大井先生は倫理教育等を擔任せられ、舍監を兼ねて御出でした。ある日學友T君は病氣と

いつて、就寢を屆出で休課した。放課後先生はT君を其の寢室に見舞ひ、親しく病狀をたづねられた。實は就寢休課せなければならぬ程の病氣ではないのだ。先生はそんなことに頓着なく、いとも懇ろにT君をいたはり、切に療養を勸められた。先生のこの態度には流石にT君頗る恐縮し、汗背を潤ふしたとのことであつた。このこと一度學友間に傳はるや、先生の擔任學科に欠課するものなきに至つのである。

## 一〇、同　期　生

明治二十六年三月卒業の私達は、同期生十九名であつた。今から見れば至つて小數ですが、當時は全校精々七十名內外であつたから、十九名は多い方で、この前後の年度では、わづかに十二、三名內外であつた。だから私達の卒業の時には、賞れ殘されはしまいかと心配された位である。さて十九名の同期生は、其の年八月六週間現役終了以來、互に逢ふ機會少く過半は全く逢はずに、今日に至つたのである。四十四年も經過した今日では、故人となつたものも無論相當あるでせうし、現存者でも消息を得てるのは、僅かに一、二人に過ぎない、今更ながら遺憾に思つてゐます。母校の今度の創立六十周年を機會に、消息を得て舊交を溫めたいものと、大に期待してるのであります。

――　東京市外小金井村人見の寓居にて　――

明治二七・三・卒業　野呂喜代吉

私は第六回の卒業生であります。本入學を許可された年の夏休直後に火災に罹り、校舍、寄宿舍全燒した。それで今の縣廳左側元中學校のあとに收容せられた、隨分不體裁な學校寄宿舍であつたが、縣經濟云々で縣會の否決に遇ひ、四年生になる迄辛抱せねばならなかつた。一年生の後期頃から自炊制度に改まつた。以前は賄攻擊などの騷は隨分盛んであつたさうである。新校舍（今の病院）建築された年に教生となつた暫の間新校舍から附屬へ通勤した（附屬の建築後れた爲）歸りには市中を遠廻りしたこともあつた。これが一般同僚の羨望の的であつた。當時の主事は木下邦昌先生で、單級を始めて附屬に開設せられた珍しい試設であつたので、各地の訓導方の參觀は實に夥しかつた。幸か不幸か教生期の半分は單級受持を命ぜられた。隨分苦しかつた。其の頃地歷、理科、修身などは教科書は無いので、教授細目に據つて教案を作製せねばならぬ、附屬の訓導も少人數で、教生は一學級擔任のやうなもので、修身科は主に訓導によつて教授せられた。教生は殆んど全科に亘り毎週一週前に教案を作り訓導主事を經て學校長の檢閲を受けねばならぬ。それが時として教案は眞赤になつて戻ることはまだしも、改作を命ぜらるゝこともあつた、これには隨分頭を惱ましたものであつた。而し教材精選の爲諸種の參考書を調べるので、將來身の爲になつたことは痛切に感ずる。それにしても在校中最も愉快であつたのは、教生期であつたことは、獨自分ばかりではない同僚皆な同感であつた。



### ◆感　想

師の影三尺とは昔の言で、近頃の世態日に月に師道の衰頽し行くは、爭ふべからざる事實である、某校一兒童教室の黑板に大書して曰く「級長は小使なり先生はものを教ふる道具なり」と、全兒童之に雷同し、我意を得たり顏に拍手喝采したりといふ。又先生の惡評を大路に落書して、憚らざるあり、或は同盟休校を敢てするあり、卒業生にして舊師に遇ひ、路傍の人を見るが如きあり、何たる世相ぞや是れ實に聖代教育の一大缺陷であると想ふ。因より教育者のみの責任では無いが、大部分は教育者は負はねばならぬ。研究に研究を重ね、この缺陷を救濟し師道の振張を圖ることは現下の最大急務であると思ふ。

### ◆創立六十周年を祝ひて

我昔學ひし窓を仰きつゝ
　六十とせ祝ふ今日の嬉しさ
撫子の咲きそふ見れはまなひやの
　惠の露のかゝるとそおもふ

## 追憶談

明治二八・三・卒業　工藤六次郎

母校創立六十周年を迎へ、記念式典をあぐるに當り、校友會雜誌部にて在學當時の、追憶談を寄せよとの依頼により、四十有餘年の昔を想ひ起し、少許り述ぶることゝします。私の入學は明治二十四年四月で、校舍は今の新町尋常小學校の所で、甚だ粗末な中學校の跡を充用したものであつた。同時に入學を許されたのは二十三人と記憶して居るが、當時は第一種生とて郡長の推薦によりて入學せしむるものと、第二種生とて一般志願者より試驗入學のものとあつた。年齡は滿十七年以上の定め故、數へ年の十八、十九でなければならず、中には年を隱して入學したものもあつたと思ふ。四月に入學を許されても、夏休み頃までは假入學というて、學業人物の如何はしものは容赦なく退學させられるので、假入學中は何れも戰々兢々として、一生懸命のものであつた。私と同時に入學した人の中、七名も退學させられた程で、中々嚴しいものでありました。

試驗のことですが、臨時試驗は一年中僅に一、二度で、一年分を學年の終りに試驗され、其の爲に澤山の分量を調べなければならず、又當時教科書、參考書等は少く、學科

は殆ど全部口授筆記でありましたから、毎日筆記の整理等に可なり苦しみました。

生徒は全部寄宿舎に入り、軍隊式訓練を施されるので、上級生に對しては從順でなければならず、八釜しいものでありました。生徒定員は百二十名で、多いときは百名位、少い時は七、八十名程であつた樣に覺えて居ります。朝夕相會し寢食を共にして居るので、全く兄弟同樣の親しみがありました。

學費は全部給與されるので一錢も入らず。冬服、夏服、シヤツ、靴下、靴、帽子、紙、筆、鉛筆等の入用品を悉く十分に給與され、猶一週に拾錢づゝ齒磨粉代として給されましたが、此拾錢は皆餅代となつたやうです。

當時の食費は生徒一人一日金拾錢也で、安かつたことは今からは想像もつかない程です。夫れで中々御馳走があつたもので、土曜日の夕食には大した御馳走があつたものです。炊事は舍監の監督で、生徒は交替に其事務を執り、炊夫を指揮してやつて行くので、一週間づゝの計算で週末に御馳走するのであります。又冬休、夏休には一日拾錢也の計算で休中の食費を給與せられるので、結構なものでありましたが、之は休中の小使錢となつたのでありがたかつたものです。

私は二十八年三月卒業しましたが、其の時の校舍は現在の縣立病院の所で、同時に卒業せし人は十四人の少いものでした。而も今となつて見れば生存の人は僅かに六人となつた位で、是から段々亡くなつて行くかと思へば心淋しいものであります。

このやうに昔のことを思へば、樣々思ひ出されます。入學當時伊藤貞勝校長の溫厚、歸山信順先生の謹嚴、狩野應力先生の風彩などは今でも記憶に殘つて居り、和田豊校長の恐しかつたこと、大井民吾先生の溫順なことなどは忘られません。夫れから一つ今から思へば甚だ可笑しいやうでありますが、生徒の服裝で三年生までは別に頓着しませんが、四年生となつて教生に行くやうになると、少しは氣をつけるやうになり、小倉服の裏返し、獨逸形帽の裏返しを着用に及び揚々と先生らしく裝つたものです。

私は卒業後直に青森新町尋常小學校訓導拜命、翌年青森高等小學校訓導拜命四年間小學校の教育に從事しました。明治三十二年五月東京農科大學內農業教員養成所に入學、三十三年四月卒業、母校の農業教員として聘せられ、舍監をかねました。三十四年四月長野縣上伊那農學校に轉任。三十七年七月再び農業教員として舍監をかね、四十二年四月迄在職しました。依て前後通じて、六ケ年母校に職を奉じ、舍監として當時の生徒と、親しみは深いものがあります。三十四年三月から四十五年三月までに卒業の人々とは一年乃至四年間寄宿舍に居つたので、其の間連續して知つて居ります。又當時講習科の理科を受持つて居りましたから、此の方の人々をも知つて居ります。之等の人々は今は四十七八才から五十五六才位迄の方々で、縣內教育界の中堅で、何れも榮進せられて居るのは欣快に堪へません。私は常に何よりも之を喜んで居ります。私は今となつては母校の舍監であつたことを喜びます。舍監は生徒との親しみは格別に深いものであり、御互に終生忘れられぬものであります。母校出身の舍監としては、他の先生との間に立ちて、苦しい立場に置かれたとも度々ありました。何事かゞ起つた場合には之を善處することをせねばなりません。生徒と先生との衝突の調停、學年末進級會議、當時の苦心、生徒處罰の當否など中々苦しんだもので、舍監ならでは味はれないと思ひますが、それだけ又面白味があります。

私は今當市の郊外に自適生活を送つて居るので、會談の機は平生多くあるので大の樂であります。時々當市に校長會議等のあるときは同期卒業生の會合に呼ばれ、一日の歡をつくさせてくれます。其樣な會合で種々の昔話に「烟草を飲んで叱られたことがある」とか「炊事場から殘飯、濱物を盜み食して叱られた」とか話されて大笑ひするともあります。何十年前の昔の事で、私には何も忘れて全く覺えがありませんが、當事者であつた方々は、覺えて居るのです。私は今更自分を辯護するやうでもありますが、意地惡く叱つたり苦しめたりしたことは毛頭なかつたことを信じて居ります。一つの笑ひ話を述べて見ますが、此の話は昔のことであり、私は全く忘れて少しも覺えのないことであるのです。今は南郡の奏任校長として名聲ある○○○○氏にかゝることです。同氏は至つて無邪氣な好人物で、いたづらを好む事は同級生間に定評のあつた人ださうです。海水浴をして水母に大切なる局部を刺され膨れ上つて大に惱み、友人間の好話題となつたなど、在學中奇談の持主であるさうです。同氏は又大の寢坊で、朝點檢の時にはよく周章てたものださうです。或る時の事私は當番で起床後の點檢朝禮に廻りました時、同氏は餘りに周章し、裸に長い「ふんどし」を締めたる儘、外套を纏ひ、室長の號令に寢ぼけ顏に氣をつけ、不動の姿勢を執つたのでありますが、「ふんどし」の前下りが長く下つて居たのです。そこで私は何も言はず、その前下りを兩手に、掬み引き出したので、同氏は局部を締められ、痛くて痛くて顏を赤らめて全く閉口したさうです。普通ならば後に舍監室に呼び出し、大に其不始末を叱責するのでありますが、私は態と呼びも叱りもせず默つて居たので、却て大に恐しがり、さすがの同氏も舍監の工藤には一本參つたと友人間に話したと、此笑話を遂五、六年前青弘間の汽車中に、在市某氏より聞き、其後二、三の人に尋ねて其事實なりしことを確め、更に同氏と會談の時大に笑つたことがあります。この種の話題は可なり多くあるやうで、全く罪のない昔話となつたことは、懷舊の念禁じがたく、追慕の情に堪へざるものがあり

ます。私は此に特記して感謝の意を表したいことは、四十二年に母校を去りて富山縣に拾年、島根縣に七年を送り、大正十五年南郡柏木町農學校創立の任を帶び歸鄉致しました。時に南郡在住の母校出身舊知の人々の熱意ある歡迎を受けて喜びに堪えず。鄉里に最後の御奉公を盡すに多大の後援を得て居ることを、何よりの力とし大に感激奮勵致しました。然るに天なる哉命なる哉で、昭和二年六月不慮の病魔に犯され、翌三年四月退職致しましたのは、甚だ痛恨の極みであります。此病に罹り療養中なるを聞かれた南郡在住の母校出身の舊知の人々は非常に心配され、夫々醵出して、長谷川協助氏を代表とし私に葡萄酒二瓶、菓子壹折を惠み、大に慰めて下さいましたので、其厚意親切を深く謝しました。然るに長谷川氏の歸られた後、菓子折の包みの中に、尙金壹封見舞として入つてありましたのに驚き、かく結構なる品々を惠まれ大に感謝の念に打たれて居つたのに、今亦此包み物を見ては胸塞り有難涙にむせび泣きをしました。此の厚意の金は品物に代へ、長く感謝の意を表したいものと思ひ、早速屛風を求めて使用し、常に之を見て當時を追想し感激して居ります。此の機に當り謹で厚く謝辭を述べたいと思ひます。

私は當市に在住して居るので、昔母校に共に居つた人々と時々會ふことが出來、皆先生々々と呼んでくれ、親切にいたはつてくれるので最も幸福であります。先年「恩師を迎ふる會」が開かれた時、私も其の一人として席末に列し、多大なる歡待を受けましたことは身に餘る光榮でありまして、大に感謝して居ります。なほ亦母校を四十二、四十三、四十四年に卒業せられた人達は、數年前より二三四會を組織され、毎年一、二回會合して懇談する其仲間にも入れてくれ、共に樂んで居られますことは何よりの幸福と喜んで居ります。此のことにつけ昔の先生であつた津島剛之介先生、先輩であり同僚であつ今力太郎氏、釜蒐善作氏等の物故された方々は惜まれてなりません。津島先生はともかく今、釜蒐の二氏は、今日達者で居られる時は、私と同樣に幸福であり、喜びを共にすることが出來るものと何時も思ひ出されます。此機にあたり弔意を表します。

此の樣な感想追憶を述ぶると中々に盡きませんから、この邊で筆を止むることゝします。終に六十年を迎へたる母校が、若返つて益々盛ならんことを祈つてやみません。

明治二八・三・卒業　**岩泉亀松**

本縣師範學校は今年創立六十周年に相當するので、盛大なる記念式を擧行せらるゝに際し、在職當時の追憶談なり感想なりを寄稿せよ、と同校雜誌部から御依頼あつたけれども、淺學菲才の不肖教育界を退いて既に十年餘、晴耕雨讀無爲に餘生を過して居る境遇で、何等申述ぶべき資格がないと信ずる。私の師範生活は生徒として四年、職員として二十三年、明治二十四年から大正七年迄二十七年間恩顧を蒙つた學校である。其の間校舍校地の變つたこと三回、校長先生は九代、主事先生は十代、在校中に十五周年、三十周年四十周年の三回ほど記念式に遭遇してゐる。その內容に於ても幾多の變遷があり、一弛一張があつたとはいへ多年縣文化の中心として時代の趨勢に順應し、縣國のために貢献した、母校過去の歷史は、燦として光彩を放つてゐる。今や六十周年に達し校運益々隆昌、眞に國民教育の源泉として尊敬と信賴を受けつゝあることを思ふとき、大に將來を祝福しなくてはならぬ。

×

永遠に忘るゝことのできないのは明治二十六年十二月、今の縣立病院の敷地に建てられた新築校舍が落成して間もなく、第四旅團長にあらせられた、伏見宮貞愛親王殿下の御臨校を仰いだことと、同四十一年九月大正天皇東宮殿下に在しまして、本校に行啓あらせられたことである。此の時は特に縣下各學校の成績品を講堂に陳列し台覽に供し奉つた。成績品中附屬校兒童製作の蔓細工が御目にとまり、二、三献上の光榮に浴したと拜承し、陳列に關係した私は長い極みであると深く感銘した。

×

私としては前に申述べたやうに薰陶を受けた母校であり又職員の一人として、多年席末を汚した懷しい學校でもあるといふ關係から、此の記念日に當り回顧すれば、只々感無量といふの外ない。願ぼくは六十年の歷史を記念に、新紀元を劃して更に大發展あらんことを祈る。

明治四〇・三・卒業　**馬場正太郎**

## 卒業間際の事ども

明治四十年三月卒業の前の晩であつたと思ふ。

當時の舍監津島先生より小生に舍監室に參れとある。そこで小生考へたものだ。何も不正な行爲は、した覺えは無し、何事ならんと、一向見當も判斷も付かないが、兎に角怖る〳〵屠所の羊の如く舍監室をノツクして入ると、津島先生一人ぽつねんとして居た。

平身低頭何の用事か伺つたら、さあ其處に坐り給へと言はれる儘に坐る。

「時に君」と來た。益々以て見當が付かない。津島先生は小生にとつては大の苦手、目の上の瘤、先生は兵式教練の受持で舍監と來て居るから威張つたものだ。睨まれると恰も鷹に雀の如く、皆びく〳〵恐がつたものである。

先生は綽名を付けられて居て、上級生からよくその話を聞かされたものである。

一年生時代、兵式教練は自分では一生懸命に正直に、眞面目にやつて居るつもりであるが、何時も目の付けやうが悪い、帶は太いから細いものを卷いて來い（一年の時は和服）、草履は麻裏ではいかん、山高（藁草履）を履け、鐵砲の擔ひ方はいかん、股を高く擧げ手を振れと毎回小言で兵式教練、體操を嫌々で暮したものである。斯く體操のある毎に耳にタコのよる程注意を受けた先生であるから、返答も出來ず何時もはい〳〵で通したものである。

他の學科は唱歌と兵式を除けば滿點近いが、殊に兵式と來たら十八點か無點のものだ。

小生の外には甚しいのは零點、或は九點位のもあつたものだ。今は體操で九點だの、十八點の點數は、無からうと思ふ。

と言ふ譯で、落第點の事か又注意でも受けるのか、之等の事を考へつゝ。

そこへ、「實は君」と愼重に來たのですつかり觀念して了つた、處が思ひの外、君を靑森市の〇〇小學校長が卒業したら當校に奉職する樣勸めて呉れと、僕が賴まれた、との事で、そこで今までの恐怖心及暗鬼はがらりと晴れて始めて安堵したものだ。

此の時程心を痛めた事は無く、又喜びも之程愉快な事は無かつた。入學以來始めて先生の有難味をしみ〴〵分つたのも此の時である。

小生は三戸の方へ家庭の都合上既に決つて居たので、思召は有難いが斯う言ふ譯で御斷りしなければなりませんと申したら、それは殘念だと話されてあつた。

故に小生の代りに同窓の某氏を推薦したがそれは實現されなかつた。

此の時程津島先生を有難いと思つた事は無い。今迄何時も叱られ通しの僕が始めて慈けの言葉を掛けられたからである。

當時靑森市小學校長は川村校長さんで、津島先生と共に忘れられない。

當時の日記に「渡る世間に鬼は無しの喩への通り自分の心を鬼にしなければ決して鬼はあるもので無いと思ふ」と記してある。その一節を書いて當時の思出となす。

# 王の領の水難

思ひ出

# 三十年の昔

秋鹿見橘

本年十月御校創立六十年の記念式が行はれるとのめでたき御報に接し、心から慶賀の誠意を表する次第である。

私が御校に就任したのは明治四十一年の十月で、今よりざつと三十年の昔である。當時私はまだ壯年時代であつたので、元氣に任せて少からず諸君に御迷惑を御懸けしたことは、今更慚愧に堪へない所である。併し足掛五年の在職は、私に取つて實に愉快な公生活であつたことを、終生の好記念として喜んで居る。當年卓を共にして談論した同僚諸君には、少數の方々の外、殆ど存問を絶ち、謦咳に接する機會を得ないのは遺憾であるが、在學の麒麟兒、今は縣下教育界の元老として、盛名を馳せらるゝことを想望すれば、衷心欣快を覺ゆると共に、轉た今昔の感に堪へぬものがある。

私が在職中遭遇した事件で、忘るゝことの出來ないものは、何といつても青森市の大火災であつた。明治四十三年五月三日、火曜日の午後一時、突如として市内安方町から出火の警報を聞くや、忽ちにして煙燄天を焦し、烈風砂を捲き、猛火四方に擴つて止まる所を知らず、延燒數千戸、夜に及んで尚熄まず。一時は學校も危く見えたが、幸にして事なきを得た。一旦外庭に搬出した物資全部を再び校内に收容するなど、上を下へと混雜の中を、市民の難を避くるもの一時に殺到し、雨天體操場、附屬小學校は、忽ち人と荷物とに埋められ、慘狀目も當てられぬ有樣。職員生徒一同、徹宵警衛整理の任に當り、之より一週間專ら罹災者救護に盡瘁、十日に至りて漸く校内の大清潔法を行ひ、翌日より授業を開始したのであつた。

當時は少數ながら女子部の生徒もあり、別に校外に民家を借受け、假寄宿舍を設けてあつたから、こゝにも多少の悲喜劇が演ぜられたのであつた。

火災後文部省に校長會議が開かれた時、全國の師範學校長に、小學校兒童罹災の狀況を傳へて、教科書や學用品の寄贈を依頼し、又國民新聞社に德富社長を訪うて同樣懇請したこともあつた。

私は其頃まだ家族を引纏めず、單身旅館に居つたが、此火災に遇うて止宿の場所を失ひ、遂に校内の宿直室を占領して、暫くこゝに寄寓し生徒と寢食を共にしたので、よく生徒の氣風を知ることが出來たのであつた。

その外私の記念して忘れぬことは、就任後間もなく、學校の倉庫の一室に、岩倉公の「先德行」と書かれた扁額を見出して、是ある哉と三嘆し、直に之を階上の講堂に掲げたのであつた。之は明治十四年、明治天皇東北御巡幸の



砌、公の書かれたものか。確か時の縣令山田秀典氏時代と思ふ。さすれば公薨去二年前の揮毫に係るもの、洵に稀世の重寶といふべきである。

又、今一つの思出は、明治四十四年春まだ淺き頃と覺える。東京高等師範學校教授永井道明氏（今は東京本郷中學校在勤）が、歐洲留學中獨逸から持歸られた、スキーを携へて來縣、郊外の積雪を踏破されたことがあつた。其時職員有志の人々が、其壯擧に隨つて教を受け、私も始めてスキーといふものを經驗して、其の壯快味を知つたのであつた。今でこそスキーは何人も知らぬものはないが、當時に於ては實に草創の時代で、青森ならでは之を知る機會は無かつたらうと思ふのである。今春東京で久し振に同氏と邂逅し、談偶ま此に及んで、當年の快事を回想し、感興深きものがあつた。

私は在任中、豪快な武田知事の下に、眞摯熱誠な職員諸君の協力を得、又同窓會諸君の懇切な支援を得て、質實剛健な校風の間に、愉快に勤務することが出來た事を、今尚深く感謝して居る。

私は大正十三年、鄉里沼津に退き、一小女學校を創設し、高等女學校と女子職業學校（一を沼津精華高等女學校と稱し、一を單に沼津精華女學校と呼ぶ）とを併置して、獨力經營辛苦十三年、卒業生を出すこと既に千三百。幸に頑健日夜鞅掌、歲月の流るゝを知らざる有樣で、辱知諸君に對して、疎濶の罪謝するに辭がない。唯偏に寛恕を願ふのみである。

最後に謹んで御校の愈隆昌ならんことを祝し、遙に各位の清福を祈る。

# 青森縣師範學校在職中及隱退後の感想につきて

森山辰之助

(1) 大正十四年五月二十七日山形縣師範學校より青森縣師範學校に轉任してより、昭和七年二月二十日依願免官となるまで、六年九月在職期間は割合に長い方で、成績の良否はともかくとして、生徒の教育にはかなり努力した積りである。一體青森縣の生徒の本質は、惡いとも思はぬが、教育的の訓練にはなほ不充分と思はれる所が少くない。又從來からの歷史的慣習には、隨分如何がはしい點が無いでもない。又生徒の學問の研究や、勉强についてもまだ不充分だと思はれる點もあつた。元來師範學校の生徒はどの縣でも概して進取的氣風が乏しい。此風を打破するには、先教師の選定に格段の注意を拂ひ、良教師の招聘に努むること

が先決問題なりとし、豫算上の制限はあるなれども、努めて教師の待遇改善につとめた積りであつた。而して生徒の學力の向上を圖り、獨り小學校教員としてのみならず、中等教員養成所の諸學校にも進んで、應募を勸誘して、且合格者の出でんことを所期した自分の考としては、小學校教員に對する趣味を養ひ、之が教師たることに深い信念を持たしむることは勿論であるが、生徒の資性に應じては、進んで中等學校教員に從ふ者の相當多く出ることは、必ずしも否むべきことではない。寧ろ必要であると思ふ。（元來師範學校は他の中學校などと異なり、他に競爭者が少い。從て生徒の學力の如きも、とかく比較が取れない、そこで高等なる教員養成所の如き、學校の入學試驗を參照すると幾らかの判斷がつくと思はれる。從來の青森師範の此等の成績に照合すると大方判斷の材料が取れると思ふ）。

(2) 青森縣内の小學校教育の視察は十分とは申されぬが、出來るだけ視察をした積りである。要は縣内の小學校教育は割合によく行つて居る。恐らく他の府縣に比して遜色はないと思ふ。

(3) 青森縣は自然の風光に富んで居る。自分は何れの縣に在任しても、此の自然の風光を觀賞することを、怠らなかつた。今日は國立公園の問題と共に、自然美は世人の注意を喚起されたと思ふ。

自分の知つて居る所についても、山梨縣御岳の溪谷美、山形縣の山寺、豐前の耶馬溪、肥前の島原、肥後の阿蘇溪谷、鹿兒島の櫻島、長崎港の勝景、松江宍道湖及三保關の景、伯耆の大山、出雲の鰐淵寺の紅葉、石見三瓶山の景勝地、信濃の姨捨、信州の上高地、木曾の溪谷、陸中の嚴美溪、札幌市外の定山溪、大沼公園、五稜廓、登別溫泉、洞爺湖、釧路、帶廣等がある。

青森縣内にも、八甲田から十和田にかけて、國立公園地帶、岩木山を臨む弘前、中野の紅葉、椿山、津輕海峽、下北半島、恐山、八戸港、海猫、七戸及牧場、等景勝の地や天然記念物等豐富にあると思ふ。そこで私は青森縣は美術に富んだ美術國であると思ふ。これらは自然子弟の教育に利用せらるゝことも多大であると信ずる。

高山靜

昭和十一年六月五日

態々仰付られ候へとも何も申上へき事もなくたゝ
壽言のみ申上候　右御返事まて草々頓首再拜
御掛御中樣机下

右の御書面に添へて當時の辭令書寫三通同封下さいましたから次に掲げます。



白銀小學假教員　高山靜

弘前師範分校附屬小學書法教員兼勤申付候事
但爲手當一ケ月金貳圓支給スヘシ
明治十年七月四日　青森縣廳

女子師範學校助教員　高山靜

月給金壹圓五十錢支給候事
明治十四年十月五日　青森縣

高山靜

青森縣女子師範學校教員雇申付
月俸三圓支給候事
明治十五年三月六日　青森縣

（編者云）明治十一年七月三日弘前白銀小學校を朝陽小學校と改む。

# 懷しい青森の追憶

木梨延太郎

私は去る昭和八年六月に、青師卒業生によりて組織された『恩師を迎へる會』の招待を受け、同十八日から一週間に渉り青森教育會館で懇篤な待遇を受け、二十年振りに發展せる市の現況を見せて貰ひ、嘗て胴乱を擔ひて見舞うたことのある淺虫、弘前、岩木山麓から十和田湖、三本木等までも案内して貰ひ、加之舊知己の面々と親しく久濶を叙することを得て、感激深き榮譽を施した上に、その歸りには記念の寄書を惠まれたので、之は毎年この記念日前後に床間に飾り立てゝ記憶を新にしてゐるが、本年は七月に入りて、故本間蕈山先生の書幅に掛けかへ、又その四日は故フホリ師の命日につき、師の寫眞を祭りて冥福を祈れる翌五日に青師雜誌部係より、青師創立六十周年記念祝賀擧行につき、私に所見を徵せらる、私の感激最中に斯かる通知に接す、何と御目出度ことで、一言せざるを得ざるに至つたのであります。

私は明治三十年から大正二年まで、足掛け十七年在任してゐたことゝて、殊に私の尤も元氣であるべく、又最も奮鬪すべき時期に際することでもあり、私には深き印象を與

へられてゐて、青森は實に故郷と同一のやうな氣持がしてゐる、普通の人は能く第二の故郷といふが、私には第二の故郷でなくて、寧ろ誕生地卽ち第一の故郷といふ氣がしてゐるのである。故に青森を退去せし際には所謂壽多辱の感なきにあらずであつたのである。

然りこの十七年の期間には可なりの變遷があつたのである、卽ち就任當時の學校は一學級三十名、四學級合計百廿名の定員で、各學級に多少の缺員あり、約百名前後の生徒數であつた。その十月に師範教育令の新しき制度あり、之よりして學校も漸次發展擴張の機運を迎り出し、本科生の增員は勿論、簡易科、講習科、女子講習科、第二部、女子第二部と次第に定員の增加を見るに至つた。それで校地內に色々と增築工事起りて運動場が次第に狹められ、舊建築物は腐朽し出して、大正二年今の地に移轉するこゝなつたのである。又青森市はマダ青森町であつて市になつてゐず、電燈も市內に點ぜられ始めてゐても、學校には未だその設備なく、多數の照明を要する寄宿舍に於てすら容易に之を望まれ得なかつた。學校の名前も尋常師範學校といふのであつて、三十一年の四月に尋常の二字が剝がれるやうになり、學校醫の任命はその一月からのことである。又寄宿舍に於ける生徒の勉學狀態につきても、一同はよく缺乏に堪へ堅忍不拔の精神を養はれてゐた。漸く小倉服が毛織服に改められ、常食の精白米は健康保全の上からして麥飯に變へられても、煖房裝置に至りては設備ナカ〳〵容易のことでなかつたので、纔に火鉢の構造につき頭腦を苦しめてゐただけで、餘り目立つたことが出來なかつた。何しろ有爲の青年を預り、國家百年の重大事を期するにも、その基本が完成せぬので、如何にも遺憾の點あるやうに思ひ煩うてゐた。

顧つて社會關係を一瞥すれば、明治三十一年六月青森市教育會の組織、三十三年八月小學校令の改正、三十四年四月青森中學校の開校、之と前後して三橋三吾氏の義俠により、同氏の邸宅內に圖書館の設立あり、夫れに北淸事變とか、步兵第五聯隊の雪中遭難事件とか、日露戰役の如き大事件より、三十八年四月市立商業補習學校を高等小學校內に開設、三十九年一月青森博物學會創立、四十年三月には義務教育六ヶ年に改正され、仝四月青森高等女學校の開設、その九月には鶴駕の地方行啓あり、辱くも青師にも臺臨あらせられ、私共も拜謁の光榮に浴し、多大の面目を施されたことである。四十二年十二月市上水道工事竣成、四十三年五月所謂青森の大火災ありて、市の大半を燒失したが、我が校舍は幸に何等の被害なきのみならず、職員生徒は實に目覺しき活動をして、罹災民の救助に方りたることは、這般のことのみならず、每回何時も社會のため奉仕してゐるので一般から尊敬を受けてゐる。四十四年四月には女子師範學校開設、四十五年七月　明治天皇陛下の崩御あ



り、大正と改元、大正二年五月市立工業徒弟學校設立あるなど、夫れから夫れへと舞台が變換展開して、人間は何時も吳下の阿蒙たるを許さぬのであること斯の如し。

元來私は才なく、學なくて、何等役立つ所なきものなるに係らず、否、常に種々の缺點が多きもの故、事每に瑕疵を曝け出してゐたが、職員、生徒、卒業生の諸君は何れも之を寬恕し、愛護してゐてくれたのを深く有難く感謝してゐるのである。私は朝夷校長に招かれて、青師に就任したもので、その着任挨拶の際、校長は入院臥床の人であり、病氣の人でありながら私にいたされた訓示の箇條は深く心肝に銘し、一心に勤行を守るべく決意し、明治三十一年發行の青森縣師範學校一覽の附錄の拙稿「博物標本の採集調製保存法」は、愚見發表の一端である。而して平素は校務の餘暇を見出して、野外の觀察と採集とに專念從事した。青森市附近は言ふに及ばず、縣下到る處に足跡を印することに努力した。外出の際胴乱を肩にし、捕蟲網を手にすること多いため「何時見ても胴乱擔いて云々」と一部から謠はれたことすらある。私は釋尊が文珠菩薩に示教された次の調言を尊いものであると信じてゐる、この語は慥に吾人身命を投じて服膺すべき金言ではないか。

衣服臥具飲食醫藥而於其中無所希望但正念說法

因緣願成佛道令衆亦爾

私の衷心に同情して、私に後援又は聲援してくれる人も亦數少くはなかつた、從つて私と同服裝をとり、共に俱に山野の跋涉を樂しみ、自然を研究する同好の士を幾多得られた。殊に佛人フホリ師の如き、斯學界の傑士と親しき交際を結ぶことを得た。同師は我國植物學界の偉人たると共に、又宗教家のことゝて、無垢無染無所著の實踐を示してくれたので、多大の感化を得たことを幸福と思ひ、自分の修養上非常に好境遇に投ぜられ感謝してゐる。かくて校務の傍に青森の天地の研究調査を進めてゐた、元より多忙の校務を處理しての餘暇の仕事故、牛步の如く遲々たるは言ふまでもない。併しその一端は明治四十五年四月の東奧日報記念號の紙上に揭載され、更に詳細は他日を期し大成につとめてゐたが、大正二年懷しい青森を後にしなければならなくなり、この調査書類は轉宅荷物と共に混同し、その大部分を散亂紛失して原稿の取纒めが出來ぬやうになつて仕舞ひ、殘念に思うてゐる。折角の原稿を取り亂して仕舞ひ、又青森と頗る遠隔の地にゐても、亦夫れから廿年の長日月を經過してゐても、青森の地は益々進展してゆき、教育事業は愈々振作し、而して人情は尙純情と敦厚を加へて、始終變りなく睦しき普信を一層交され、又は時に態々訪問して吳れる人のあるに至りては、何の辞もて感謝してよいか、苦しむばかりに有難く思ふのである。

我が就任當時の小學校教科書にはレンゲサウのことが出てゐた。又梅には二月三月花盛りと、記載されたのがあつ

た。前者は青森の野外に存在せざるものであり、後者は二三月頃は未だ積雪中にある青森地方には、とても梅花の馥郁たるを見られぬ狀態にあり。之れらの教材の取扱方につき意見を聞かれたこともある。何分にも本州中部の事情其の儘を青森の地に其の儘當てはめてゆかうとすると、事は齟齬し前後不調和になり、正しき結果を得ないことにならうと愚考する。時として人は自己の捉はれた鑑見に傾きて劃一的に陥り易いものである、戒むべき事なり。明治三十年、三十五年、大正二年の大凶作は、私の實地に目擊した青森地方の悲慘事で、この外にも凶作と名づけらるゝ此の類の不幸が數回あり、同時に學校にも鮮少ならざる影響を受けてゐるのである。私が青森退去に際し、市教育會で開いてくれた送別會席上でも一言述べた處である。此の問題の解決を講ずることが何より大切なことでなからうか。

今や東北振興問題が勃興して官民共に畢生の努力を拂つてゐるし、多年待望の義務教育年限の延長も近きに實現さるゝだらうし、又師範學校は昇格して專門學校にならんとしてゐる。實に前途有望の好時代といふべし。而して釋尊の教の願成佛道令衆亦爾の精神あれば、何事か成らざらんやである。終に臨み各位の健康を祝福すると共に二宮尊德翁の和歌一首をかゝげて擱筆の辞としたい。蕪辞多謝す。

文々と障子に虹の飛ぶみれば
明るき方へ迷ふなりけり

――昭和十一年九月十五日稿――

## 今井信之

さうです、ザット見積つて今から三十有餘年の昔であります。私が青森師範に御世話になつたのは、その時分は就職も樂だつたものですネ、神田の私立の英語學校を出たばかりの私、僅か十九才の私を、青森師範はすぐ英語教授囑託として使つて下すつたのです。着任早々、遠く家鄉を離れた若い先生は、些かノスタルヂックになつて、同僚先生の仰せの儘に、學校の宿直室に泊り込む事にしたのです。食事は生徒諸君と同樣、月四圓の寄宿舍の賄ひ、入浴も生徒等と一緒にしました。恐らく上級生の中には私より年長者が居たのでせうが、風呂場でなど、先生々々と大變歡待してくれました。その好意に背いて、私の教へた英語は何といふヒドイ英語でしたらう。當今の言葉で言ふと「インチキ英語」――何しろ發音などまるで成つて居なかつたので、生徒諸子によく訂正されました。それのみでない、私の前任者が安藤貫一といふ、後年英語界に名を成した人だつたので、それ丈け私の貧弱な語學は生徒諸子を失望させた事だつたでせう。それにも拘らず、年若なのと無免狀といふ所で、大目に見て呉れたのでせうか、排斥も受けずに丸四年間勤めさせて貰ひました。それのみか、今だに當年の生徒諸氏が私を慕つて訪ねて來て呉れます。ツヒ先月



も、田澤次郎、今井熊太郎の兩人が訪ねて呉れました。田澤は師範學校長、今井は學習院教授になつたのです。私は此兩人と色々懷舊談を試みました。日曜や祭日に、此兩名と他に一二名の生徒をつれて、合浦公園の向側（現今の師範校の敷地の所あたりでせう）に行き、草原にあぐらをかいて、英學の講習をして聞かせました。先生も生徒も共に青春の希望に燃えて居たのです。エイ、ビー、シーから目を離して、はてしない空中樓閣を描いて樂んだのです。先日、田澤、今井兩名に『どうだ、モ一度アノ草原に寢轉んで空行く雲に思を馳せた氣になつては……ナニ五十才になつた?、馬鹿ナツ、これからだ』と勵ましました。教育界の二大成功者たる田澤、今井兩君とも、私の眼には詰襟の木綿服の昔の師範生としか映らなかつたのですもの。

東津輕郡油川小學校　**齋藤清**

母校創立六十周年、隆々と榮えつゝある姿を觀るとき、言ひ知れぬ喜びと或る誇とを感ぜずには居られません。

雜誌部では記念誌の編輯を御計畫とのこと、時宜に適した貴い事業であると共に、編輯員各位の御苦勞を感謝致します。

私の附屬校奉職期間は誠に短かつたので、申上げる樣な事もございませんが、折角の御尋ねですから二三述べさして戴きます。

一、私の受持ちました學級は、尋一、二、三、男女の複式で、こゝに收容されて居る兒童は、以前には甲冑組と稱へられて、市内の貧困兒童（授業料ナシ）のみであつたのが時の勝又主事は、これは教育上面白くないといふので、普通兒童をもいくらか收容されましたが、前からの習慣で他の學級の兒童も教生諸君も遊んで呉れませんでした。私の兒童等は他學級兒童の教生諸君と嬉々として遊ぶ樣を邪魔にならない樣に狹い控室の端の方で羨ましさうにながめて居ます。私はこれは縣下の模範を以て任ずる、附屬小學校の姿かと、義憤を感じ、私の學級の教生諸君と協議して、休憩時間には私も共々兒童と遊んで上げました。兒童の喜びは想像以外でした。

教育の理論や方法の研究熱の旺盛な今日、そんな姿はどこにも見出せない事とは存じますが、心すべきことだと痛感させられます。

二、私の居りました頃は、ヘルバルト全盛時代で、附屬小學校では教案例を印刷して教生に渡してあります。例の五段教授の教式です。

教生は忠實にその形式にあてはめて週案を作り、訓導の指導を仰ぐのですが、案の内容よりも教式は大切な樣で

す。

教生の授業も訓導は觀て放課後に批評することになつて居ます。一時間の授業の批評は諄々として、一時間、二時間と細に入り、微に入り、續けられました。然し教生は法廷に引かれた、被告の樣な感じより持たなかつた方が大分あるやうでした。私は附屬を去りました後、或る時參觀に參りまして、首席訓導の先生に附屬小學校の教授は教壇に藁人形を立てゝ、蓄音機で授業して居る樣な感じがすると申して、其の失言をいたく叱られました。

私は當時の異端者であつたことゝ思ひます。世の中は變りました。今附屬へ參りましてその教生指導の實際を觀まして成る程と頭が下ります。殊に地方實習などは眞に生命のある體驗教育だと感心させられます。

# 貴校の創立六十周年を祝す

日本大學第三中學校　佐々木清之丞

一　私は不敏ながらも茲に滿腔の誠意を捧げて以て貴校の創立六十周年を祝し、なほこの機會を利用して、貴縣の全教員諸君に對して、深甚の敬意を表し併せて一層の勇奮を希望するものである。

悠久無限な時の流れから、これを考へるならば、六十年はさほどの長年月といふのでもあるまい。しかし「人生七十古來稀なり」などいふ個々有限の人生から、これを觀たなら、貴校の創立は可なりの年所を、經たと言ひ得るだらう。實は「老いたるそれだけでも、たふとく見え候ふ」ものを、況んや單なる無爲の六十年だけではなく、春風に秋雨に、可憐なる學生を迎へては、切々これを愛育擁護し、その成長發達を見ては、偲々としてこれを縣內各地に送り、雋秀なる彼等の手に依つて以て、管下幾百萬の教育に當らしめ、しかして忠良なる國民の養成に、將又優秀なる文化の向上に努力を續けて來た、その效績を思ふときに何人でも萬斛の感謝と、甚大の敬意とを表せぬものはなからう。不敏の小生も亦過去を回想して、光輝ある貴校教職の末班に列し得たことを偲ぶときに、光榮と慚愧との去來を禁じ得ざるものがある。

二　如何に庶政を革新するにしても、國民人格の向上を主とする企畫がなければ、國家萬年の安泰を要望することは出來まい。よしこれを要望するにしても、其の實現は遂に不可能に終るべきである。畏くも明治大帝が維新匆々八大學と六鎭臺の設置を以て文武諧調の國是を樹立し給へるは允文允武の神格これを表現あらせ給へるもので、誠に尊しとも尊しの極みであり、其の他教學の方針にしても、例へば明治元年に置かれた、皇學所及び漢學所の規則に見ても「國體ヲ辨シ名分ヲ正スヘキコト漢土西洋ノ學ハ皇道ノ羽翼タルヘキコト」等の規定があり、明治教學の聖旨は既に〳〵かやうに確立して維新の大精神が躍如として顯れ、復古日新その何れにも偏せぬやう用意周到を極められてはゐるが、奈何にせん開國進取の餘勢は遂に歐化思想の旺盛を現じて、爾來大正を經て昭和の聖世に及ぶも、因襲の久しきなほ其の跡を絕ち得ず、思想風習その他の社會事象は常に混亂を免れ得ざる狀態にあるではないか。果して然らば國家を泰山の安きに置く師範教育の使命や、實に重大と言はずばなるまい。世の非常時を絕叫するものにして、ここに明識を缺くの士亦蓋し尠少ではあるまい。從つて斯界の協同奮起を要望するもの蓋し今時に若くものはあるまい。私は如上の所懷を以てして、茲に再び貴校の創立六十周年を祝し、帝國將來のため其の正しき發展と縣下の先覺ならびに職員生徒諸君の勇奮を希望して止まざるものである。



# 感　想

三浦貞次

母校の六十周年記念日を迎へ、衷心慶賀之至りに堪へません。

さて雜誌編輯部から此の機會に在職當時の追憶談感想をとのことでありますが、別に取立てゝ申上げる樣なことも御座いません。私の附屬校に御厄介になりましたのは明治四十三年四月母校卒業と同時でありまして、以來大正四年七月末まで、足掛六年在職したわけであります。今から考へて見ると菲才の身を以てよくもその間職責を果したものと背に汗する思がいたします。當時の學校長は秋鹿先生續いて萱場先生で、主事は佐々木清之丞先生でした。學校は唯今の縣立病院のあるところにあつたのでしたが、拾貳圓五十錢の詰襟服に海軍帽を被つて每日教育大事と通つたものです。最初は尋三の男女混合學級を受持ちましたが、未熟な私、學級經營も事務もよくやれる筈はありません。殊に兒童管理は至つてまずく、教室中でも子供をよく騷がしたもので、何遍か主事先生に、注意を促されたかわかりません。さては同僚先生達から同情されるまでになり、尋三の騷ぐのは三浦君ばかりの責任でない。尋一二の訓導にも責任がある、主事先生の再考が望ましい、といつた樣なことまでありました。そんなことはあるべきでないでせうがまあ大へん同情されたものです。然し學級の子供達は非常に質がよくて、成績もよく、秋鹿校長の御子さん始め、小館貯木場の御子さん、一高から帝大を卒業して、現に青森に居られる田中健吉さん、兒井運輸事務所長の御子さん等

揃ひも揃つて居られました。その後何十年と遇はないのであるが、さぞ變つて居られることでせう。面白いことには是等の子供さん達は、私が叱つてもちつともこはくないといつてゐたことで、私もよく〳〵やさしく出來てゐたに違ひない。

翌年からは高等科の女子一二年複式を擔任いたしましたが、尋三にも增して、女子教育には骨を折りました。何しろ若いものでしたから……。最も苦しんだのは公平にやるといふことで、公平にやつてゐる積りでも、不公平に見えたりすることがまゝあり、ために子供さん達の心をかきみだしたことなど、多々あつたことでせう。然し誠の心を捧げて指導に萬全を期してやつて參りましたが、後ではほんたうに理解してくれて、親子のやうに懷いて參りました、非常に嬉しかつた樣です。敎生の方も入り變り立ち變り參りましたが、田浦縣視學さん始め文部省に居られる大庭一郎さん、後潟の高木さん、齋藤正五郎さん、乘田千代吉さん、小林多三郎さん、野邊地の奥山さん、一寸でしたが三浦三義人先生、其の他今日敎育界に活動せられてゐる方々がありますが、どんなに御迷惑をかけたとかと思ひ出す程、汗顏の至りであります。在職途中現在の新校舍が建築せられ、舊校舍とりこはしから、一時附屬校は女子師範附屬を借用、こゝに移轉、この頃は女子附屬も新築せられましたので、高等科女は大部轉校、爲に女子は高一二三を以て一學級を組織し、私が擔任あやとる樣に敎へました。此の頃の高三女は大抵女子師範希望者で、受驗の爲隨分骨折りましたが、大抵希望通り入學させましたをこと喜んで居りました。十幾人受けて全部入學したときは何ともいへない喜びでした。是等の方は卒業後現在敎職にある方もありますが、大部分は御家庭の賢母となられて居られませう。當時は今程ではないでせうが地方との聯絡もついて居り研究會などもあつて、出張したこともあり校內でも色々研究會がありました。まだ〳〵色々ありますが、あまり長くなりますからこれで筆をとめることゝして、兎も角短い間ではありましたけれども、非常に愉快に嬉しく暮したと思ひます。以上つまらない追想を、述べさせていたゞきました。

## 思ひ出

對馬助三

自分の附屬小學校在職は、大正二年七月から大正四年三月に至る、僅か一年八ヶ月の間だつた。餘りに短かい年月ではあつたが、其の間に鍛へられたことが、少からぬものであつた。



その頃の附屬は少くも從前に其の例を見ざる活躍振りであり、研究振りであつたやうに思はれた。主事には名主事として周知の佐々木先生があり、之に續く訓導には今泉、水野の老大家があり、新進氣鋭の中堅所に佐藤氏があり、若手には工藤、三浦、小笠原氏など何れも秀才揃ひで實に堂々たる陣容であつた。

自分は之等の意氣も力もある同僚の席末を汚し、先輩諸氏の一方ならぬ指導誘掖を受けたものだ。佐々木主事は努力主義を標傍し、率先躬行兒童の儀範たれと、常々我々職員を鞭撻したものだ。「汝自身を知れ」とか「努力主義」とか「率先躬行」とかの扁額を職員室に掲げては、環境によつても職員の自奮を促がさんと考へられたものらしい。主事は登校するが早いか、眞先きに机の上から窓の棧、腰板から戸棚の板戸など一切のものにハタキをかけるのが習慣だつた。で、御義理にも職員はだまつて居るわけには行かなかつた。一緒になつてハタキをかけたり、中には用もないのに椅子をあつちへくばつたり、こつちへ運んだりして調子を合はしたりもした。朝會の時には一年生の步調を揃へるためにと、主事自身が子供と一緒に足踏みをしながら、イチニ〳〵とやつたものだ。擔任の敎師は呆氣にとられたやうな顏つきでキヨトンとしてることも往々あつた。模範授業もやれば、新研究の發表もするし、それに敎育や法制に關する著書も出すといふ、全く躬を以て人を率ひる實踐主義の人だつた。口癖のやうに「子供のための遺產は『勉强』といふ精神的のものしかない」と言つては夜を撤して勉學するといふ、文字通りの努力家でもあつた。從つて本人から見れば職員の勤務振りが如何にも齒痒いものであつたらしい。「勉强せ！〳〵。」「働け！〳〵。」と絕えず號令をかけたものだ。

職室員などで火鉢をとりまいては、煙の環を吹かすといつた悠長振りは藥にしたくも見られなかつた。家庭ではいざ知らず、學校では何れも禁煙家たるの謹直振りを發揮せずには居られなかつた。只代用附屬の主任訓導——實質は校長——だつた水野氏だけは、年の功とでもいふわけか、一種癖のある手つきでキザミを吹かす自由が、自づと認められて居たのが、異彩ある存在でもあり、羨望の的でもあつた。公開敎授、研究敎授、研究發表と、多忙な行事が間斷なく備された。それに敎生の指導から每日の敎務と連日忙殺されてヘト〳〵の狀態であつた。後には職員の希望で正規の時間中に一週二、三時間の割で研究時間が設けられることになつたことを記憶してる。

新參者で折惡しく胃を病んで居た自分は、とても之等の仕事を消化し切ることが出來ず、時には綴方の添削など市內の學校に勤務の懇意な友人に依賴せねばならぬことさへあつた程だ。

赴任匆々だつたと思ふ。一日自分の理科の授業を見られ

た主事は、後で批評して曰く「君は十八世紀の授業をしてる、もつと勉强せにあいかん」と手厳しくたしなめたものだ。教生など下手な授業でもしてると、途中から奪ひ取つて主事自身やつて見せたりした。一時はムツトせんでもないが、かうしてビン〳〵鍛へられたことは、若い者にはいい藥であつた。齡二十五にして再び修學に志すに至つた自分は、かうした刺戟によつて自分で自分に對する不滿を自覺したからであつた。

かくて大正四年四月自分は妻子を殘して淡き淋しさを感じながら――でも將來に大きな期待をかけて――廣島遊學の途についたのだ。月日はまたたく間に經つて、卒業後六年、ふとしたことより渡鮮し咸鏡南道師範の創設に當ることとなつた。三十二才の時である。その時奇しくも佐々木先生も京畿道師範に長となられた。總督府に師範校長會議が開かれた際、年老いたれど昔のままの覇氣を有つ佐々木先生に遭ひ感慨無量、何かなしに瞼の熱くなるのを覺えた。

今や朝鮮に先生を失つた、心から淋しさを感ずる。只願はくは先生の遺產――「勉强」――を分ち得んものと危なげながら牛の歩みを續けては時に過去を思ひ出して居る。

# 母校の思ひ出

小寺勝美

懷しい母校の六十周年記念式典擧行を拜承して、衷心彌榮を祝賀します。

私は大正四年母校を卒業して、同時に附屬小學校に奉職し、六ケ年勤續させて頂きました。師範入學前の附屬小學校高等三年在學を加へると、前後滿十一年間母校に御世話になつたわけで、私の生涯には忘れ難い印象である。

最も感銘深いのは萱場校長、鹿島主事時代で、當時複式教授の權威者岩泉先生を首席に、御歷々揃訓導諸氏の並居る中に、私は席末を汚してゐた。夏休みさへ容易に休めぬ程の眞劍な教育研究を續けて、或は訓導間に、或は訓導教生間に火花を散らして、鬪つた程の緊張した環境にはぐゝまれて、自ら痩軀に鞭撻つたものゝ、身體病弱にして碌々と過したことは全く遺憾の極みで汗顏の至りである。然し當時の私としては、微力であつたにせよ兎も角あれが最も眞面目な全力で、あの面やつれに一種悲壯の感もあり、私かに非常時氣分に感ぜられてゐる。この八月仙台に萱場先生、鹿島先生を御訪ねして其の溫容に接し、心からの御厚



意に浴して、二十年前の當時を回想し、轉た感慨無量であつた。

鹿島先生の農業勤勞教育は餘りにも有名であつた。當時學校の門前、鐵道線路間は一面の荒地であつたが、其の開墾を企て、校門正面道路兩側一帶は驚くばかりの廣い畑地と化した。これが兒童の手によつて、到底出來さうにも思はれない程の涙ぐましい尊い丹精の結晶である。この土方訓導は、目下廣島市の高等女學校に教鞭をとつて居られる光井氏と青森縣立圖書館の吉岡氏と私とであつた。照る日も風の日も休みの日もよく農場に出た。同時に兒童には一鍬の土掘も、これ御國のためといふやうな精神教育も鼓吹したものだ。春休みに長尾牛乳屋から牛糞を掘つて手車に積んで運搬したことや、榮町通りを馬糞拾ひに歩いたことや、盛に草を刈り集めて、綠肥をつくつたことなど、次々と思ひ出される。春の種蒔時には毎日午後八時頃までも働いて宿に歸るとぐつたりしてゐた。それでも其の儘眠つてしまふことは良心的に許されなかつた。明日のよりよき授業の準備のために精出さねばならなかつた。月日は流れて今や其の農場の面影もなく、一見空しき努力に終つたやうにも思はれるが、緊張した環境にあつて正しく生きんがために鞍馬に鞭撻したことは我が人生にも尊い教訓であつたことを忝く思はれる。

一昨年の四月三日東京に於ける全國教育大會に母校の同期生が乘込んで來たから、一夕相會して山河秀づる七州……の校歌を合唱した。もう四十の坂を越した連中であるが、其の時は全く在校時代の若さに返つた。今の母校々舍が新築落成して、現在縣立病院敷地となつてゐる舊校地から移轉したのは、我等が在校三年生の時であつた。當時は寄宿舍がまだ出來てゐなかつたので、附屬小學校舍が一時それに使用された。屋內體操場には五十三人詰められて五十三聯隊と稱したものだ。今の寄宿舍が始めて使はれたのは、我等が最高四年生の時で、我等が元祖だ。當時舍風の自治的刷新が大いに叫ばれ、每週室長の自治會を圖書室に開催して、寄宿舍生活の改善向上を協議し、其の實行を勵んだものだ。舍監長渡邊先生はしきりと自治會を心配せられたから、協定事項を一々文書に認めて報告して、御安心を願つたものだ。

今も思出して不足を感じたことは寄宿舍の賄で、一食輕く三碗しかないワツパ飯には、發育盛りの若者大いに弱つた。わけても天高く馬肥ゆるの候には、空腹を如何にせんやだ。止むなく舍內に於て、默讀時にかくれて「前餅二錢會」「ビスケツト三錢會」など催して、時折舍監に見つけられて室長が凄い御目玉を頂戴したものだ。私は當時校友會の販賣部を擔當させられて、今の大正大學教授中島眞行先生とよく發展策を相談したものだ。生徒の空腹救濟に乘出して甘藷煮を榮町木村屋に賣らせたものだ。秋の日は驚

くなかれ一日一俵の實行である。今も思ふ、何とかして青少年諸君に飯だけは滿腹する程食はせたいものだ。食はせなければならぬと。

終りに同窓諸彦の御健闘を祈ります。

## 光井文武

明治三十八年、即ち日露戰爭の第二年目から約十箇年、二種講習科生を振出しに、本科生、附屬の訓導と、青森師範は教員私の芽生から開花まで徹底的に育てゝ下さつた園丁であり慈母である。あれから三十數年、日本の北の果から南の果まで、此處に三年彼處に五年と、轉々漂浪の生活を續けて、身も心ももう苗床青師の庭を離れ、慈母青師の懐を忘れてしまつてゐる筈である。だが併し北海の空に阿寒の雪嶺を仰いだ時にも、西國の島端に南海の碧を眺めた時にも、きまつて繰展げられるは若き頃の心のアルバム、それに藏めてある甲田の峯であり、青灣の浪であり、そして又其處に立つ學び舍、教へを受けた舊師の方々、共に育てられた友の面影である。

青師十箇年のわが若き日の生活、その總てが美しいものばかりではなかつた。樂しいものばかりでもなかつた。津輕と南部と分れ爭うた封建時代の名殘の幟風と、小政畧家等の野望の道具に使はれた校友會のいざこざなど、あの當時でさへ嫌氣がしてゐた。先生への反抗を英雄的行爲のやうに褒めそやした不心得と『豚―猿け―蛸――』など醜惡な綽名でなければ何れの先生をも呼ばなかつた惡風とは、何處の學校にも有勝のことながら、わが青師の昔にはそれが極端にひどかつた。それこれどんなに先生方の心を痛ませ、我等自身の魂に瑕つけたか知れない。一日の課業から放たれてホッとなつた時、心合ふ友三四、餅屋の四疊半に談笑する味は格別であつた。けれどもあの爲に一生涯の胃弱者とならないで濟んだ人は果して何人あらうか。あの當時の校舍のあつた今の縣病院の敷地は、其の昔、藩の處刑場の跡であつたとかで、校庭の隅からは時に人骨も出るし、雨のそぼ降る濕つぽい夜なぞは、×寮の便所のほとりに青い亡靈火も燃えると云ふので、臆病者の寢小便の原因となつたと云ふ笑話の眞僞は別物として、古い豚小屋その儘の食堂と、たそがれ頃から臭ひ初める田圃の向ふの人燒く煙とは、どう見ても美しいものゝ數に入れるわけにはゆかぬらしい。掘り立てるとまだ澤山美しからぬものが在つたかも知れない。併し三十幾年の歲月は邪惡な動機の一切を煙滅し去り、醜穢な環境の悉くを拂拭し去つて、今はもう美化され、淨化された快よいもののみが殘されてゐる。甲田山上月澄む南寮の檜端はこよない美しいものとして浮



んでくるし、アカシヤの花匂ふ東寮の窓邊はたまらなく床しい思出であるなどは其の例である。

『……此の私が優良教員だと云ふので選賞されたのであります。不肖な私、過去十幾年間生徒諸君の反感に反感を買つた外、何事もなし得なかつた私が……』と涙に咽んでしまはれた木梨先生の文部省から選賞された時の御挨拶と、全學園の若人の赤い血の誓約が、全校生徒のストライキを未然に防いだことなどは忘ようとしても忘れられぬ清い感激の思出の例である。

『先生、着物のケッツさ、糞がついてるんです』

『ウンニヤこれは卵が毀れたんぢや』

獨り生活の無精も手傳はれたことであらうが、一枚より持たない單衣に卵を包んでゐたのが毀れて、そのまゝそれを引かけてクラス會にこられた石坂先生の豪快振りが思出される。顏貌と云ひ、生活と云ひ最も仇名がつきさうで終に仇名無しで通された、たつた一人の先生は此の先生であつた。それは先生の卓越した數學の教授に生徒殘らずが敬服してゐたからでもあらうが、凡そ生徒は小さく完成した大人よりは、線の太い未完成の子供らしい大人と共鳴をもち、上にあつて登つて來よと呼ぶ教師よりは、手を繋いで共に歩いて行く教師からより大なる感化を與へられる眞理を此の先生によつて示して頂いた氣がする。

私自身教員生活三十幾年、悔恨の跡のみ遺してきた中にあつて、只一つよかつたことは神を信じさせて頂いたと云ふ事實である。その意味で感謝するのは信仰の師今力太郎先生であり、神に在る床しい人格の香は、舍監室裏のあの老梅の香と共に今もなほわが圍りに漂うてゐるやうな氣がする。

教員生活の得意の時にも、失意の時にも、子がその父を思ふが如くに忍ばるゝは壇場、佐々木、鹿島の諸先生である。教員吾等に、否な特に私に、最後の燒きを入れて世に出して下さつたのは何と云つても、此の三先生である。刀匠三師は揃ひも揃つて名工であられた。併しわが天性の鈍物は如何ともし難く、僅に子達の玩具に賣られ賣られて將に錆び果てようとしてゐる不肖を省みて感慨切なるものを覺える。

かうして感謝すべき先生方の思出で、次ぎ〳〵と盡きさうもなく、加へて懐かしい舊友の事どもを書くならば本誌を悉しても尙ほ足りないであらう。げに思出で深き吾等の母校よ。母校は今年滿六十歲の誕辰を迎へて、過去の輝しい光榮を記念すると共に、更に百年の新しい生命に向つて邁進の首途に上らんとしてゐる。願くは溢るゝ祝福愛する母校の上にあらんことを。

# 在職中の思ひ出

鹿嶋清治

二十年前のことでした、開墾したのは一町歩で學校の門前でした。千代谷君、吉岡君等と教生諸君と高等科兒童と新に附設された農業補習學校の生徒達の努力によつて出來た。肥料としては附近の風呂屋から木灰を貰ひ集め、牛乳屋から厩肥を貰ひ集めました。造道邊まで出かけては雜草を毎日一人につき五六貫目づゝ刈らしめたのではなく、拔き取らしたので根附きの草、それを堆肥の材料としたのです。堆肥の山を築いて發熱して來るのを、樂しみにして居た。作物では馬鈴薯と南瓜が上成績でしたよ。

朝早く起き出でて、縱横の大道は三尺幅小徑は二尺幅とした蓼然たる此の實習地を見舞ふことは迚も嬉しかつたですよ。今朝は南瓜が何百かついた樣だ、などと云つて夢中になつて嬉しがつたものです。大正九年に轉任後十六年間の女學校生活に於いて、生徒に畑を耕さしめることは必ずやりましたが、これは青森に於ける體驗に基いたものゝ樣です。或る學校では僕の轉任後もこの施設を繼續して居るのもあるのですが、或る地では大都會の中央に近い地に肥溜を設けるとは何事だ、鶏三百羽、兎數十も多過ぎる、隣近所の迷惑も考へて欲しい、生徒の手足が百姓の樣になつて仕舞ふと批評を受けたこともありました、何卒御笑ひ下さい。

青森に於ける開墾地、砂地、廢物利用の肥料、作物上の出來、第五聯隊に收穫物を納めたこと、得たる數百圓で兒童一同と共に弘前に花見に出かけ、津輕富士を眺めた時の氣持は大變好かつた。當時御指導を頂いた鳥類研究の大家和田千藏先生、又當時この農場に關係せられた諸君によろしく。



# 田中順

拜啓　御校は今回創立六十周年に相當り、來る十月には盛大なる記念祝賀式御擧行被遊候事と相成り候由、誠に慶賀之至りに不堪候、維新草創の際より文化に遲れたる、東奥の地に在りて、育英の源泉となり、卒業生には幾多の先覺者を輩出し、之が向上に盡されたること偉大なるものあるを感じ申候、小生儀は大正七年より四ヶ年間蓮場、野島兩校長時代、御校庶務課に勤務の榮を有したる者にて候が當時は浦町より移轉して幾何もなく、造道練兵場は東に連り、校舍前面は學校の農場にて、八甲田連嶺を背景とし、校舍外端麗閑雅、一見して教育者養成の學校たるの風格を帶び居り候、獨り其の外見のみならず其の內容に到りては一層充實致し、謹嚴重厚にして、然も頭腦犀利なる蓮場校長の下に、多分に水戸武士の血に燃ゆるが如き遠山教頭、溫厚慈父の如き渡邊舍監長、熱烈火を吐くが如き鹿島主事あり、其の他年少氣鋭の教官之を支援し、全く上下一體となりて教育精神に燃えをりしやう觀取せられ候、殊に前田之次、三浦三義人、秋葉祐之の諸氏は新進氣鋭潑剌たる元氣にて、生徒渴仰の中心たりしやう見受けられ候、秋葉氏の如きはマラソンの走法を實地に示し、生徒體育の啓蒙に甚大なる好果を齎したるものと好ぜられ候、又附屬小學校の訓導の方々には多士濟々或る意味に於ては本校教官を凌駕するの觀さへ有之候、所謂口も八丁、手も八丁といふ方方にて、石戸谷直一郎、秋田賢吉、金澤七五三二郎、千代谷元太郎、工藤直三郎、齋藤豊明の諸氏の颯爽たる英姿今尙ほ記憶に新なるもの有之候。

之を要するに當時の御校は恐らく他の何れの時代に比するも決して遜色無かりしものと信ずるものに御座候、其の後も勿論御校は益々其の內容外觀御發展のことゝ存じ候も此の上とも尙ほ一層我が鄕里育英の向上指導に御力を盡されんこと冀望して止まざるものにて候。茲に御校六十周年記念祝賀に當り、些か蕪辭を述べて祝意を表する次第に御座候

昭和十一年九月二十九日　敬具

# 青森縣師範學校創立六十周年を祝し在職當時を偲ぶ

長野縣大町中學校　須甲理喜

私が青森縣師範學校に一教員として在職したのは大正九年の三月から十一年の三月までの滿二ヶ年間で野島校長の時代でありました。

顧みるとそれからはや十五年の星霜を經て創立六十周年を迎へる樣になつたことは誠に慶賀に堪へません。どうか此の還曆を期として今後一層校運の隆盛ならんことを祈り上げます。私が長崎から青森に着いたのは三月の三十日で住宅の都合で一時浦町の家に入りました。初めての土地ではあり近所の人々から何かと親切に世話をしていたゞきました。人情は極めて純朴で親切なのに安心したのでありましたが何分にも言葉が通じないのには殆ど閉口しました。

其内學校に近い浪打の住宅に移ることが出來て初めて落ついたのでありました。學校では教務主任で暫くの間は舍監をも兼ねて居りましたので專ら學校内部の事に力を注ぐことになつたのであります。生徒はなか〳〵元氣で鼻息が荒かつたが併し第一印象の通り根が純朴でありますから話も能くわかり命令にも能く服從する方でありました。

初めて寄宿舍に泊つた時室長全部が舍監室に集つて新舍監長の方針を承りたいといふことでした。その元氣が面白く亦意志疎通の好機會だとも思つたので一時間ほど考を話したのでありましたが理解もはやく且はつきりして居るので實に愉快に思ひました。當時一方に自治を叫ぶと共に命令となるとよく服從する風でありました。運動に對してはなか〳〵元氣で武道の寒稽古などには出席率もよく大正十年の一月には阿部、岩瀧、奥崎などの君が一度に初段を獲得したので野島校長も滿足されたことがありました。何といつてもあの頃愉快であつたのは授業でありました。受持は教育史で質問も相當あつたし又興味を以て聽いてくれたからであります。

又今も尙思ひ出すことは一般に音樂に興味を持ち唱ふことも上手であつたことであります。これは音樂の先生釜萢君の力にもよりませうが一般に地方的の特徴の樣にも見うけました。大正十年の四月十六日でありましたがヴアイオリニストの蒲池鋼三氏が師範の講堂で獨奏會を開いた時などは千餘名も入場者があり、十一年の一月十五日にボーランドのマンドリニスト、イヴアン・コバルスキー氏の獨奏會が歌舞伎座で開かれた時など、實に盛んなものでありました。生徒は勿論皆謹聽したものです。釜萢君は當地方の發音を正しくするには、文字の上で喧しく教へても効果はない、音樂の方から發音を正し、當地方にない音は之を耳から教へ込んで行つたならば有効であるといふ一種の矯正法を有つて居られたが、其の結果を見ない内に、はやくなくなられたのは惜しいことと思ひます。

海に接した合浦公園の景色、學校から近い海水浴場、淺蟲の溫泉、八甲田登山と酸湯、内眞部の森林見學、町のねぶた祭、新城のスキー會等思ひ出は盡きない。併し雪の深いこと、吹雪の强いこと、交通の困難なこと、など苦しみも多かつたが時の經つにつれて苦みの印象が消えて樂みの印象が殘る傾向のあるのも面白いことゝ思ひます。

青森在住中の腰折れを手帳の中から拾つて見ると、

天に銀河地に銀世界松青し
不言實行いつ積つたか今朝の雪
取つぎに出れば人なし雪の風
淋しさや丸半年を雪の中
櫺をひく馬よ寒かろ向ひ風
名もなくて心安さや冬籠り
待て吹雪今は子供のかへる頃
吹雪して隣は酒の笑聲
殊更に清く見えけり雪の川
そこ追ふな吹雪さけるかりの宿
雪垣をとる喜びや春の庭
南國に見ぬ喜びや春の土



## 森　庸　三

諸君は大抵、山路愛山氏の文、「甕中に在る者は甕の大小を知らず、身を轉じて甕外に在り、始めて甕の全形を知る。故郷懷しとは、現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。云々」といふのを讀んで居られるだらう。予は青森縣に生れ、青森縣に育てられ、最初に御校に奉職し、而も十數年の久しきに亘つて御世話になり、御蔭で漸く一人前となつたやうなもの、それから數年八戸中學校に奉職したが、前半生四十年間といふものは、青森縣にばかり養はれ、はぐくまれて來たものであり、從つて、他郷に在る現在の自分から眺めると、予の青森縣時代は實に感興と愉悅の連續であり、懷しき慕はしさのつながりであるといつてもよい。

今回御校が創立六十周年記念式を擧げられるさうだが、誠に懷舊の情禁じ得ぬものがある。今當時のことを回顧して見るに、今の縣立病院の處から今の校舍に移轉する時の事、萱場校長時代の强行遠足——津輕半島横斷、夏泊半島一周等の事、野島校長時代の御茶の會の事、鶴岡校長時代の全校マラソンの事等、當時の面白かつた事、苦しかつた事も今は皆昔の夢、悉く美化されて髣髴として眼に浮んで來るやうである。何にせよ青壯年時代の十數年間だから忘れる事の出來ない追憶である。

予は當札幌に昭和四年から來て居るが、當地に「青森縣出身の教育者及び教育者たりし人の集り」があつて、時に應じて舊情を溫めて居る。中心になつて斡旋してくれる人は大正五年の卒業生三國正君である。萱場校長が札幌師範學校長であつた時などは、隨分盛んで教頭の三浦三義人君（現酒田中學校長）も居つたし、藤高女教諭早坂義雄君、札幌一中の長内公男君を始め市内の小學校長訓導等又遙々小樽からも參加があり、十數人も集つて盛んに懷舊談に花を咲かせたものだつた。

當地に來て色々感ずることがあるが、先づ一つ述べて見ようと思ふことは、札樽間の學生の相撲の盛んな事だ。青森縣殊に津輕地方は一般青年の間には隨分盛んに行はれるやうだが、學生間には殆ど行はれてゐない憾があるではあるまいか。校友會等に相撲部などが何處にもあるまいと思ふが、札幌小樽ではそれは〳〵盛んなもの、毎年五月の下

旬には大會が行はれる。リーグ戰だ。札樽の十の各校から五名の選手が出て、採點し、覇を爭ふのだ。出場者も應援者も觀覽者も實に熱烈なもの眞劍なものである。

野球の如きは全國殆ど同じやうに盛んだらうが、札幌地方の程中等學校の相撲の熱心に盛んなところは、そんなにあるまいと思ふ。之が札幌小樽の各種競技の皮切でもあるので一層花々しく、又人氣もあるのであらう。津輕地方の相撲、南部地方の馬」といつて古來有名なものだ、一つわが青森縣中等學校相撲大會といふものが創設されないものだらうか。

先は創立六十周年記念式に當り、簡單ながら、日頃の疎遠の御詫旁一書を裁した次第である。

# 追憶三題

谷山成章

師範學校が今の赤十字支部の地點に在つた明治十二年に、私は鳴海清洪、西村八次郎君ら二十九名と共に速成科に入學した。學期試驗の作文の時間に突如教室へ現はれたのは時の校長（初代）藤田先生であつた、輕く默禮して黑板に「權利義務」と題されてさつさと去つた。案外の文題に一同ぶつ〳〵零しながら辛うじて纏めた。數日後成績表が掲示されたのを見ると、法律思想の豐かな鳴海君の作文が七點で成績に粘り強い西村君が五點五分、さういふ私はモツケの倖ひで滿點を頂戴した。「自分の味噌を手柄顏に擧げる奴があるか…」と御叱りもあらうが、この事あつて以來卒業まで無難に首席を獨占したのであつた。

○

私は下北郡川內町長をしてゐた大正八年一月初旬のことである。縣會議事堂に於て五日間青年團指導員の講習を開始された。私は八戸方面の石田正太郎氏らと師範學校寄宿舍の第十室に御世話になつた、舍の食堂で賄方を呼んだのは明治初年後始てゞあつた。寒威の緊しい三日目の午後八時半頃、闥を排して入つて來たのは羽織袴の莹場校長である、私等の寒中修養をねぎらふべく態々見舞はれたのであつた。その時の御言葉に云ひ知れぬ先生の人格のひらめきが、深く私を感激させたことは、未だに忘るゝことは出來ない。先生今尙ほ健在でゐらるゝか、何うか聞かま欲しく思ふ。

○

禿頭から湯氣ぼやの張間（多聞）さんのスキー姿を當時



よく見たもんだ、流石に本場の高田で鍛へたご自慢だけに妙技でもあつた。が、その後それが主因でもあるまいが故人となられた。白毛混りの髭に海水着の山內（元八）さんが、老體を合浦の潮に浸して、水泳を指導してゐるのを見た。その後それが主因でもあるまいが故人となつた。師範の全校生徒のマラソンが恒例に依つて擧行された、時の校長鶴岡さんが生徒に交つて眞つ蒼になつて百二十六着だつた、そして間もなく沖繩へ轉任になつて、それが主因でもあるまいが故人となつた。スポーツといふものには年齡、體力、健康、場合などを考慮するものでなからうか。

聚

芳

# 遙に御祝ひ申す

明治三三・三・卒業　三國谷三四郎

○ 謹みて母校創立六十周年を御祝ひ申上げます。御式典には是非、參列の光榮に浴したいと、念願いたして居りますが、その頃は學校行事輻輳の時ですから、或はその意を果しかねるかも知れませぬ。豫め御寛恕を御願ひいたします。

○ 今年創立六十周年を迎へた師範學校は全國に相當多數ありましたが、私が現に奉職して居る京都師範もその一つであります。尤も今年は色々の都合で、式典を内祝ひ程度に止めましたが、私の現住校が私の母校と同齢だといふとが、一種の感銘を私に與へるのであります。加之、私共が母校の御世話になつて居た當時は、京都師範關係の諸先生が、戸野先生、横田先生を、お初めとして可なり多かつたので、この際の私の感銘が、一層切ならざるを得ませぬ。不思議な因縁で私は今、舊師への御恩返へしに、京都師範のために微力を致して居るやうにも、思へてなりませぬ。

○ 母校を巣立ちしましてから、茲に三十有七年の歳月は流れ去りました。夢の如くであります。當時の同窓諸氏とは全く消息を絶ち、東西各地を遍歴して、今日に至りました。異境に在つて學ぶ所多かつたやうに思ひます。母校在學當時の私は、耻かしくも煩悶の子でありました。その性格に運命づけられて、私はその後も、苦しみ、戰ひ、鍛へ辛うじて明るい世界を發見することが出來ました。

○ 小學校から大學まで前後十八年の私の學校生活の中で師範教育の恩顧を受けたこと八年であります。生涯の道はこれによつて確立せられたのでありますから、私に取りましては師範教育は恩義深いものであります。私が今、受難時代の師範教育のために最善の努力を注意いたして居りますのは、往年の恩義に報いんとする、至情に外なりませぬ。

（昭和一一、九、六）

## みちのく山

明治三六・三・卒業　和田山蘭

山松の幹あか〳〵と並立てり
朝の雲居るみちのく山に
なつの朝の曇ふかくも垂込めて
青海原は鷗なきなく



朝の汽車松原ぞひに走るとき
啼きつゝ鷗うみに消えゆく
波青き合浦が浦のあきかぜに
琴かきならす老松がむれ
みはるかす青森灣の波の秀に
斗南が山は洗はれにけり
なにとなくふるさとに來し心地しぬ
驛のホームの青波をみて
おと立つる青田のあひのさゝ流
くさ〴〵の藻の搖れてすがしき
白露をかぶる青田は岩木嶺の
すそまでつゞく夏のあさあけ
みてをれば心もすがしぎぼうしゆの
廣葉にむすぶあさの白露
逢はざればうとまれもする相逢へば
むかしながらに親しなつかし

## ある先生の思ひ出

明治三九・三・卒業　雪村生

私が尋常一年生として入學したのは明治二十四年の春、その當時は今と違つて、學齢兒童の中には父兄母姉に附添はれて通學する樣な新就學者が少くなかつた。私も就學後の二三日間は、祖母に連れられて學校に通うたらしい。中には夏休近くまでも父兄に附添して貰うた者もある樣に記憶してる。何でも就學第一日目は、町の方々から集つた鼻垂小僧ども四五十人、一と教室の中に收容されて、家庭とは大部樣子の違ふ教室内で、ガヤ〳〵として心が落着かず、中には泣出すヤツもある。そのとき教室に二枚ある黑板に、向つて右の方には大きく「イ」と書き、左の方にも大きく「い」とチョークで書いて、何か先生から教はつたことを今でも瞭然と覺えてゐる。

尋常一年の時の最初の先生は、本校尋常師範第一回出の船場永太郎先生であつた。先生は其後二三年して他村の小學校長になつて、一時轉出された爲に、其の間は別の先生に受持たれたけれど、後又母校に歸任されて、再び私共のクラスを受持たれ、それからずつと持上りされたので、私は小學校在學の六年半の大部分を、船場先生から教つた。それで、先生と言へば他の人でなく、獨りでに船場先生の溫容が眼前に髣髴して來て、先生他界後數年の今日でも、涙が滲む程有難く懐かしく思ひ出される。

私は、今日では年も取つて居るから、容易には地金を出さんけれど、少年時代のことを省見すれば、自分ながら腕白小僧の一人であつた樣に思ふ。尋常三四年の頃であつた

と思ふが、習字の時間に先生が一寸教室を外して何處へか行かれた留守の間に隣席の釜澤某君（この人は算術のよく出來る子であつた）と些少の事から爭ひをし、互に手に持つた筆で顏に墨の塗り合ひをして、純系インド人見たいになつて居た所へ、先生が教室の外から戻られた爲に、早速宿直室へ連れて行かれて、小さい爐を間に夾んで、嚙んで含める樣に惇々と訓誡された。既に平靜に復して自分の惡いことを自覺して居た私は、先生が涙を溜めて懇々と說き聞かされる誡を聽いて、心底から自分の輕擧盲動を悔ひ、再びこんな事はすまいと心に誓つた。それから四十年以上も經てる今日でも、その當時の船場先生の溫容から、當直室の內の有樣、立ててあつた障子の古びた紙、弱々しい日光の明さ等が明瞭に思ひ出される。

それから二十年後、私は師範を出て三戸小學校の教員となり、以前より在職の先生の下に附いて教鞭を執ることになつたが、その當時まで校長として居られた先生が、學校內の不祥屢出の責を引いて平訓導に下げられ、上には他から七八歲も年若の校長が赴任して臨んで居り、先生の境遇に對して私は實に何とも氣の毒に堪へず、不祥頻出の裡に校長にのみ責任を負はして、平然として居らるゝ先輩諸兄に對しては、心の裡には尠からぬ義憤を藏して居たものであつた。而し新米の私風情の微力如何ともするとが出來ずに、その內に文檢をパスして、女學校の教員となつて他地方へ轉出してしまひ、終に先生に何一つ報ゆることなくして了つたことは、思ひ出す每に臍嚙の恨として殘つて居る。

先生は、其の後復活の氣力をも失はれたもの乎、次第次第に小さい學校へ〳〵と轉勤されて、あの高潔な人格と溫厚なる資性とを有たれて、一生を兒童教育に獻げられたにも係はらず、何處からも何等酬ゐられることなしに、晩年を淋しく逝かれたことは、先生としては不平不滿なく莞爾として易簀されたにしても、私としては天道是乎非乎と叫びたい衝動に驅られてならんのである。

## 所感

明治四〇・三・卒業　馬場正太郎

今日（十月廿五日）本縣師範學校の創立六十周年を迎へるに當つて、明治卅九年、前期教生時代の狀況を述べて當時の思出とせんとす。（小生等は明治四十年三月卒業なれば本年で三十年目に當る）

當時高三四男の複式學級受持訓導荒谷元一先生の指導の下に、同期生成田、原田の兩君と三名配置せられて訓練を



受く。

その時の生徒に、池上、伊藤、横山、渡邊、武內、奧寺等の諸氏ありて何れも成績優秀且辯論の達者なる一流の者ばかり揃つてあつて、受持の訓導も教生も質問攻めにあつて泡を食うたものである。

又授業時間中にはよく本校長、教頭、理科の先生等は參觀せられて大いに刺激を受けた。

今や當時の生徒は立派に成功して社會の爲に盡して居ることゝ喜ぶ。

二回目には尋二に配置せられ受持訓導故兒玉先生の指導を受く。

級中には天城、神成、川口諸氏ありて、之は低學年なるを以て何れも溫厚なるもの許り。

某日、綴方の時間の終りの振鈴が鳴つたので、次の時間の關係上、模範文を板書して之を書きとらしめてあつたのを急いで消したら、天城氏めそ〳〵涙を流したものだからその理由を聞くに、此の綴方を書いて家へ歸らぬとお母さんに叱られるとの事であつた。そこで小生再び全文を板書して寫さしたることとあり、この位の生徒であるから今日は立派に成功してゐることと思ふ。

神成氏は明治卅五年正月八甲田雪中行軍凍死者の一人故神成大尉の娘であつた。

その生徒を見ると何時も陸奧の吹雪の花と消えた凍死事件を思ひ出して、うたゝ涙を流したものだ。

今春圖書の整理に當り凍死事件を書いた書物を發見せし故に第一に神成大尉の頁を開いて見たのであるが、その大雪と奪戰して道を迚つた事を見、涙流れ又々當時の感を深くした譯である。その時の神成さんは今は何處に居らるるか。

創立三十周年記念の時は、小生師範學校生徒時代、同四十周年記念の時は斗賀小學校奉職時代、同五十周年記念には是川小學校奉職時代、今日六十周年記念は現大向小學校に於て迎へたのであるが、先づ、その師範學校の高恩を謝すると共に、卒業以來最早三十年を經過して段々心細くなつた事を知る。

一榮一落之春秋の感あり、當時の思出の一端を述べて感想とす。

## 隨筆よしなしごと

明治四〇・三・卒業　鳴海要吉

歌をとのことですが、適當なものがどうしても思ひつき

ませんので、隨筆といふほどにも足りないこの思ひ出話でおゆるしを願ひます。

×

青森師範を私の母校といひましても、私は本科の方でなく、第二種講習なので、緣も何だか薄いやうに思はれるやうですが、私には實際は懸替へのない大事な母校……といふのは、私は小學校も高等科（舊制の）…三年生へ足をかけたばかりと、此の講習以外學校といふものを履んだことがありませんので……ですから、その雜誌部からの、お需めには心からの悅びを以つて此の稿を認める次第です。

×

私のその受講は明治卅九年四月から仝四十年の三月末までの一ケ年で、まあ驚くぢやありませんか、ジツに足掛け卅年の昔になつてしまつたんですからなあ。秋田雨雀君も物の端に書いて居られる通り、その又二三年前の明治卅七年に、私は青森で同君と二人で島崎藤村先生を迎へたりして居るのです。その翌年の卅八年には、私は、島崎先生のお世話で先年亡くなられた田山花袋氏方の學僕に住み込み、それを止めてから、師範に入講したやうな始末で、餘りに波瀾の多かつた私の後生涯は御想像にも餘ることと思ひます。

×

私は昭和七年から此の方、制約の俳句と短歌とをやつて居ります。之を、世間は、鳴海は唯異つた事のみをやる男だと見て居るといふことです。うはべから見ては御尤もな判斷ですが、少しく、釋明を致しますと、制約といふのは皆んなに共通することを申すのですから、鳴海は實は少し異らないことをしたがり過ぎるのであります。はじめ短歌に口語を用ゐたことも、一般の言語と共通させたがつたのであるし、今後の音數を制約したことは又、俳句は俳句に、歌は歌に、成るべく多數に共通するやうにしたがつて居るのであります。自由律と稱して、勝手にやれば、偶然的には何かしら共通點はあるにしても、明瞭な共通點が無いのだから迚も非凡であるやうに見せかけることが出來るのです。それをさうはせずに、制約したのは、決して、異ることをして居るのでは無いのです。之をよく、認識過まらないやうに御判斷願ひ度いのであります。

×

實際、近代は、短歌にしても、俳句にしても、或は、西洋でも、支那でも、詩歌に對しては全く反制態度を至當のものとする傾向になつてゐます。之は皆な、共通を忌み嫌ふ、つまり、非共通に依つて、自己の存在を優越せしめよ



うとの我執的傾向の現はれであります。兎も角、私は、異の爲めでは無く、同の爲めにのみ、或は、極端の爲めではなく、中庸の爲めにのみ苦勞を重ねて來て居ることだけを茲に記して筆を止めることに致します。

—川柳—

## 『大樹の蔭』

大正七・三・卒業　山田芳麿

○

膨らんでゐるリュクサック子の力

○

附添は子の行くとこへ呼吸切つて

○

ランドセル逆さに背負つて可愛がれ

○

お隣の娘の編んだのを買ふバザー

○

お母さん子からきいてるメニューの名

○

特選画後手組んで見上げられ

○

姿見に冴えて嬉しい白い花

○

帶止めのずれて重さを認められ

○

惡癖の父に似て來て不肖の子

○

さんさんの秋の陽足に假睡める

○

子を連れて子の頃語る記念の樹

○

歡びの靴先き板目眞直ぐに

○

親が子に子が親を織ぐ六十年

○
六十年記念ポスター歩を奪ひ
○
風雪に耐へて大樹の廣い蔭

## 訪恩師湯淺先生

大正九・三・卒業　神　正夫

佛のごと師は老ひませり雪ふかく
よろこびの炭つぎ給ふ手のやせて
雪の夜のすこしの酒を師と酌めり
ひそかにも師と居れば足る夜の障子
雪のごと淨かれと師はのたまへり
遠い思出よぶかた火鉢撫で在す
逝ける名を灰に書かれて息のめる
お別れの言葉に寒く師は笑める
見送りの師の影枯木と立ち在す

⊙

師の御靈お彼岸日和を安からむ

## 祝歌

大正一五・三・卒業　八島登茂男

六十路ふる我等が母校尊けれ
今日の記念にことほぎまつる
ゆくさきも松の翠と末長く
幸いのるかな我等母校の
たふとけれ教への光あまねくも
あがたをてらす學舍なるかな
雄々しくも久遠の望みふり翳し
若き學徒のつどひにけるも
窓近く八嶽仰ぎ目のまへを
まへわたる船けしきよろしも
久かたに筆とる我は喜びに
おのづとふるふ菊薫るの日



## 金襴集

山の茶屋さかり櫻の間に見えて
そゞろ歩きの晝の公園
雲こめて烏帽子山は春さむし
蔵の里に花の見えけり
山の上雲のひろごる朝まだき
啼くや小鳥のいとほがらかに

## 夜の空

昭和五・三・卒業　千葉菁實

夜の空にほのと黄ばめる銀杏の葉
枯葦に棲めるものあり音しをり
幾つかの柿に夕日が照ってをり
ひともとの木のあたゝかき枯野かな
菊枯れて家裏の月見るべかり
洲のあたり飛ぶ鳥影を秋ともふ
ぼう〳〵と枯木がつゞき旅はなほ
蟻が狂ふ白きはみのともしかな
千鳥啼くなり岸壁の風さむしろに
川の風歳市のあと吹いてをり

## 四季の雜詠

昭和五・三・卒業　福士秀治

— 春 —

うら〻日に雪とけ初めし山腹は
尖れる笹のゆれて光れり
やまの溫泉の晝の日射にそこはかと
鶯なきてゐたりけるかも
岩代の旅はしづけし霧雨の
けむるが中に大寺とつく　（大寺驛）
信濃川に今宵星くづ多きかな
宿のゆかた着てたも通るなり　（新潟）

— 夏 —

街路樹の青葉すがしも雨あがる
舗装通りを下駄ならし歩まむ

眞弓なす夕空けはしはろ〳〵と
雲迅りゆく日本海の浪　（小泊）

もどりこのねぶた囃子の聞ゆなり
夕影淡きこの町筋に

赤椿朽ちてこぼるゝさ庭べに
あまりに強き日の光かも

— 秋 —

田のあぜの小川越ゆれば廣々と
南瓜枝豆はぜ黍の畑

くもり空ゆ風吹きくれば柿の木の
葉がくれにして柿のつらなり

子供等と繩飛びすれば秋晴の
夕空遠く光り照りつゝ

子と遊び一日疲れて歸るさの
夕日の町は目に泌みるかも

— 冬 —

冬枯の木立かすめて潮騒の
折々するは寂しかりけり

わがさせる傘にころがる夜の霰
白くはぢけつみちに散らばふ

音たてゝ割れたる朝の寒卵
食うべて今日も安くあれと念ふ

繼ほしかるふるさとの山日かげりては
だれ見ゆるもなくさまなくに

— 子供 —

白きラインのさ中に立ちてスタートの
構へゆゝし兒今躍り出んとす

うつし世に拗ねる心を子供等と
一日笑ひつ慰めにけり

父あらばたぬしかりしをと敎へ兒の
しみ〴〵書くはかなしと讀めり

盜癖の子にま向へばはげしかる
心おのづと涙出でたり



# 掌の蛙

昭和七・三・卒業　伊藤翠雨

元旦の雪をにぎれば融けにけり
干足袋の吹かれてゐたり荒るゝ海
雪つけて犬の乳房のゆさり〳〵
薄氷川の色して晝となり
雪解の仔牛は洟をたれゐたり
土の香の水へあふれて春めける
微笑はぬるめる水の底にあり
濡れ蛙背を夕日に流れけり
掌の蛙喉ヒコ〳〵と我を見る
郭公はわが行く路に消えて鳴く
砂原のところ〴〵の青草は
青嵐山羊鳴く聲は白くして
野の溫泉夏の小虫のむくろ見
梅食べてすつぱい顏に日は盛る
炎天や死にし魚の目厭ひけり
ビールぬく音のはしれる凉しくも
向日葵の色のかはりて日落ちぬ
みもごりびと花火明りを歩きゐし
とんぼうを嚙んでしまひし馬の顏
聲嗄れて小鳥がさわぐ暮の秋

# 六壽年

菊池梧郎

まだ伸びるポプラや茲に六壽年
行く程に末廣がるや花の道
亀の子の這ひ出してより六壽年
年を經て枝振もよき櫻かな

立ち.かへる秋や目出度六壽年
一めぐりして歩み出づ初暦

# 六十年

長尾文武

金風颯々と吹きあふるる
野山には穂波なす芒のゆらめき
皎月の桐の葉かげに宿るこの時
齢をとゝに重ねる六十年

春柳冬雪過し來て
入りかはる紅顏の學徒の群
幾十百の翼のはばたき
大空に舞ひ上る千百の鷲鷹

日本男兒の意氣を示して
華と咲く櫻燃え上る躑躅の如く
薫芳の花園菊華の輝き
あゝ無上の其のいさをしよ

東北男子の意氣はこゝに
青師健兒の名は芳しく
あゝ大いなるかな青森師範
伸び行かんかな我等の師範

雜

報

# 事業計畫日誌

# 事業計畫日誌

○ 昭和十一年五月七日
同窓會長ヨリ母校創立記念大會開催ニ關スル打合會開催ニ付書狀ヲ發セラル。

○ 五月十一日
教育會館ニ於テ記念事業ニ關スル同窓會ノ相談會ヲ開ク、西館彌輔氏提出ノ原案ヲ協議シ役員ヲ決定ス。

○ 五月二十二日
決定サレタル役員ニ對シ同窓會長ヨリ書狀ヲ以テ夫々委囑サル。
（委囑サレタル役員ハ後ニ記ス所ノ實施明細書ト重複スルヲ以テ省略ス）

○ 六月二十三日
記念事業專前總會ヲ本校會議室ニ開ク、各役員委囑後第一回ノ會合ニシテ全般的ニ協議打合ヲナス。

## 齊森縣立師範學校創立滿六十周年 記念大會實施案

會長　熊谷美登利
副會長　原子康一
總務　田向初三郎
總務員　菅沼貴一　石場正敏
西館彌輔　野呂匡
白石信一　齋藤豊明

以上ヲ以テ主腦部トナシ、全般ニ關スル督勵實施ノ責ニ任セシム。

### ◇準備諸掛

專前諸準備ノ分担ヲ明カニスルコト左ノ如シ。

(1) 總務部
部長　田向初三郎
部員　西館彌輔　石場正敏



齋藤豊明　坂本功
白石信一　澤田平十郎
古川德松　田浦安次郎
窪田春吉　原子康一
笹井正太郎　工藤直三郎

分掌事務
一、諸計畫並其ノ統制
二、資金調達
三、費用分配
四、傍系的催物ノ交渉
五、會計
六、調度
七、諸印刷
八、其ノ他、他ノ係ニ屬セザルモノ

(2) 調査部
部長　菅沼貴一
部員　岩藤卯一郎　中道武雄
兒玉一郎　上田常三郎
藤島常夫　今井六哉

分掌事務
一、記念誌編纂
二、名簿編纂
三、招待者調査決定
四、大會出席者調査
五、宴會出席者ノ勸誘及調査決定
六、表彰者調査決定
七、職員ニ對スル記念品ノ調査並調達
八、祝詞、祝電、寫眞ニ關スル一切ノ事項
九、庶務（文書往復並保管）
一〇、其ノ他調査、斡旋、交渉ニ關スル件

(3) 實施部
部長　野呂匡
部員　白石信一　宮川隆治
兒玉一郎

分掌事務
一、當日諸係ノ事前準備ヲ督勵シ、其レガ細部ニ亘リテノ方法、計畫ヲ立テシム
二、事業運行ニ關シテ連絡ヲ密ナラシメ、蹉跌、齟齬ナカラシム
三、實施部各部ノ會計ニ關シテ統督ス
四、部長ハ必要アレバ總務部ト協議シテ新規ノ事業計畫ヲ實施スルコトヲ得

## ◇當日諸掛（●印ハ主任）

當日諸係ハ事前ニ於テ當日ノ諸準備ヲ完成スルモノトス

(1) 總務部（本部ヲ事務所ニ置ク）

部長　田向初三郎

部員　菅沼貴一　石場正敏
　　野呂匡　西館彌輔
　　齋藤豊明

分掌事務

一、當日備物一切ノ統制

イ、會計係

●齋藤豊明　澤田平十郎
　古川德松　窪田春吉

分掌事務

一、各部ノ支出ノ支拂並認定

ロ、庶務係

●上田常三郎　宮川隆治
　高田廣喜　古川德松
　小野健作

分掌事務

一、文書ノ受付、處置
二、通告ノ手續
三、各部ニ屬セザル裝飾
四、宣傳
五、物品ノ調達、返却、處置

ハ、進行係

●白石信一　西館彌輔
　上田常三郎

分掌事務

一、進行ニ關スル一切ノ事項
二、時ノ合圖、通告

以上三係ニ關スル費用ハ、請求ニ應ジテ總務員會議ニ於テ決定ス。

(2) 調査部（本部ヲ本校職員室ニ置ク）

部長　菅沼貴一

イ、接待係

●石場正敏　堀内芳藏　上田常三郎
　山田實　古川德松　近藤正
　中道武雄　船水みき　江刺慶子

分掌事務

一、受付、案内、接待、茶菓ニ關スル事項一切
二、來會者、參觀人ノ入口、下足ニ關スル件
三、入場者數ノ調査、誘導ニ關スル事項

費用　請求ニ應ジテ總務員會議ニ於テ決定ス



ロ、記錄係

●岩藤卯一郎　佐藤勇介　砂崎宏
　花田哲幸　神保三浦次男

分掌事務

一、記念事業各部ノ記錄ノ取纏、保管
二、祝詞、講演ノ速記ニ關スル件
三、事業各般ノ記錄
四、記念寫眞ノ計畫、實施
五、記念スタンプニ關スル事項

費用　請求ニ應ジテ總務員會議ニ於テ決定ス

(3) 實施部

部長　野呂匡

1. 記念式係

●小山內鐵藤　上田常三郎　古川德松

分掌事務

一、式場ヲ構フ、席配置、貼札、椅子、テーブルノ配置
二、裝飾ハ庶務係ト協議シタル事項ニツキ部長ノ指揮ヲ仰グ

2. 宴會係（兒童、生徒、祝菓ヲ含ム）

●藤島常夫　小山內鐵藤　工藤直三郎
　坂本功

分掌事務

一、宴會場ノ設備、裝飾
二、宴會ノ設計、實施
三、接待方法ノ攻究實施
四、オ酒ノ供給方（宴會場ニ於ケル即賣）
五、生徒、兒童祝菓ノ注文、分配
六、調査部トノ連絡

費用分配

1. 來賓接待宴會費　七五圓　百五十人分外ニ申込者分
2. 生徒、兒童祝菓費　九五圓
　計　一七〇圓

3. 慰靈祭係

●田向初三郎　今井六哉　古川德松

分掌事務

一、本年度分故人調
二、大慰靈祭施行方法ノ研究
三、式典一切ノ計畫
四、直會ノ計畫ヲ示シテ宴會係ニ委囑ス

費用割當額三〇圓
外ニ校友會、同窓會ノ經常費ヲ加フルコトヲ得ベシ

4. 生徒係

●眞田玉造

分掌事務

一、生徒ノ指揮、出欠調査

二、集合、解散ノ計畫

5. 會員係

●木村吉三郎　沼宮内哲四郎　渡部義雄

笹井正太郎　和田干藏　鎌田喜洋美

山屋不二夫

分掌事務

一、會員ノ受付、接待、誘導

二、慰靈祭、記念式當日ヲ含ム

三、菓子、湯、茶ハ會計係ヲ接待係トス

四、郡別出席者名簿作製

五、宴會券分配、宴會場誘導

六、接待係ヲ勤員ス

6. 來賓係

●石場正敏　關晴四郎　田浦安次郎

今井六哉

分掌事務

一、來賓ノ受付、接待、誘導

二、遺族ノ受付、接待、誘導

三、菓子、湯、茶ハ會計係ヲ接待係トス

四、出席者名簿作製

五、講師接待ヲ含ム

六、接待係ヲ勤員ス

7. 講演係

●菅沼貴一　岩淵憲四郎

分掌事務

一、講演者交渉

二、講師出迎、見送、案内、接待

三、講師謝禮

四、講師慰勞會計畫、實施、陪席者通知

費用、旅費、謝禮、慰勞　九〇圓

8. 記念誌係

●岩藤卯一郎　西館彌輔　齋藤豊明

原子康一　荒川謙治　田浦安次郎

分掌事務

一、記念誌編纂

二、登載記事蒐集ノ爲メ各部、各方面ニ交渉

三、登載寫眞ノ選擇

費用　印刷費、編輯費、寫眞費共　一、〇〇〇圓

印刷部數　二、三〇〇部

內譯、同窓會員　一、五〇〇部

生徒　三〇〇部

來賓其ノ他寄贈　五〇〇部



但シ會員寄附者　一、五〇〇名ヲ超ユル時ハ

一名ニツキ金五拾錢ヲ增スモノトス

9. 展覽會係

●西館彌輔　高田廣喜　宮川隆治

小山田七次郎　吉田辰藏　兒玉一郎

力石定吉　堀內芳藏　築山治三郎

荒川謙治

分掌事務

一、展覽會實施科目

手工、圖画、習字、農業、理科、理科實演、教育參考品

二、裝飾、室名、陳列品指示樣式ハ統一アルコト

三、展覽會場ノ割當方

四、參觀者誘導方

費用　校友會支出一六圓ヲ加ヘテ九一圓

從來實施外ヲ特展トシ此ニ五〇圓ヲ配當ス

特展係員ハ後ニ依囑ス

10. 音樂會係

●岸登佐美　山田實　長尾幸作

分掌事務

一、演奏方法、プログラム作製等音樂會一切ノ事項

費用　校友會支出六圓ヲ加ヘテ一六圓

11. 運動會係

●藤島常夫　及川正夫　松井七兵衛

會津定吉　川村源太郎

分掌事務

一、運動會運動方面一切ノ計畫實施、並寫眞

費用　校友會支出七五圓ヲ加ヘテ九〇圓

12. 表彰係

●原子康一　藤田四郎　上田常三郎

西館彌輔　柿崎守忠

分掌事務

一、本校勤續奉職者（現職員）及使用人ノ表彰ニ關スル事務並實施

二、教育會館功勞者表彰ニ關スル事項一切

三、現職員ニ記念品贈呈上ノ事項一切

費用　勤續表彰費七〇圓、功勞者表彰費五〇圓、記念品費五〇圓　計　一七〇圓

13. 名簿係

●中道武雄　大井晴雄　兒玉一郎

分掌事務

一、同窓會員名簿ノ訂正

二、記念誌係ト連絡シテ印刷ヲ打合ス

三、費用ハ記念史ト共通ス

14.
●小山內鐵腸　及川正夫
分掌事務
一、會場內ノ秩序維持ノ方法ノ計畫、實施
二、生徒ノ規律取締

15.
衛生係
●村上不二　和田千藏　濱田チセ
分掌事務
一、生徒、兒童、外來者ノ急救
二、場內飲食物ノ取締
三、食堂、賣店ノ商品檢査

16.
食堂係
●佐藤勇介　池田純治　築山治三郎
分掌事務
一、食堂ノ設備、設計、裝飾、運行一切ヲ含ム
二、食堂、賣店ノ商品決定
三、賣上歩合ノ決定收入
四、費用ハ獨立會計トシ、歩合收入ヲ以テ支辨ス
五、收入金剩餘アル場合ハ一般會計ニ繰入ルモノトス
六、初等教育研究會當日ヨリ開始ス　（以上）

備考
一、徽章ハ庶務係ニ於テ統一スルコト
二、物品購入ハ部長ノ指揮ニ依ルコト　（以上）

○昭和十一年六月二十六日
調査部ノ各役員ハ本校會議室ニ集リテ部會ヲ開キ、事務分担並協議ヲナス
○六月二十九日
本校會議室ニ於テ記念事業ニ關シ其ノ日取變更ヲ確定ス、而シテ次ニ示ス計畫書ニ依ルコトト定ム

## 青森縣師範學校 創立滿六十周年 記念事業計畫

### 檄

本昭和十一年ハ我等ノ母校ガ創立セラレテ滿六十周年、正ニ人生還曆ニ比セラル、ノ年ナリ。其ノ間人材ヲ送ルコト七千人、縣國文化ノ建設ニ寄與スルモノ甚大ナルハ誠ニ同慶ニ堪ヘザル所ナリ。我等同窓ハ義ニ教化ノ記念殿堂トシテ教育會館ヲ建設シ、以テ謝恩ノ誠意ヲ披瀝シタリ。今ヤ母校創立六十周年ヲ迎ヘ、過去ノ光輝アル歷史ヲ偲ビ、將來躍進ノ計ヲ樹ツルニ際シ我等同窓ノ教育報國ノ精神作興ト、後進人材ノ育成ニ重キヲ置カントス。

冀クハ本會ノ意ノアル所ヲ諒セラレ、奮ツテ右趣旨ノ貫徹ニ御後援アランコトヲ。茲ニ代議員會ノ決議ニ基キ、左記計畫書ヲ添ヘテ同窓生諸君ニ檄ス。

昭和十一年七月一日

社團法人 青森縣師範學校同窓會々長
熊谷美登利

母校創立 六十周年記念式日程

○記念大會行事日程——昭和十一年十月二十三日ヨリ五日間

| 月日 | 曜 | 行事日程 |
|---|---|---|
| 十月廿三日 | 金 | 初等教育研究會、記念展覽會 |
| 十月廿四日 | 土 | 初等教育研究會、慰靈大祭、記念展覽會 |
| 十月廿五日 | 日 | 記念式、表彰式、總會、記念講演祝賀會、記念展覽會 |
| 十月廿六日 | 月 | 記念音樂大會、記念展覽會 |
| 十月廿七日 | 火 | 記念體育大會 |

## 記念事業計畫

### 一、寄附募集

イ、募集金額　金壹千五百圓也
寄附金一口金壹圓トシテ千五百口募集
但シ宴會出席希望者ハ外ニ宴會費トシテ金五拾錢ヲ添ヘ申込ムコト

ロ、申込所　青森市桜町　教育會館內
青森縣師範學校同窓會
振替口座仙臺七六五七番

ハ、申込期日　昭和十一年八月三十一日

### 二、記念事業

（一）記念誌並會員名簿發行
寄附會員並記念日出席來賓ニ配布

（二）勤續者表彰
職員並雇員ニシテ十箇年以上勤續者十五名ヲ表彰ス

（三）記念式催物ニ對スル補助
本校々友會記念祝賀ノ催物ニ補助

（四）記念講演會
中央ノ名士招聘